

---

# バカとドアホと凶悪な顔

山崎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとドアホと凶悪な顔

### 【Nコード】

N63540

### 【作者名】

山崎

### 【あらすじ】

Fクラスに新たなバカが加わります。明久がバカならこいつはアホだと言ってしまうくらいのやつです。吉井姉弟と幼なじみで、姉のおかげで明久に負けないツツコミスキルを持っています。たぶん、楽しんでいただけましたら、幸いです。

誤字脱字等がありましたら、どんどん言ってください。あと、感想もすぐお待ちしております。

よろしければどうぞ。

第一問 新学年初日……五度寝しちゃって…（前書き）

バカテスやっど書き始めました。書きたいって思ってたんです。  
ずっと。

それでは、始まります。

第一問 新学年初日……五度寝しちゃって…

ジリリリリリ！ 目覚ましがなる。携帯のアラームのスムーズ機能も全て止めてしまったようだ。さすが、オレ。

「むう……うるさあい……」

カチツ 目覚まし時計までも止めた。これでゆっくり眠れる…と、思っていたら！ ダーダ（メタ ギアの敵に発見された時の音。からの〜ジョーズのテーマ）それを聴いた瞬間の自分の速さは、ギネスブックにも載るんじゃないか？ と常々思う。

「ピッ ……玲……さん？……」

「たつくん？ ちゃんとアキくんを」  
「もちろんです」

携帯の着信相手は、吉井 明久（よしい あきひさ）の姉、吉井 玲（よしい あきら）さんだった。  
オレ、山崎 巧（やまさき たくみ）は、2人と幼なじみ。つてやつや。親が大阪の人やったから、気づいた時には関西弁やったつてわけ。

にしてもマズいな……ちゃんと明久の面倒見ると言ったのになあ……。とにかく、なんとか誤魔化さ

「寝起きの声ですよね？」

「何を仰いますやら、お姉さん！」

「先ほどまでアキくんとなつくんの寝顔を交互に覗いていたんです

よっ？」

「何をやってんだ！？ アンタは！ やったら、起こせばええやん

！」

「……………」

急に黙ってどーしたんやろ？

「玲さん？……………」

「嘘をつきましたね？……………」

「あ……………」

「たつくん？……………」

「しまったあああああッ！?!?!?!」

「これは……………そうですね…次会った時には、麻縄で縛った状態での再会を……………」

「誰がするかッ!?!」

「100歩譲って、縄跳びで」

「をおいっ!?!」

「ビニールでも構いませんよ？」

「50歩100歩って知ってる!?! 結局縛ってたら意味ないって」

「そうですね？ 元々の用途が違うわけですから……………」

「使用目的と結果がおんなじやろ！ つーか、オレが縛んぞ？ し  
まいに」

「自分で縛れるんですか？」

「ちゃうわ！ そんなことするか！ イヤやゆってんねん。玲さん  
をって意味……………って、説明さすな!?!」

「私には、アキくんという人が……………」

「姉弟！ アンタら血の繋がった姉弟やから」

「そんなこと、些細な問題でしかありません」

「いや、結構おつきいよな？……………はあ……………頭痛くなるわ」

明久起こす前からこの調子……ほんま、頭痛い。……早よ学校  
行こ……

「たっくん！ 聞いてるんですか？」

「はい……」

その後オレは明久を起こして、すぐさま登校した。

……… “ やつと ” の方が正しいか？

第一問 新学年初日……五度寝しちゃって…（後書き）

笑）  
バカ大好きです。普段のオレは、見せらんないくらいバカです（

そこが出せたのなら、大成功です

また、会いましょう。

**第二問 バカと登校とクラス発表(前書き)**

何か至らないところとかあると思いますがよろしくお願いします。

m ( ( ( ( ( ( m

## 第二問 バカと登校とクラス発表

オレらがこの文月学園に入学してから二度目の春が来た。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。風が吹き、桜の花弁が ゆらゆら と舞踊る。

その風景に、一瞬目が奪われて立ち止まってしまった。その風景を携帯のカメラに収めた。

しかし、それも一瞬のこと。

今オレの頭にあるのは春の風物詩やけれども、桜のことではない。オレの頭は今年一年も楽しく過ごす為に、友達と教室 要するに、新しいクラスのことではいっぱいになっていた。

「吉井、山崎、遅刻だぞ」

玄関の前でドスの効いた声で呼び止められる。声のした方を見ると、そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

「あ、鉄じ じゃなくて、西村先生おはようございます」

「鉄…西先生。おはようございます」

バカめ！ 明久のは、バレバレじゃないか。オレの完璧な誤魔化し。それを見習えっつーの。

校門前にいたのは、生活指導の鬼。西村教諭だった。

「山崎、何をやり切った顔をしているか知らんが、一つ言っておく。俺は鉄西じゃない、西村だ。吉井も、鉄人って言っただろ？」  
「鉄人？ ははっ、まさか。僕が鉄人を前にして鉄人だなんて言えるはずがないじゃないですか」  
「今山ほど聞こえてくる言葉は、俺の聞き間違いか？」  
「気のせいですよ、きっと。ね？ 巧」

「なっ!?!? ばれただど!?!? と考えていたオレに明久が話しかけてきた。」

「of course . Nishimura is  
「何々？」  
「iron man!」  
「お。iron man」  
「yes!」

とつさに言い返したにしては、上手いこと返せたな。

ちなみに、鉄人っていうのは生徒間での渾名。趣味でトライアスロンをしていることと、黒光りしているそのごつい肉体が由来。

「貴様ら! 英語にすればいいってわけじゃない!」  
「what's up? iron man!」  
「聞いているのか山崎ッ!」  
「oh iron man!」  
「吉井! 貴様もだ」  
「is this a iron man?」  
「yes! iron man!」  
「いい加減にしないか!」

「iron man!」

今日のオレらは、乗りに乗ってる。こりゃあ、テストの結果も期待できんぞ。頑張ったもんな。

「お前らは、普通に先生と呼べんのか!? 全く、何度言ったらわかるんだ」

「「さあ?」「」

首を傾げているオレらに、鉄人は眉間押さえていた。あー、そっか。体調悪いんや。

「あの、病院行って休んだ方がいいんじゃない?」

「いや、心配には及ば 「頭が悪いんですよね?」 痛いんだよ。バカが。」

「……はあ……、もういい。それよりも『おはよう』じゃないだろ?」

「「あ、すみません」「」

「えーっと、 今日も肌が黒いですね」

「その醜悪な黒光りを見る度に、さぶいぼ（鳥肌）がめっちゃ出ますわ」

「……お前らには遅刻の謝罪よりも俺の肌の色や、それによって鳥肌が立っつてことの方が重要なのか?」

「そっちでしたか。すみません」

「すみません。でも…オレにとっては結構大事なことから…」

「……全く、山崎といい、吉井といい……お前らというヤツは……いくら言っても罰を与えても、全然懲りないな」

ため息混じりに先生が呟く。こんな風に言われたら、明久と同じやと思われるやんか。

「先生、俺と明久を同じにせんといってください」

「何でそんなこと言うのさ！」

「バカっ！ お前と一緒にされたら、バカだと思われるやろうが！」

「何をツ！？ バカにバカって言われたくないね」

「なっ！？ 明久、お前のバカの一言は、人の心を深く抉り傷つける。やたら滅多らと言っんちゃうで？」

オレは明久を諭すように言った。

「ねえ、コレって僕泣いていいよね？」

「はあ~~~~~……………」

先生が、盛大に溜め息をついた。どないしてん、一体。

「お前らは、自身のことをまっつたく、解ってないみたいだな？」

「え？」

「何言ってるんです？」

「ほら、受け取れ」

「あ、どーもです」

「サンキューです」

先生から自分の宛名の書かれた封筒が渡される。軽く頭を下げながら受け取った。

「それにしても、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してるんですか？ 掲示板とかで大きく張り出しちゃえばいいのに」

珍しく、明久がまともなことを言っていた。……マグニチュード10.0の大震災…超震災か？…それに見舞われないか心配になってきた。

「ねえ、巧。失礼なこと考えてるでしょう？」

「うん」

「即答！？ ちょっとは、隠してよ！ 僕、傷ついてるんだからね！？」

「先生に質問したのに、話し始めるとか超失礼やから」

「まあいいさ。さっきの答えだが」

「ちょっと待って！ 何で僕が悪いみたいなの」

「吉井！ 一度ならず二度までも。何回邪魔をしたら気が済むんだ？」

「2人なんか嫌いだっ！」

「とにかく、普通の学校はそうするんだけどな。まあ、ウチは世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校だからな。

この変わったやり方もその一環ってワケだ」

「何事もなかったかのように話し始めたよ！？ 巧！」

「ふーん。そんなもんなんですね」

「お前もかっ！？」

喧しいな、頭抱えて何やってんねん、こいつ…？

「山崎、それに、一応吉井も」

「何で一応！？ 目の前いるって！ 僕はここにいるよ！？」

「今だから言うがな」

「はい、なんですか？」

オレは、封筒を開け…開け…なが、ら……頑丈にのりづけし過ぎ

や！

「俺はお前らを去年一年見て、『もしかすると、吉井はバカなんじゃないか？ 山崎はアホなんじゃないか？』なんて疑いを抱いていたんだ」

明久の顔が パアツ と明るくなった。そんなに構って欲しかったのか……

「ふふん それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているようじゃ、更に『節穴』なんて四股名ししなをつけられちゃいますよ？」

「『穴』なんてゲイ名やバイっすよ？」

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気が付いたよ」

「そう言ってもらえると嬉しいですよ」

「もう破いた方が早いわ」

封筒を悪戦苦闘しながら開封しとったから、何話してたか忘れたわ。

オレは面倒臭くなって、 ビリッ と破いて封を切る。

「喜べ山崎、吉井。お前らへの疑いはなくなった」

先生の言葉を聞きながら、オレと明久は同じタイミングで折り畳まれた紙を開いて、書かれてるクラスを確認。

【山崎巧…… Fクラス】

【吉井明久…… Fクラス】

「お前らはバカだ」

「何でじゃああああっ?!?!?!」

こうしてオレの（明久も）最低クラス生活が、幕を開けた。

## 第二問 バカと登校とクラス発表（後書き）

いろいろ変更とかあるかもしれませんが。

みなさんの笑顔の糧になれば幸せ。

+

（\*

、  
）。

+

です

第三問 バカ×2+(と)バカデカイ教室と無駄に豪華な設備(前書き)

バカテスト

化学

【第一問】

・問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

・問題点 …… マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため、危険であるという点。

・合金の例 …… ジュラルミン

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

## 土屋康太の答え

- ・問題点 …… ガス代を払っていなかったこと。
- ・合金の例 …… アルミニウム

## 教師のコメント

そこは問題じゃありません。  
それに、1円玉を掻き集めてもガス代は払えない気がします。せめて500円硬貨にしませんか？

## 吉井明久の答え

・問題点 …… 未来合金を手に入れてなかった為に、製作に取り掛かれなかった。

- ・合金の例 …… 未来合金（すごく強い）

## 教師のコメント

未来合金とは何処で手に入るのでしょうか？  
ダンジョンなんて言わないでくださいいね？

すごく強いと言われても…

山崎巧の答え

・問題点 …… 燃える可能性のある物を材料にしようとするこ  
とに対して感服。花火でもするのかと思った。むしろ、花火をする  
つもりでマグネシウムを使ったのなら、マグネシウムでいいと思  
います。

・合金の例 …… スチールウール（別の色が楽しめる）

教師のコメント

花火をするつもりでって、どれだけ物語を膨らませているんです  
か。

……花火から離れてください。

### 第三問 バカ×2+(と)バカデカイ教室と無駄に豪華な設備

「……なんだろう、このばかデカイ教室は」

「ほんま、無駄にデカイな……」

去年は、茶道部所属の美人で色っぽ エロ ステキな小暮

葵(こぐれ あおい)先輩などを見に、たまに来てた3階へ足を踏み入れると、まず目の前に現れたのは通常の5〜6倍はあるつかという広さをもつ教室。

相変わらずでええよAクラス。

「皆さん進級おめでとございます。私はこの2年A組の担任、高橋洋子(たかはし ようこ)です。よろしくお願ひします」

足を止めて大きめの窓から中を覗いて見ると、髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきつちり着こなした知的女性の代表のような教師がいた。

彼女が告げると、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイに担任教師の名前が表示された。

贅沢：っていうか、壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイなんているかあ？ デカけりやいってもんちゃうやろ。黒板サイズで充分やろおに……。でも、一体いくらするんかな？

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備、不満のある人はいますか？」

「山戯たこと吐かしてる公務員がおんねんけど(いるんだけど)、……バカなのか？」

「ちよつ！？ 巧、聞こえるよ！」

「ええよ別に。つーか、あれだけの設備で不満があるってどんだけ

…」

「あ」

「何や？」

明久の視線を追って教室の方へと戻してみると

「僕達にケンカを売りたい人が何人かいるみたいだよ」

「よゝし、殺つちまうか」

「そうだね、任せてよ」

明久がAクラスに入ろうとするのを止めて、諫めた。

「バカ、冗談だつーの」

「…僕は本気なのに」

「自分のクラスを見てからでも遅くないやろ」

Aクラスの教室は50人の生徒が普通に授業を受けるには過剰なほどの広さと設備があつて、冷蔵庫には当然のように各種飲料やお菓子を含めた様々な食料がエアコンは教室どころか客人に一台で、それぞれが好みの温度に調整できるようになっているみたいだった。更に見渡してみると天井は総ガラス製でありながらスイッチ一つで開閉可能となっていて、壁には格調高い絵画や観葉植物がさりげなく置かれてて 何処のリゾート施設じゃ！  
ツツコミを入れたオレは間違つてない。

「参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給致します。他にも何か必要なものがあれば遠慮などすることなくなんでも申し出てください。

では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

どっかから紅茶の香りがした。匂いの元を辿ってみると、さっき手を挙げてマツサージ機能がついてないだとか、クソ頭のおかしいことをほざいてたヤツだった。

「……はい」

ウチのクラスの代表もあんなだったらなあ……

なんて思っていると明久から ぽんっ と、肩に手を置かれた。

「解る、スゴく解るよ。その気持ち」

「やっぱり？ おまえも思った？」

「うん。僕達んところもあんな美人だったらって」

名前を呼ばれて前に出てきたのは、黒髪を肩まで伸ばしてまるで日本人形のような綺麗な少女。

物静かな雰囲気彼女は、その整った容姿と相まって、穢れを近づけない神々しさを放ってる。黒髪ロングの色白美人なんて、まさしく大和撫子。こういう人のことをゆるんやろな。

クラス代表 つまり2年生のクラスを編成する振り分け試験において、この教室内で誰よりも優秀な生徒。

さらに言うなれば、学年で最高成績を誇るAクラスでのトップはそのまま2年生のトップということになる。マジすげえ美人。

「……霧島翔子です。よろしく願います」

クラスみんなの視線の中心にありながら顔色一つ変えずに淡々と名前を告げる。

その目はクラスメイト全員ではなく、よく見ると同性の級友たち  
にのみ向けられている……男嫌い？…かな？

霧島は1年の時から有名で、その綺麗な容姿は学年を問わず知れ  
渡り、男子生徒からの告白が絶えなかった。だが、誰一人として彼  
女の心を動かした生徒はいない。だからって同性愛者だって噂が立  
つのはどうだろ。

「明久」

「何？」

「霧島翔子が同性愛者なのかもだとか考えてへんやろおな？」

「え？ 何で解ったの？」

「なあ、明久。もし違ってたら霧島が迷惑やし、傷つく可能性だっ  
てあんだろうが。もしかして、そこまで考えがいかないってか？」

「あ、そつか。……ごめん」

「言う相手がちやうやろ」

「そうだね、後で謝りに行くよ」

「オレも行ったるわ」

「んー、でも悪いよ……」

「いや、おまえが余計なことと言って霧島に失礼なこととして、迷惑か  
ける可能性があるからな」

「……じいーっ……」

「なんやねん」

「そついう事も姉さんに言われてるの？」

「……」

「Aクラスの皆さん。これから1年間、霧島さんを代表にして協力  
し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこ  
にも負けないように」

「巧？……」

「…って！ こんなことしてる場合ちゃう。早くオレ達も教室に行かんと」

オレは自分達のクラスへと向かった。後ろから明久が何かしら叫んでた気がする。

「巧！？ 待ってよ！ ねえ、姉さんからは、どこまで言われてるの！？」

気のせい。きっとスゴく気のせい。

第四問 腐った教室で自己紹介 ……マジで。(前書き)

バカテスト

国語

【第二問】

・問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- (1) 得意なことでも失敗してしまうこと
- (2) 悪いことがあった上にさらに悪いことが起きる喩え

姫路瑞希の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

坂本雄二の答え

(1) 料理が得意だと言い張る母親

(2) 空腹時の母親の料理

教師のコメント

どういう意味でしょう？ お母さんがどうかしたのですか？

料理で胃にダメージがあるんでしょうか……

土屋康太の答え

(1) 弘法の川流れ

(2) 泣きっ面にブチッ！……

教師のコメント

シユールな光景ですね。

キレイないてください……

吉井明久の答え

(1) 大丈夫(得意)だと思い込んでいる、姉さんの一般常識

(2) 泣きつ面蹴ったり

教師のコメント

可愛らしいお姉さんですね。優しく教えてあげてください。

……君は鬼ですか。

26

山崎巧の答え

(1) 大丈夫(得意)だと思い込んでいる、吉井玲さん(吉井明久の姉)の一般常識。

明久の姉さんの一般常識は、壊滅的です。神に見放されたんだと思います。

(2) デスピ サロに対してザ キを唱えるクリト。

1体に対してザラ っていうのもポイントです。それに、他メンバーが死のうとも、お転婆姫が掠り傷でも負えば、100%ベマ。味方を生き返らせる時はザラル、姫はザリク。

優先順位は、

- 1 アーナ
- 2 自分(僧侶? 神父?)
- 3 勇者他...

ラスボス戦で爆笑してました。

### 教師のコメント

……そこまですか。

先生も ラを唱える踊り子には、頭を痛めました。

……如何わしい名前に見えたのは、きっと目の錯覚ですね……。

第四問 腐った教室で自己紹介 ……マジで。

2年F組と書かれたプレートのある教室につくと少しだけ戸を開けるのを待った。

「はあ…はあ…やっと追いついた」

「よし、入んぞ」

「ちよっ!？ 待ってよ、心の準備がっ!」

慌てている明久は無視して、教室へと入った。

「すみません、筋肉達磨に…」

「すみません、ちよっと遅れちゃいましたっ」

明久は、オレとは違うぶっ飛んだテンションで入ってきた。

「早く座れ、このウジ虫野郎共」

オレ達に暴言を吐きつけてきたのは、一応友達の坂本 雄二(さかもと ゆうじ)。180強の身長があり、程よく筋肉がついていて男らしいヤツだ。

「酷いよ! 先生っ! ……って、…雄二? ……何やってんの?」

「先生が遅れるらしいから、代わりに教壇に上がった」

「先生の代わりって…雄二が? 何で?」

「あー! やめろっ! それ以上聞きたくない」

「何言ってるのさ、巧」

「バカ! 聞いてしまったら、現実となるだろ!? せめて夢くら

い」

「俺は、このクラスの最高責任者だか「嘘だっ!!!」」「絶望したっ!!!」何々だ、お前ら」

「僕らの希望を打ち砕きやがって!」

「そっや! どんな可愛い娘がクラス代表かなーなんて想像してたのにつ! 絶望したわ!」

「このぼろぼろの教室以上に最悪だっ!!!」

「死ねばいいのに……」

「お前らホント、ムカつくな」

「ちよっと通して下さいね」

後ろから覇気の無い声でしたので振り返ると、そこには寝癖の付いた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにもさえない風体の男がいた。

「それと席についてもらえますか? HRを始めますから」

どう見ても生徒じゃないんやけど、寝ぼけてて出勤するところ間違えたんちゃうか? まあ、でも、恐らくこの人が、このクラスの担任。

「はい、わかりました」

「うーっす」

「了解です」

「えー、おはようございます。2年F組担任の」

福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめた。

…うわ、チヨークすら碌に用意されてないんか。

「 福原 慎（ふくはら しん）です。よろしくお願いします。」

皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？ 不備があれば申し出てください」

「…つか、不備しか見当たらねえよ。早速手が拳がった、もちろんオレも。」

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

「先生っ！ 副担任の先生は付きますか？」

「付きません」

「何言ってるんだ？ あいつ」

「理解できないぞ」

「バカなんだ、きつと」

「バカは、お前らだ」

『『『何イツ!?!?』』』』

「黙って聞いてろ。」

先生、ならば、担任の交換を要請します」「できません」

「Fクラスの8割総意があつたとしたら、学園長に意見書の提出をお願いできますか？」

「難しいと思いますが、クラス代表が意見をまとめて意見書を提出することはできます」

「解りました。お前ら、これで勉強が捗るで」

『『『は？』』』

「担任の先生には、学年主任の高橋先生か、英語の遠藤先生を。と  
思っている」

『『『我らもそれに賛同する！！！！』』』

変わり身早っ！

「うん、バカばかりだ」

「…こいつら使えるな……巧も役に立ちそうだ」

「あと他に必要なものがあれば、極力自分で調達するようにしてください」

にしても、カビ臭い。たぶん床に敷き詰められている古い畳のせい  
いやる。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人から  
お願いします」

福原先生の指名を受けて、廊下側の生徒の一人が立ち上がり、名前  
前を告げた。

「木下 秀吉（きのした ひでよし）じゃ。演劇部に所属してある」

相変わらず可愛いなー秀吉は。秀吉、可愛いよ秀吉。めっちゃ可愛いー！抱かせろっ！ー！

「！ なっ、何を言っておる!？」

「あ、ごめん。声に出してもうた」

「巧、ワシは、男じゃと……」

『『何だって!?!?!?』』

「いや、木下なら構わない」

「むしろ、ありだろ」

「木下がいれば何もいらぬ」

「お主らもか!？」

「オレは、解った上で言ってる。それを言わせてしまつ秀吉の可愛いさが罪なんや。なあ？ 明久」

「そつだよ！ キミの美しさは罪だつ」

「うう……複雑じゃ…… と、とにかく、今年1年よろしく頼むぞい」

ほんまに、弄り甲斐があんなあ、こいつら。

「……………土屋 康太（つちや こうた）」

相変わらず口数が少ないな。

そや、康太にメール。カメラでこの部屋撮ってもらうか。写真と

映像の両方が好ましいか……。送信つと。ちゃんと、理由もつけて送っておいた。

「……了解した」

康太とアイコンタクトを交わして、次、自己紹介している人の声を聞く。あ、次オレや。

「山崎巧です。たまに、関西弁が出ますけど気にしないでください」

オレの自己紹介は、無難な感じで終わらせた。

次々と自己紹介が進んでいく。つーか、男ばかりかよ。

ん？ 女の声？

「島田 美波（しまだ みなみ）です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

島田なー……

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツでしたので。趣味は」

ま、フォローしたるか。

「趣味は吉井明久を殴「何イっ!? 趣味は明久と触れ合うことおっ!??!?」 はあ!?!?」

『『吉井を捕らえろ!!!』』

「し、島田さん!? みんなが誤解しちゃって!」

「違っ! そうじゃないのよ!!! ウチは」

サツ と左隣の島田に即席で作ったカンペを見せた。

「吉井に触って欲しいの……はいい!?!?」

『『『吉井明久を殺せ!!!』』』

「ちょっと待ってよみんな、何かの誤解だつて！」

「明久、羨まし過ぎんぞ！」

「何言つてんの!?!」

「さも彼氏かのように島田の後ろから抱きしめるように立ち、スレ  
ンダー美少女な島田の美脚をぺたぺたと触って、形のいいヒップを  
も触り尽くし、ついでと言つて綺麗にくびれた腰のラインをなぞり、  
舐め回すようにへそや下腹を弄りたおし、“異性、特に好きな男に  
揉まれると大きくなるよ？ 僕がその胸大きくしてあげるよ”とか  
言つて島田の胸を揉みしだ ごはあつ!?!?!」

「アンタ、黙つてなさいよ!?!」

島田のシャイニングウイザードにより、ドラ エの敵がやられた  
時のような声が出た。痛いっす、マジで。

「変態だな 「そうだね…」 明久」

「……つて、僕!? 何でさ! あんなことをスラスラと言える巧の  
方が変態だよ!」

「何言つとんねん、オレは自他共に認める変態えろや」

「クソツ! 反論の余地すらない!?!」

「お主ら……呆れてものも言えん」

「……俺が言つのもなんだが、バカ過ぎる」

「「何で?」」

「それよりも、島田さんに失礼だよ！　いくら僕がしたいと思って  
いたって、それは叶わない願いなんだよ？」

「願望が口に出てるで？」

「凡そ間違っていないかつたってことじゃないか」

「吉井！？　アンタ何言つて　」

「いや、これは…言葉の綾あやっていうか、本音が漏れたっていうか…  
その……」

「隠せてねーぞ、バカ」

「バレバレやる」

「　　吉井？」

「な、何？……」

「少しなら…いいよ？……」

「ほえ？」

「「「は？」「」」

まさかの爆弾発言。こんな展開になるとは、思ってもみいひんか  
った。

放心状態の明久に、雄二が声をかけていた。

「明久、ぼーっと突っ立っててもいいのか？」

「ん？　どうして？」

「周りを見ってみる」

「巧と秀吉が手を合わせて拝んでるね。ムツツリーニは……何で僕  
を撮ってるの？」

「……………」

「……………」

「……………遺影」

「……………イエーイ？……」



「止まるところを知らねえな……」

「……………グッ！」

康太、力強いサムズアップをありがとう。

自己紹介だけで、一時間は潰せる我がクラス。ある意味すげえ……

第四問 腐った教室で自己紹介 ……マジで。(後書き)

初っぱなからバカやってます。

あと、ラスボスを倒したのは、商人軍団でした。……………勇者い  
らなくない? ……

では、また。

「、、」

第五問 乳神様降臨！？ だけどオレは、小さいのも好きだ。美波とか、その姓

バカテスト

日本史

【第三問】

・問 江戸時代(1)(2)をした女性の身代わりになる職業。その職業の名前は(1)(2)である。

( ) ( ) の中身を埋めなさい。

姫路瑞希の答え

(1) おなら

(2) 科負比丘尼

教師のコメント

正解です。(1) おなら。(2) は、屁負比丘尼あるいは、科負比丘尼と言います。

人前で放屁をするのは良くない、特に女性だとはしたくない事とされてきたんです。身分の高い家には、その家の妻女や娘に付き添って、放屁や過失などを自分の責めとして自分がしたかのようにして

恥かきの代りをした役のものがいた。その者の事を屁負比丘尼とい  
うんですね。

土屋康太の答え

(1) おな (x) マス (x) 自慰

(2) 女優

教師のコメント

どういう意図でその答えを導き出したかは解りませんが、18禁  
であることは容易に想像できます。そういうものは、控えてくだ  
さいね。

生活指導の西村先生に報告をしておきました。

山崎巧の答え

(1) 借金

(2) 連帯保証人  
そしてオレは、

教師のコメント

そしてあなたは、取り立て屋ですか。

木下秀吉の答え

(1) 粗相(姉上)

(2) 下僕ワシ

教師のコメント

姉上…お姉さんの優子さんでしょうか？

姉弟ですよね!?

坂本雄二の答え

(1) ミス(霧島翔子)

(2) 奴隷(俺)

教師のコメント

愛の奴隷……坂本くん、頑張ってください。

吉井明久の答え

(1) もよ

(2) ムダな身代わり

教師のコメント

便は、自分で行かないと意味ないです。

解ってて代わるんですか!?

島田美波の答え

(1) 小ぶりな胸

(2) パッド

教師のコメント

誰も身代わりになんてなれま……

…確かに代わりになります。答えがかなり力強くかかれています

ね。あなたにとって大切なそ  
席しました)

(先生は諸事情により、途中退

第五問 乳神様降臨！？ だけどオレは、小さいのも好きだ。美波とか、その姓

不意にガラリと教室のドアが開き、息を切らせて大きい大きいお胸様を上下させて、そこに手を当てている女子生徒が現れた。ナイ  
ス！ 桃髪ロング

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ？』

誰かっていうか、誰もが。かな。教室全体から驚いたような声が上がった。そりゃそうや。普通はびっくりするって。

クラスがにわかに騒がしくなる中、平然としている福原先生が話しかけた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん  
もお願いします」

「は、はい！あの、姫路 瑞希（ひめじ みずき）といいます。よろしくお願いします……」

小柄な身体をさら縮こまらせて声を上げる。ついでに身体を縮こ  
まらせている為、両腕に挟まれている果実も悲鳴を上げる。 ビ  
バ姫路

『はいっ！ 質問です！』

自己紹介を終えた男子生徒の一人が高々と右手を挙げる。

「あ、は、はいっ。なんですか？」

『なんでここにいらっしゃるんですか？』

「そ、その……」

なんや、緊張してんなあ。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

その言葉を聴いてクラスの奴らは『ああ、成る程』と頷いた。

試験途中の退席は0点扱いやってさ。さっきまで忘れとったけど……  
姫路は振り分け試験を最後まで受けられずに、結果としてFクラスに振り分けられたってワケ。

そんな姫路の言い分を聞いて、クラスの中から、ちらほらと言いつつ、訳の声が上がってくる。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？ アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力が出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『はい、今年一番の大嘘ありがとう』

「秘書っぽい知的な美人をお姫様抱っこしてたから……」

『『嘘つけ！』』

「お前らもな」

バカばかりや。改めて思った。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中、逃げるように雄二と明久の間の卓袱台に着こうとする  
姫路。

「き、緊張しましたあゝ……」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏した姫路。

「あのさ、姫」

「姫路」

「は、はいっ。何ですか？ えーっと……」

「坂本だ。坂本ゆ」「オレは、山崎巧。よろしくな？」  
くっ

「……よろしく頼む」

ぶっ！……、被せたった。

「え、あ、姫路瑞希です。よろしくお願いします」

姫路が深々と頭を下げた。どんだけ丁寧なん！？  
姫路は、お嬢か、お嬢なんだな！？

「ところ」「姫路さん、体大丈夫なの？」  
「てめえもか、明久」

怒りを顕にした雄二をさらに遮って、姫路が驚きの声を上げた。  
雄二に無反応、明久に超反応。

「よ、吉井君!？」

「お前もなのか、姫路……」

「憐れ雄二……。ん？ 明久がなんか考えてる……あの顔は バカなこと考えてるんは、確かやな。」

「姫路。明久がブサイクですまん」

明久の顔を見て驚いた姫路に、ここぞとばかりに雄二が、悪意の籠もったフォローをする。

「そ、そんな！ 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！ その、むしろ……」  
「そう言われると、確かに見えてくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

「え？ それは誰」

「誰よそれっ!？」 「そ、それって誰ですかっ!？」

島田と姫路が同時に、明久の台詞を遮って聞いてきた。

「たしか、久保くぼ」

「久保さん？ どの久保さん？」

「利光としみつだったかな」

久保 利光 (性別/男)

「……………」

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

「もう僕、お婿にいけない……」

「「そんな!?!」」

島田と姫路が食い付いた。それでも気づかんからな……

「明久、半分冗談で言ったんだ。安心しろ」

「え? 残りの半分は?」

「姫路、体大丈夫なん?」

「あ、はい。もうすっかり平気です」

「巧、邪魔しないでよ! ねえ雄二! 残りの半分は!?!」

明久の話を流すオレと、とりあわない雄二に対して、明久は大きな声を出した。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

そのせいで、パンパン、と教卓を叩いて福原先生が警告を発してきた。

「あ、すいませ」

バキィツ、バラバラバラ……

突如、先生の叩いた教卓がゴミ屑と化す。鉄人と渡り合える怪力か、信じられないくらい、本当にボロボロやったか……後者の可能性が高いっつーか、そやるな。

軽く叩いただけで崩れ落ちるとか有り得へん。ていうか、

「康太、今の」

「……バツチリ。俺に抜かりはない」

「さすが」

「何がじゃ？」

「何でもない、何でも」

「え〜……替えを用意してきます。少し待っていてください」

気まずそうに告げると、先生は足早に教室から出て行った。

「あ、あはは……」

明久の隣で、姫路が苦笑いをしていた。

ん？ 明久が、真剣に考え込んでる……珍しく、マジやな。

ま、オレも真剣やけどな。すぐにも動ける準備して、アレに目にも見せんとあかんわ。

覚悟せえよ、クソばばあ！

第五問 乳神様降臨！？ だけどオレは、小さいのも好きだ。美波とか、その姓

「私参上ですっ！」

「姫路さん!？」

「さらに。ワシ、参上じゃ！」

「……そのポーズのまま カシヤッ」

「「オレ(僕)、参上…!」「」

「……私も参上」

「翔子!？ どちらから出てきてんだよ！ お前は!」

「……言わせたいの？」

「何がだ！ いいから言えっつて」

「……雄二の股下」

「何イっ!？ 何してくれてんだ！ 俺はお前なんかアアアアア

っ!?!?!?!? 頭割れるっ!?!? やめ！ やめ! ………………」

ツンツン

『……………』

返事がない、ただの屍のようだ…。

第六問 明久の考え……その想いは？…… っていうか、召喚獣とかすげー。

バカテスト

日本史

【第四問】

・問 江戸時代、農民が武士になるには、どうすればいいか答えなさい。

姫路瑞希の答え

・身分をお金で買う

教師のコメント

正解です。当時階級をお金で買うことができたんです。金額にして、だいたい20両〜500両。今の値段にして数百万〜数億円と  
言われています。

木下秀吉の答え

・一式準備

教師のコメント

武士セットですか？ 用意してもなれませんが。

坂本雄二の答え

・楊枝を啜える

教師のコメント

『武士食わねど高楊枝』 あれはことわざです。啜えたからといって、武士にはなれません。

吉井明久の答え

・土下座

教師のコメント

それでなれても、嬉しくないと思います。

山崎巧の答え

・一揆

教師のコメント

暴動を起こした農民です。

島田美波の答え

・筋トレ

教師のコメント

マッチョにしかありません。

土屋康太の答え

・形振り構わず神頼み

教師のコメント

神頼みで武士になれるのなら、神になった人がどれほどいるか…  
私も神になっていたでしょう。

それよりも、他にすることなかったんでしょっか？

第六問 明久の考え……その想いは？…… っていうか、召喚獣とかすげー。

「……雄二、巧、ちよつといい？」

真剣な顔をしていた明久が、あくびをしている雄二とオレに声をかけてきた。

「ん？ なんだ？」

「ここじゃ話しくいから、廊下で」

「別に構わんが」

雄二と明久と一緒に廊下へと出る。

つか、教室を出る時に見た秀吉の寂しそうな顔が印象的だったな……。秀吉の愁い顔も萌え

おっと……

「妄想に浸るところやったわ……」

「何を言ってるんだ？ お前は。まあいい。んで、話って？」

「この教室についてなんだけど……」

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「雄二と巧もそう思うよね？」

「もちろんだ」

「ああ。殺意を覚えるほどにな……」

「雄二、Aクラスの設備は見た？」

「ああ、すごかったな。あんな教室は他に見たことがない」

「そやな。殴り込みに行こうかと思ったもん」

「そうそう」

「明久が」

「違うよ!? もともと巧が!」

「結局、お前の方が乗り気になって、オレが止めたんやんけ。冗談やっつてゆったのに」

「う……」

「お前らホント……」

「バカはこいつだ(や)!!!!」

「まだ何も言っつてねえだろうが」

「ここで遅れを取るワケにはいかないんだ」

「先手必勝っていうしな」

それにな……

「こいつと同類だと思われたくなんかないッ!!!!」

っつて!

「何だと?!?!? 巧!(明久!)」

「お前ら、話が進まん」

「そだね。ごめんごめん」

切り替え早いなあ。 オレら。

「で? 改まって何々(なんなん)?」

「うん。まず、AクラスとFクラス、2つの設備を思い浮かべてみて?」

一方はチヨークすらないひび割れた黒板。

もう一方は値段も分からないほど立派なプラズマディスプレイ……

「舐めとんかつ!？」

「巧、落ち着いて。その力を使う場所を提供するよ」

「力を使う…場所?…:… なんやそれ」

「えっと、そこで僕からの提案。折角2年生になったんだし、『試験戦争』をやってみない？」

文月学園に点数の上限がないテストが採用されてから4年が経過した。

このテストには1時間という制限時間と無制限の問題数が用意されて、そのせいで、テストの点数には上限がなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができる。あほか。一応何らかの振り分け理由とかあるんやろ。じゃなきゃ、康太なんて保体でCクラスには入れるんちゃうか？

ああ、そうそう。この学園の特徴はそこだけじゃなく、その上限無しのテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦うことのできるシステム 『試験召喚システム』というものがあるんやけどな…オレが考えたんじゃないぞ? いや、ゲームとかじやなくって、科学とオカルトと偶然により って、説明してるこっちが痛い目で見られるようなこと言わずな! ババア!

なんや偶然って!?! ったく…:…。まあともかく、学力低下が嘆かれてるらしい近頃、生徒の勉強に対するモチベーションを高める為に提案された先進的な試みで、その中心が、教師立会いの下で行使が可能となる、召喚獣を使ったクラス単位の戦争。それが

『試験召喚戦争』。

「戦争、だと?」「」

「うん。しかもAクラス相手に」  
「…何が目的だ」

急に雄二の目が細くなった。そろそろやわな。あの明久が、Aクラス相手にテストで戦いに挑もうとしてるんやから、誰だって疑うつちゅーねん。

「いや、だってあまりに酷い設備だから」

「嘘をつくな。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、ありえないだろうが」

「そ、そんなこないよ。興味がなければこんな学校に来るわけが

」

「は？ 明久がこの学校を選んだんは『試験校だからこそその学費の安さ』ってのが理由やる？」

「ちよつと巧、なんで言うのさ!？」

「ま、ええやん」

「よくないよ!」

「で、本当は？」

雄二が明久を問い詰める。

「くっ……!」

「…姫路の為、か?」「島田の為やる?」

「ど、どうしてそれを!？」

「本当にお前は単純だな。カマをかけるとすぐに引つかか……ん? ちよつと待て。お前はどっちのことに反応したんだ?」

雄二の目から警戒の色が消えて、驚きの色が浮かび上がる。予想すらしてなかったようで、かなり興味を持って食い付いた。……

新しい玩具を発見したと……

「べ、別に、反応なんかしてないんだからね!？」

「何でツンデレやねん。つーか、今さら言い訳なんかいらんやろ」

「うぐうつ!……」

「おい、明久。まさか、ふた　「ハラシヨーツ!!!」　よ  
く解った」

「何で!?!?!？」

「あそこまであからさまに妨害すりゃあバレルって」

「いや、違っただって!　あれは」

「気にするな。言われるまでもなく、俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思っただっていたところだ」

「え?　どうして?　雄二だって全然勉強なんてしてないよね?」

雄二の誤解を解こうとしてたんちゃう(違う)んか。誤解ちゃうけど。

明久、めっちゃ流されてるし。

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試してみたくな  
「?????」

明久、小動物みたくなっとなぞ。なんか可愛　ゴスツ

「危なかったあ」

「いきなり自分の顔を殴り出す人間の方が危ねえだろうが」

「あはは……」

……世の中学力が全てじゃない?　どうだかな……

「それより俺は、Aクラスに勝つ作戦も思いついた　おっと、

先生が戻ってきた。教室に入るぞ」  
「あ、うん」

ふーん……

雄二に促されるままに、明久は教室へ入っていった。

……ま、ええか。早速召喚獣が使えるんや。楽しみやわ  
帰っ  
たら勉強かゲームか……あ、萌えドリル。

第六問 明久の考え……その想いは？…… っていうか、召喚獣とかすげー。

「巧達…ワシを置いて何を話しておるのかのお……仲間外れ…じやな」

「………秀吉、巧も明久もそんな人間じゃない」

「解ってはいるのじゃが……」

「………寂しい。と？」

「ち、違う！ ワシは」

「………安心しろ。きっとすぐに解る。それでも不安なら、話くらいは聞く」

「ムツッリーニ……」

第七問 《仕切り屋》雄二（代表）。明久以上にマイペースでフリーダムなオ

バカテスト

英語

【第五問】

・問 以下の英文を訳しなさい。

「 This is the bookshelf that  
my grandmother had used regularly  
ly.」

姫路瑞希の答え

・これは私の祖母が愛用していた本棚です。

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

・これは

教師のコメント

訳せたのは“ T h i s ” だけですか。

吉井明久の答え

・  
「 \*  
x

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

山崎巧の答え

・これは私のおばあちゃんが使った本棚と下着です。

気持ちの悪い問題でした…

教師のコメント

regularlyです。lingerie<sup>ランジェリー</sup>ではありません。

木下秀吉の答え

・これは私のおばあちゃんです。

教師のコメント

他の単語が抜けています。

島田美波の答え

・これはおばあちゃんです。

教師のコメント

物ではありませんよ？

坂本雄二の答え

・ババア

教師のコメント

ただの暴言です。

須川亮の答え

・これは下着です。

他Fクラス男子の答え

・下着！

教師のコメント

違います。ランジェリーでは……もつそれでいいです。

第七問 《仕切り屋》雄二（代表）。 明久以上にマイペースでフリーダムなオ

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

「壊れた教卓を先生が持つてきたボロの教卓と替えて、気を取り直してHRが再開される。」

「えー、須川 亮（すがわ りょう）です。趣味は」

特に何もなく、淡々とした自己紹介の時間が続いた。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

雄二で最後のようだ。

「了解」

先生に呼ばれて雄二が席を立て、ゆっくりと教壇に歩み寄る。その姿にはいつもの巫山戯た雰囲気は見られず、クラスの代表として相応しい貫禄を身に纏っているように思えなくもない。なんか、企んでるようにしか見えへん。悪代官？……なんかちゃうな。

「坂本君は、Fクラスの代表でしたよね？」

そうやって尋ねた先生が秘書とかの付き人で、鷹揚に頷く雄二が組織の幹部って感じ。ポ モンのサカ とかかな？ つっか、自信に満ちたその表情が、どや顔にしか見えへんねんけど……オレだけなんかな？

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

「ガチホモ」

「巧、お前とは本気で話合わなきゃならんようだな？」

なぜバレた！？

「っと、話が逸れたな……さて、皆に一つ聞きたい」

雄二がゆっくりと、全員の間を見るように告げる。間の取り方が上手いせいやろうな。いつの間にかみんなの視線は、雄二に向けられていた。

クラスの様子を確認した後、雄二の視線は、教室の各所に移りだす。

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

クラス全員が、雄二の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

ちなみにオレは、隣に座っている島田の、微かに膨らんでいるその箇所を眺めていた。意外と気づかないな。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

雄二は一呼吸おいて、静かに告げる。

「不満はないか？」

「

大ありじゃあつ！！

」

2年F組生徒の魂の叫び。もちろん、オレも交ざったよ？ 乗るところは、乗らんと。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そつだそつだ！」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる！」

「何より、女子の数が少な過ぎる！」

『『『そつだそつだ！！！！』』』

より強くみんなの賛同を得た。

「お前は、黙ってる」

「なんでやねん。オレだってこの現状は大いに不満や。男子代表として問題意識を抱いている」

「……………」

堰を切ったかのように次々とあがった不満の声。

「みんなの意見はもつともだ」

あー……無視？……別にええけど。

「そこで、これは代表としての提案だが」

野性味満点の八重歯を見せ、

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

Aクラスへの宣戦布告。それは、このFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思われへんかった（思えない）みたいやな。やってみな解らんやろうに。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

「は？ 島田と秀吉もいるから」

『『『その通り!』』』』

『すまない。確かに失言だった』

『解ってくれたか!』

「解ればいいんや」

そんな悲鳴?がいたるところから上がる。

確かに誰が見てもAクラスとFクラスの戦力差は明らか。

試験と名が付いている通り、その戦争で重要になるのがテストの点数。けど、AクラスとFクラスの点数は文字通り桁が違う。

Aクラス一人に対してFクラス3人でも勝てるかどうか……それに、相手次第では4〜5人、いや、もっと人数がおつても負けるんちゃうか?

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

そんな圧倒的な戦力差を知りながらも、雄二はそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡っていく。

まあ、どう考えても勝てる勝負だとは思えないだろう。それは雄二と結託した明久でさえもそう考えてるはずだ。ならば、それ以外の人間はなおさらそういう考えに至るだろうな。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのでき

る要素が揃っている」

雄二の言葉を受けてクラスの皆が更に騒めく。  
何を根拠にそこまで言えんだ？ 姫路一人じゃ、勝たれへんぞ。

「それを今から説明してやる」

不敵な笑みを浮かべて、壇上からみんなを見下ろす雄二。そんな雄二を横目に、細やかな女性の恵みを堪能し続けているオレ。

「おい、康太。畳に顔つけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！？（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太。

姫路がスカートの裾を押さえて遠ざかると、アイツは顔についた畳の跡を隠しながら壇上へと歩きだした。

さすがやな。あそこまで恥じも外聞もなく、ここまであからさまに覗きをしておいて否定しつづけるなんて……………適わんなあ。

「お前のえろに対する貪欲さには、誰も勝たれへんわ」

「……………！！（ブンブン）」

「お前が言うなっつーの。」

で、だ。姫路のスカートを覗き込んでいたのが、土屋康太。こいつがあのあるな、寡黙なる性識者だ<sup>ムツリーニ</sup>」

「……………！！（ブンブン）」

土屋康太という名前はそこまで有名じゃない。が、ムツリーニ

という名前は別。知る人ぞ知るその名は、男子生徒には畏怖と畏敬を。女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。

『ムツツリーニだと……?』

『馬鹿な、ヤツがそうだといいのか……?』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして  
いるぞ……』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

どんなだよ。

畳の跡を未だに隠している姿は哀れを誘う。例えどっついた状況  
であろうとも、自分の下心は隠し続けるみたいだ。

「認めちまえよ? ムツツリーニ。楽になるぜえ?」

「……………!!! (ブンブンブンブン)」

「?????」

姫路は頭に多数の疑問詞を浮かべてるな。明久教えたれよ、あ  
だ名の由来は、『ムツツリスケベ』やって。

「姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だつてその実力はよ  
く知っているはずだ」

「えっ? わ、私ですか?」

「ああ。主戦力だ。期待している」

ま、1年の時学年2位だった実力者や。期待すんなって方がムリ  
やろ。

『そつだ。俺たちには姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらぬいな』

「さらに、島田と秀吉を加えればサイコーやな」

「その通り、木下秀吉だっている」

秀吉は美人な男の娘として有名。演劇部のホープのこととか、Aクラスにいる双子のお姉さんのこととかでも有名だったりする。

『おお……！』

『ああ。アイツは確か、木下優子の……』

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

「“しんどう”じゃなく、“かわどう”の間違いちゃうか？」

「それじゃ、ただの河童だろうが」

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが2人もいるってことだよな！』

ツッコミを入れる雄二を余所に、クラスの士気は確実に上がっていった。

「それに、山崎巧と吉井明久だっている」

……シン

そして一気に下がる。出落ち！？ いや、オレは出てもいいーひんで？（出てもないよ？）

「ちょっと雄二！ どうしてそこで僕らの名前を呼ぶのさ！ 全くそんな必要ないよね！」

『誰だよ吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

『じゃあ、山崎巧ってのは？』

『『『知らん』』』

『いや、えろ（バカ）だって聞いたことがある』

「酷いな」

「雄二！ てめえが言っとなっ！！」

「そっだよ！」

明久がクラスを見回す。

オレは、相変わらず双丘を舐め回すように見る。

「巧。お前は、いつまで島田の胸を見続けるつもりだ」

「ふえっ！？」

いい加減、雄二にツッコまれた。それにしても、今のリアクション、可愛かったな

「なつな、何言ってるのよ！」

「え？ また声に出とった？」

「ねえ、巧は何やってんのさ！？ って、ホラ！ 折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！ 僕は雄二達とは違って普通の人間なんだから普通の扱いを ってなんで僕を睨むの？ 士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「オレのせいでもないからな？ だから、余計なことは」

「む…そうか。知らないようなら教えてやる。こいつらの肩書きは

《観察処分者》だ」

「「あ」「」

オレと明久の声が重なった。

第八問 〈観察処分者〉。何それ？ 美味しいの？（前書き）

バカテスト

物理

【第六問】

・問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希の元の答え

『光は波であって、（ ）粒子（×）（ ）である』

教師のコメント

よくできてました……なぜ書き直したのでしょうか？

山崎巧の答え

／と／

『光は波 であって、（ ） 恋に落ちたの（ ）である』

教師のコメント

あなたの解答に度肝を抜かれます。ロマンチックですけど、不正解です。

島田美波の答え

『光は波であって、（ light & wave ）である』

教師のコメント

英語のテストではありません。

木下秀吉の答え

『光は波であって、（ 孤独 ）である』

教師のコメント

詩的ですね。少し切ない感じがします。

吉井明久の答え

『光は波であって、（人は防げないの）である』

教師のコメント

でしょうね。

坂本雄二の答え

『光は波であって、（だけど乗れないの）である』

教師のコメント

海ではありませんからね。

土屋康太の答え

『光は波であって、（Yahoo!）である』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。  
ネットサーフィンでしょうか？ 違いますからね。

姫路瑞樹の答え

『光は波であって、（通信できるの）である』

教師のコメント

光ファイバー通信ですね。って、姫路さん！？ 小さな文字で書いてありましたけど、そこまでしてFクラスに交じりたかったんでしょうか？ それとも、ボケたかった……まさか……

第八問 《観察処分者》。何それ？ 美味しいの？

「こいつ言いやがった！」

「あれ？…」

「どうしたのさ、巧」

「お前は、今年からなわけやんな？」

「《観察処分者》のこと？ うん、そうだけど。…何で？」

「いや、オレは去年で卒業したはずやし…さすがに、今年もってのはないやろ」

「去年！？」

明久と雄二が驚きの声を上げた。

あれ？ 思ってた以上の反応やな。

「ああ！ 明久と違って、オレが《観察処分者》っていうことが、信じられへんわけや」

「それはない」

「康太と秀吉も交ざったやろ！？」

「それより、どうしたらそんなことに」

オレが酷い扱いされてるっていうのに…友達ちゃうんか！ 友達ちゃうんか？…

「友達ちゃうんや…」

「そんなことないって！ どうしたらそんなことに！?!?!?」

「どうしたらって……学園長が言うには、オレのイメージ力に目を付けたらしいけど……」

「ねえ、巧。さっきの言葉をもう一度言ったわけじゃなくって、どうすればそんな考えになったかっていう」

「何？ イメージ力だ？」

「流さないでよ！ 全く。…別にいいんだけどさ……あ、そっか」「なんだ明久、突然。解ったのか？」

雄二が解らんことを明久が解ったんか。すげーな。

「雄二、簡単だよ。巧の妄想力が、寡黙なる性識者を凌駕したんだ」

「そう、だったのか……!」

「何で納得しとんねん」

大いに納得できん！ ……ん？ 雄二が何か思い出したみたいな  
間抜け面しとる。

「お前、 “ドアホ” か？」

うん、わかった。

「殺そう」

「巧、声に出てるって！ ていうか、姫路さんが泣きそうになってるから!」

「え？」

雄二に殺意の持ったまま、最高な笑顔で振り返った。

「ひうつ!?!?」「きゃつ!?!?」

「巧、姫路さんが震えてるじゃないか！　っていつか、島田さんも涙目だし」

「何で？」

「鏡を見る。ケンカ慣れしてる俺ですら、ビビったぞ」

爽やかな笑顔やのに…

「言っておくが、爽やかだなんて思うなよ？　お前は、目付きで人を殺せる」

「目付き！？！？　目線じゃなくって！？？」

「「そうだ」」

「明久まで！？　目線送ったらどうなん（なるん）だよ！？」

明久と雄二が劇画タッチで真剣な顔をして（これ以上ないってくらいマジ顔）、答えた。

「そんなの決まってるじゃないか」

「ああ、そうだな」

「「<sup>オーバーキル</sup>輪廻転生即死だ」」

「山戯んなっ！？　オーバーキルってなんや！」

「そのままの意味さ。殺した相手の生まれ変わった先でも死に至らしめる……空恐ろしい技だよ」

「技って何？　オレってなんなワケ！？」

「気にするなって。108の殺人技の一つってだけだろ」

「額に《肉》って書くの！？　煩惱の数だけ技持ってるの！？」

「《馬鹿》でいいんじゃない？」  
「《阿呆》で決定だろ」

オレの訴えは無視かい！ 何を言われたって、額にはなんも書か  
んぞ。

「あつ、もつといいのがあったよ」

「何だ？」

「《処分》」

「色んな意味で酷いで！？ それっ」

「なあ、……《観察処分者》って、バカの代名詞じゃなかったっけ  
？」

Fクラスにいるバカの一人が何か言いだした。ちいっ！ 余計な  
ことをつー！！

「ち、違つよっ！ ちょっとお茶目な16歳につけられる愛称で」

「やめろ、明久！ オレまでバカやと思われるやる！」

「そっだ。《観察処分者》っていうのは、バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

「そら見る。バカに拍車がかかった」

「あの、それってどういうもの何ですか？」

姫路が小首を傾げて聞いてきた。頂点に近い場所にいた姫路に、  
この単語は馴染みがないんやな。知ってるからってどうってことな  
いけど。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういう類いの雑用  
を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣で熟すといった

具合だ」

そうそう。そこが《観察処分者》唯一の特典やな。普通、召喚獣は同じ召喚獣は触れるが、物に触ることができひん。召喚フィールドとか、立ったりすることはできるみたいやけど。

「そうなんですか？ それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよな」

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ」

姫路は自然に明久へと近づき、キラキラとした眼差しを明久に“だけ”向けてる。姫路……あからさまやな。

オレ、眼中に無し。

島田、殺意あり。こええ…

「実際、召喚獣は教師の監視下でなければ喚べないし、その上、試験召喚獣の負担は、何割かが僕にフィードバックするんだ。重い物を持ってばちゃんと疲れるし、ぶついたりした箇所にちゃんと痛みも返ってくるからね」

「そうなんですか」

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？』

『だよな。おいそれと召喚できないヤツが2人もいるってことになるよな』

「ああ、そうなる。だが、気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚共だ」

「雄二、そこは僕達をフォローする台詞を言うべきところだよな？」

「巧もなんとか言つてよ」

「端から雄二に期待なんか、1アトもしてへんし」

「1アト？」

「100京分の1」

「僕、なんか納得しちゃった」

オレの言葉と明久の言葉に、雄二は僅かやったけど、頬を ぴく ぴく 動かすのが見えた。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「巧いーっ。とりあえず、雄二を罰したいんだけどさ……」

軽いノリで、明久が話しかけてきた。オレもそれなりに返す。

「うーん……、雄二んちに、生きたフグ送ればいいよ」

「フグ？ それじゃ、罰には「俺を殺す気がツ！？」 雄二？」

明久にも解るように説明してやる。

「玲さんに、生きたフグを渡したと思えばいい」

「「なんて恐ろしいんだ……」」

「雄二、「冗談やって」

オレのセリフに、即座に生气が戻る。

「よし！ 皆、この境遇は大いに不満だろう？」

「ぼそつ “よし！” つつたなー、雄二」  
「ぼそつ 僕は、スゴく解るよ。これ以上ないってくらい共感して  
る」

『『『当然だ！！』』』』

「ぼそつ ほら、みんなも共感してる」  
「ぼそつ 違うやろ」

「ならば全員筆<sup>ペ</sup>を執れ！ 出陣の準備だ！」

『『『おおーっ！！』』』』

「ぼそつ オレらも乗った方がええかな？」  
「ぼそつ 既<sup>ス</sup>に乗り遅れてるよ」

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスク  
だ！」

『『『うおおーっ！！』』』』

「ぼそつ さらにヒートテックしてる」  
「ぼそつ それ服だからね？」

明久、さすがや。ちゃんとツッコミ入れてくれる。

「お、おー……」

クラスの雰囲気<sup>キョウキ</sup>に圧されたのか、姫路も小さく拳を作って掲げた。なんや、あの可愛い生物は。

「巧と明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらおう。無事大役を果たせ！」

「ぼそっ ……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

「いつまで、ぼそぼそ喋るつもりなんだ？ 明久。まあいい。とにかく大丈夫だ。念のために巧もつけた。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思って逝ってみろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

「クッ屑」

「お前らなあ ……いいから逝ってこいっ！」

「解ったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

「じゃあないなー（仕方ないな）」

ほくそ笑んでいる雄二には気づかず、オレと明久はDクラスへと向かった。

結局、誰も予想のしなかった形で、ほくそ笑む雄二を知らず裏切ることになる。

第九問 Dクラスに、入ろっかやめよっか考え中……。ってか、入るんやけどな

バカテスト

化学

【第七問】

・問 以下の問に答えなさい。

『 $C_4H_8O_2$ の化学式で示される物質を書きなさい』

吉井明久の答え

・プラスチック爆弾

確か、芯管をさして使うんですね。スネ クも使っていました。

教師のコメント

……吉井くんの言っているプラスチック爆弾の $C_4$ は、化学式ではありません。

ですが、一応 $C_4$ まではあっています。

木下秀吉の答え

・チャズ

教師のコメント

さよなら、天さん。って言うんでしたね。

よく思いつきましたね……

けど木下くん。語呂読みしている為、吉井くんの答えの方がまだ  
まともです。

山崎巧の答え

・張飛、乙。

教師のコメント

ローマ字読みでしょうか？ 英語ですよ。張飛は、歴史ですよ。  
……さて、ここで問題です。これは、何のテストでしょうか？

職員室へ呼んだ方がいいかもしれませんね。

山崎巧、乙。

坂本雄二の答え

・霧島翔子（劇薬）

教師のコメント

C4H8O2は劇薬ですが、霧島さんとうとういう関連性があるのでしょうか。

土屋康太の答え

・バストサイズ

Cカップ4人。Hカップ8人。Oカップ2人。  
Oカップが存在していたことに驚いた。神の恩恵無しには、有り得ないサイズだと俺は思う。

教師のコメント

胸のサイズは関係ありません！何を言っているのですか、あなたは！？

島田美波の答え

・ウチは、Bカップです。

ゆくゆくは、CにもDにもなります!!

教師のコメント

島田さん!?!? 何をドロップアウトしているんです!?

姫路瑞樹の答え

・酢酸エチル

果実臭がするので、デザートのアクセントや魚や肉などの臭い消しはもちろん。燃えやすいので、フランベをするのにも使えます。

教師のコメント

正解です…が、不正解にしようか、本気で悩みました。

姫路さん。日本では消防法により危険物第4類引火性液体（第一石油類、非水溶性液体）に、また毒物及び劇物取締法により劇物に指定されているので、料理に使うなんてことは有り得ませんよ。

それを作るとしたら、余程相手を想ってのことなんでしょうね……



第九問 Dクラスに、入るっかやめよっか考え中……。ってか、入るんやけどな

早速Dクラスに向かってるんやけど、入る時の文句に困っているようだ。明久ってバカなの？……あ、こんなこと考えること自体が間違いか。

「ごめんごめん」

「いきなり何を謝っているのか解らないけど、僕、何も聞かないからね」

「明久がバカだっことを考えること自体が、間違いだって気づいてさ」

「バカッ！ 僕は傷ついたよ！ こうなることを予想してたから言っただのに！！」

「言ってくれっという前振りじゃ……」

「違うよ！ 普通に受け取ってよ！？」

「ごめんっで謝ったやん」

「その謝った理由聞いて怒ってんだよ！」

明久、早よ済ませたいんやけど………周りに誰もおらんし… キヨロキヨロ ……使いたくないけど、最終手段！

「ちょっと、巧！ 聞いて はふう〜」

優しく抱きしめた。

いや、別にそういう趣味に目覚めたわけとかじゃなく、チビん時に泣いたり怒ったりした明久を、玲さんの見よう見真似で抱きしめて宥めたりしてたら、それなりに効果が出始めて、今でも使えるようになったというわけ。オレは落ち着かせるくらいしかできひんけ

ど、玲さんは落ち着かせるどころか、癒しを与えるからな……

「落ち着いた？」 カシャッ

「うん。さっきキョロキョロしてたのは、このせいか」

「さすがに、こんなところを康太に……なんか、…シャッター音が聞こえたような……」

「…………… じいーっ……………」

「まさか！ あるわけないよ。こんなところに、ムツツリー……  
がアアアアアっ!?!?」

「はっ。」

ギギギ…………… と機械仕掛けの人形のように、明久の視線を追った。

「…………… ぼっ 見つめられると照れる」

「ぐっ!?!? 油断したあっ!?!?」

「どっするのさ、巧!?!?」

「どっする？ オレ!……………、まずは

「康太。とりあえず、SDカードとネガ寄越せ」

「…………… 譲るわけがない。大事な商品」

「テメエ！ そんなもん売り出すつもりか!?!?」

「見損なつたよムツツリーニ!」

「…………… 背に腹はかえられない」

くっ!…………… 仕方ない。ここは

「明久の秘蔵の巨乳大全を」

「何を言ってるのさ。僕はそんなもの持ってな「じゃ、遠慮なく」うちの家宝です。大切に保管させていたでいます」

「……仕方ない。たらーっ……それで手を打とう ドバドバ」

「ムツツリーニ、今の一瞬で何考えたの!? って、あげないよ!」

「明久。残りの学園生活……彼女ができる可能性を棄てるっていうのか?」

「なっ!?!?……」

「お宝を放棄することによって、オレ達の不穏な噂は流れることなく、過ごせる……それはオレ達の輝かしい栄光の未来へ続く道筋となり、ゆくゆくは彼女とのハッピーライフへと繋がるんや!」

オレの言葉に明久は何か思うところがあったのか、いや、あったんやろうな……真剣な顔で頷いた。

「解ったよ、巧。ムツツリーニ、約束は守ってよ?」

「……もちろんだ。男に二言はない」

「よかつたあ」

「契約成立やな」

「……それよりも」

「ん?」

「……Dクラスへの宣戦布告は、終わったのか?」

「あ」

「ムツツリーニ康太も一緒に」

「……オレには、為すべきことがある」

「何なの? 写真の整理でしょう? だったら、」

「……島田の先ほど言っていたセリフの音声と写真に、映像。どれもレアな一品だ。写真は商品として出すが、音声と映像は明久にやってもいい」

「仕方ないよね。ムツツリーニまで巻き込むわけにはいかないから  
「お前な……ええけどさ……」

そうこうしているうちに、Dクラスへと着いた。ちなみに、康太はいつの間にかいなくなっていた。忍者か。

「お、着いた。文句なんかなくてもええ。さつさと入んぞ」

「あ、うん」

ガラツ と扉を開けて入った。

「頼もーっ!!」

「何でそれ選んだの? ……えっと、お邪魔します」

「去ね、豚野郎共」

「「酷っ!!」」

入っていきなり暴言! なんや、このクラス。と思ってたら、一人の男子生徒が近づいて来た。

「はは……ごめんな。ぼそつ 清水さんって、男が嫌いみたいだから」

「そうなんや。えーっと……」

「あ、ごめん。平賀だよ。一応、このクラスの代表だ」

こいつが代表か。

「で、君達は……」

「　　じゃない？」

「えっ、嘘おっ！？」

喋ろうとした平賀を遮るようにして、女子達の間でなんか騒ぎ始めた。なんや、いったい。

「何々だろっね」

「さあ……」

「あの一！」

女子の一人が声を上げた。

「えっと、僕？」

「それとも、オレ？」

「山崎巧くんと、吉井明久くんだよな？」

「おう」

「おう」

オレと明久の名前、何で知ってるんやろ？……

「やっぱり……」

やっぱり、って……オレは知らんしなあ。

「じゃあ、2人に聞きたいことがあるんだけど……いいかな？」

「「え？」」

明久とオレは、お互いに顔を見合わせた。  
聞きたいこと？ オレと明久に？？ なんやろ。ま、とりあえず  
聞くか。

「「どうぞ」」

「山崎巧くんと、吉井明久くんは」

オレと、明久は。うんうん。何？

「王子ですか？」

王子です……か？……

「「はい？」」

なんやそれは。冗談キツいわ。明久もおんなじ思いやったんやろ。  
全く同じタイミングで聞き返していた。

第九問 Dクラスに、入ろっかやめよっか考え中……。ってか、入るんやけどな

断空我さん、損長さん、アキ×美波さん、紅鎖さん、ヒヨウガさん、遅くなつてしまいました。感想ありがとうございます。

勇気りんりんです。(パンマンか)

これから、よろしくやってくださいませ。

暁 巧

第十問 清水の視線が痛い。なんやねん？ って思ってた見たらなあ、ビクッてキ

バカテスト

保健体育

【第八問】

・問 以下の問に答えなさい。

女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める。

（ ）の中を埋めなさい。

須川亮の答え

女性は（ 初潮 ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める。

「一般常識です」

教師のコメント

はい。正解です。

そうですね…

Fクラス男子の答え

女性は（初潮）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める。

「世界の常識です」

教師のコメント

なぜ文字を大きく書いたのかは、聞きません。

……そうですね。

土屋康太の答え

女性は（答えは、）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める。

「初潮と呼ばれる、生まれて初めての整理。医学用語では、整理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達するころに初潮をみるもの多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影

響される」

教師のコメント

詳し過ぎです。正解ですが…

姫路瑞樹の答え

女性は（初潮）を迎えることで第二性徴期になり、特有の体つきになり始める。

「吉井君に説明するの恥ずかしかったです」

教師のコメント

正解ですね。

ノーコメント。

吉井明久の答え

女性は（初潮）を迎えることで第二性徴期になり、特有の体つきになり始める。

「そう言えば姫路さん…小学校の頃から島田さんより、メリハリがあったな……。もうその時には初潮があったってことですよね？ あれって確か……。小学校低学年だったかなあ。先生、直接聞くのは不味いですよね？」

#### 教師のコメント

正解です。

はい、セクハラです。

#### 山崎巧の答え

女性は（初潮）を迎えることで第二性徴期になり、特有の体つきになり始める。

「まだ初潮を迎えていないだろうかと思って、島田さんが心配になってきました。早く、潮を吹かせてあげたいです」

#### 教師のコメント

……。  
とりあえず、生活指導します。山崎君に冷や汗吹かせてあげます。

島田美波の答え

女性は（初潮）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める。

「これでも、初潮きました」

教師のコメント

告げなくても大丈夫です。

木下秀吉の答え

女性は（初潮）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める。

「ワシに初潮はありません」

教師のコメント

解っています。

坂本雄二の答え

女性は（ 月経 ）を迎えることで第二性徴期になり、特有の体つきになり始める。

#### 教師のコメント

初潮の医学用語である、初経と間違えたんでしょうか？

坂本君……非常に言い辛いのですが……Fクラス唯一の不正解者です。

#### 後の雄二のコメント。

「……鬱だ……死のう……」

第十問 清水の視線が痛い。なんやねん？ って思って見たらなあ、ビクッてキ

「王子ですか？」やと？ Fクラスより頭がいいはずなのに……  
ちよつと、おかしいのか？ 飛んでるってヤツか？

「大丈夫？」

明久も同じ考えに至ったのか、見事に八モった。

「え？ え??？」

困惑している女子に教えてやる。

「初対面でいきなり王子とか言うから……」

「僕、ホントに心配してるんだよ？」

「バカにされても仕方ないわ。自分が答えを急ぎ過ぎて説明を省いたせいだしね」

ちゃんと、理由あったのか。なんやるな？

「で？ 理由つて？」

「今回の振り分け試験で、あなた達が退室してFクラスになった時の話」

明久もオレも退室したら、0点やって忘れとったからアレやけど……他の生徒からしたら、退室した瞬間にFクラス行きだと解ってたからやる。だからって

「何で王子？ 思い当たらんねんけど…」

「僕も」

「吉井王子はさ」

「話してくれるのはいいんだけど、その呼び方だけは改めて欲しいかな」

「恥辱的過ぎるからな。」

「明久王子はさ」「いや、名前で呼んでつて意味じゃないよ!？」

「熱を出して倒れた女子を助け起こして、「続けるんだ…」」

“ 具合が悪くて退室すると、『無得点』扱いとなるがそれでいいかね？ だと!？ あんた先生だろ！ 生徒の体の心配をするのが普通だろ!! 僕は無得点で構いません。彼女を保健室へ連れて行きます”

「つて言つて、出て行ったの」

「すげーな、明久」

「いや、僕は別に」

「私は」

「今度は別の女子が立ち上がって、」

「巧王子と同じ教室で、振り分け試験を受けてたの」

「今度はオレを辱めた。誰が王子じゃ。つて、オレは初めっからフアーストネームかい！」

「試験があと10分で終わりだつて時に、高橋先生が倒れて意識が朦朧としたまま動かなくなつたんだけどね、呼吸はしてるから大丈夫だつて巧王子が言つたら…誰かが、「じゃあ早くテストの続きをしないと、時間がもつたない」つて言つただけど…」

「巧が怒ったんだ」

「そう。」

“ 過労かもせんやる！”

“ 疲れているだけなら、10分休ませてから保健室へ連れて行けばいいって。その間テストしとけば”

“ 過労で死ぬこともあるんやぞ！ テストと命、どっちが大事なんや！！！”

って。助け起こした巧王子以外は、他の先生を呼びに行ったりすることもなく、ただ見てるだけとかテストをやっている人とか……巧王子以外は、自分のことしか考えてないって思った。私もどうしようって思ってるだけで、何もしなかったし、誰かがやってくれるって頭のどこかで思ってた。

それだけ言って、巧王子はそのまま高橋先生を抱き上げて保健室に行つたの「

「巧もおんなじようなことしてるし……」

「ウツセ。人が倒れたんやぞ？ 助けるやる」

「うん。まあね」

ていうか、“王子”って何回ゆった？      ん？      結局何でか解らんままやん。

「でさ、何でオレらが王子なわけ？ 人助けなら、偽善者でもOKやる」

「僕は、嫌だよ。せめて、正義の味方にしてよ」

「あー、それはね……2人が、お姫様抱っこしてたから」

「「ああ……」」

納得や。

がたん！

教室のドアが揺れた？

？ side

「高橋先生が倒れて」

「え？」

今……

「呼吸はしてるから大丈夫だって巧王子が言ったら……誰かが、

“じゃあ早くテストの続きをしないと、時間がもつたいない”って

言っただけど……」

「巧が怒ったんだ」

「そう。」

“過労かもせんやろ！”

“疲れているだけなら、10分休ませてから保健室へ連れて行けばいいって。その間テストしとけば”

“過労で死ぬこともあるんやぞ！ テストと命、どっちが大事なんや……！！”

って。」

「この言葉……」

「巧王子は、そのまま高橋先生を抱き上げて保健室に行ったの」

…巧…山崎巧…確か、Fクラスの……

「そうでしたか…お礼を言わなければいけませんね」

「あー、それはね……2人が、お姫様抱っこしてたから」

「！」 がたん！

わ、私もでしょうか！？ 保健室まで！？ 誰かに見られていないといいのですが……

巧 side

ガラッ 教室のドアを開けたけど、そこには誰もいなかった。

「誰もおらん……おかしいな……」

ま、とにかく用事済ませて戻りますか。

オレが確認を済ませて戻ってきた時に、平賀が声をかけてきた。

「それで、君達は何をしにきたんだ？」

「あ、そうだった」

明久のバカは、無視して

「Dクラス代表、平賀。オレ達Fクラスは、Dクラスに宣戦布告をする！」

「なっ！？ バカな！」

「バカじゃないやい！」

「黙ってるバカ」

「何で味方からも暴言を吐かれなきゃなんないんだ！」

「平賀のは暴言ちゃうわ」

「ねえ、巧のは？」

「脳のない頭で考えとけ。「あるよ！ 脳ある鷹は爪隠すって言うし」 はあ……。バカ久。今は、黙ってる。教室戻ってから聞いてやる。」

平賀、ごめんな

「気にするな。山崎、いつやるんだ？」

「開戦予定は、午後。時間は、追ってFクラス代表から連絡させる」

「解った」

「平賀」

「何だ？」

「お手柔らかに」

「そうはいかない。Dクラス代表として、このクラスを守らないといけないからな」

「はいはい。行くで、明久」

「あ、うん」

ガラッ

「おう、帰って……。無事なのか？」

「巧、明久。大丈夫じゃったのか。心配したぞ」

「無事じゃない、大丈夫じゃない！」

「え？ 吉井君、山崎君、大丈夫ですか？」

「あ、うん。身体は大丈夫」

「身体は？ 吉井、どういうことよ？」

「オレらの心は、ダメージを受けた」

「……それは心配」

「お前が原因だ！」

「……それは心外」

「全く…心配かけないでよ」

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」  
「なっ!？」

そう来たか！ さすがにフォローできんかった！ くっ…任務失敗や。……いや、こんなところで諦めんのか？ すうっ ここまで来て、引き下がれつかああ!!! って熱血っぽく、煽ってみたりして。

「ああっ！ もうダメ！ 心もがれるっ!？ 死にそう!!」

あ。明久なんか言い出したから、島田焦ってる。ならゆうなよ。

……しゃーないな……

「明久、島田はな…、明久に“ウチだけ見てほしい”って、思ってたみたいで、その為ならどんな手段も厭わないってことで、こんな

「じとじてるんや」

島田のセリフのところは、できるだけ声を似せる努力を……

「なんかよく解らないけど…、暴力じゃなければ嬉しいかな。島田さん」

「…ぼそっ 解らんのか……」

「「「「「… ぼそっ 解らないんだ(のか)(んじゃな)…」」」」」

「…嬉しい?…うん。解ったわ。気をつける」

「良かつ」 ぼそっ 死なない程度に…」 聞こえてるからね! ? 死なない程度って当たり前だよ! ……ちゃんと、五体満足で卒業できるか不安になってきた」

「オレの力量じゃあ、島田をどうにもできんかったみたいや…」

「お主は、よくやった。特に、島田になりきるところとか、感動を覚えた」

オレの呟きに、秀吉が話しかけてきた。

「お、おう…」

秀吉が瞳をキラキラさせてくつついて。若干動揺した自身を叱ってやりたい。美少女が抱きついてきたんやから、抱きしめ返さんといかんのに。

「近い近い! だから顔! キスする気かつ!!」

『『『何いいつ?!?!?』』』

「……とりあえずじゃな、我が演劇部に入らんか？」  
「入らん」

コンマの間も無く、即答。

「そう……か……」

秀吉の瞳から輝きが消えた。

「って、そんな落ち込むんかい！ 暗い暗い」  
「……………」

男の娘（美少女）を暗い顔にするなんてあかんやろ。……………くう  
っ……………

「解った！ 解ったから！」

ぱっ と勢いよく顔を上げて、秀吉はオレの言葉に食らい付いた。  
た。

「では！」  
「待って」  
「うむ」

待てをされた犬か！ 従順過ぎ！

「あのな、掛け持ちでってことなら考える。それと」  
「うむ、仕方ない。それで？」

「 秀吉を好きにしてもいいっていう条件なら」

「うむ、仕方な　くないぞ!?　というか、巧はいつもワシを好きにしておるじゃろ!」

『『『山崎を殺せ!』』』

「待てて!　秀吉は男だし!」『『『関係ない!』』』　お前らにだって役得が…『『『お前が実行するってことが許せない!』』』

『『何々や、お前ら!』』!」

『『『我らか?　我らは…』』』

突然Fクラスの男子の8割が集まって、会話…会議か?...始めた。

『『『FFF団だ』』』

「なんか生まれた!?　オレのせいか!?!?」

『『『山崎巧を逃がすな!』』』!』』

「ちきしょーっ!』』!」

なんか解らんけど、変なものが開設されました。オレのせいじゃないと思います。あいつらがおかしいんです。(まる)

第十問 清水の視線が痛い。なんやねん？ って思って見たらなあ、ビクッてさ  
みなさんは、バカテストも楽しんでいただいでるんでしょうか？  
だとしたら、嬉しいんですが…

バカテスト

保健体育

【第八問】

・問 以下の問に答えなさい。

女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つき  
になり始める。

（ ）の中を埋めなさい。

木下優子の答え

女性は（ 初潮 ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の  
体つきになり始める。

「秀吉にはきません」

教師のコメント

でしょうね。

工藤愛子の答え

女性は（初潮）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める。

「初潮と呼ばれる、生まれて初めての整理で、もちろん、ボクもきましたよ？」

日本での初潮年齢は平均12歳って言われてるんですけど、ボク、もうちょっと早かったかも。

そう言えば、今月整理まだだなー」

教師のコメント

…報告しなくて結構です。

霧島祥子の答え

女性は（初潮）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める。

「…雄二に教えるの忘れてた。今度教えにいかないと」

### 教師のコメント

あー……。頑張ってください。

第十一問 明久が島田を！?!? かと思つたら、明久、何叫んじやってるわけ

バカテスト

生物

【第九問】

・問 以下の問に答えなさい。

人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい。

坂本雄二の答え

? 脂質

? タンパク質

? 水分

? 炭水化物

? ビタミン

「なんか、嫌な予感がした。これから、もう少し真面目に頑張つて行こうと思います」

教師のコメント

水分ではなく、ミネラルですが、ほぼ正解ですので をあげます。

嫌な予感というのは、解りませんが、頑張ってくださいね。

姫路瑞樹の答え

? 脂質

? 炭水化物

? タンパク質

? ビタミン

? 吉井君

「吉井明久君がいれば、明日もがんばろって思います。ですから、週末は寂しいです…」

教師のコメント

あと一つは、ミネラルです。

姫路さん少し変わりましたね…。一枚のプリントにつき、一つのボケをするようになったあなたの変化にまだ着いていけてません。

真っ直ぐなあなたの気持ち、伝わるといいですね。

吉井明久の答え

? 砂糖

? 塩

? 水道水

? パンの耳  
? 山崎巧

「巧のお陰で、餓死することがありません」

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

それより、山崎君に相当迷惑がかかっていると思います。自己管理は徹底できるようにしていきましょ。う。

島田美波の答え

? 吉井明久  
? 山さき巧  
? 坂本ゆうじ  
? 土やこう太  
? 木下ひで吉?

「五大? 五人? 木下は、未だに男かうたがわしいです」

教師のコメント

もう少し漢字の勉強をすれば、あなたの成績も上がると思います。頑張つて。

木下秀吉の答え

- ?メトロポリタン美術館
- ?ルーブル美術館
- ?エルミタージュ美術館
- ?大英博物館
- ?タンパク質

「あと一つが思い出せんかった」

教師のコメント

五大栄養素ですので。

五大美術館のあと一つは、プラド美術館です。芸術に関する  
ことには、強いのでしょうか？

須川亮の答え

- ?地
- ?水
- ?火
- ?風
- ?空

「五大エレメント！」

教師のコメント

ゲームですか？……強ち間違っていないのが悔しいですね。

エレメントではなく、五大といいます。五大としては正解です。  
五大とは、ヒンドウー教における「あらゆる世界」を構成している  
とする5つの要素です。

土屋康太の答え

? える本

? 大人の本

? Hなマンガ

? 成人雑誌

? アダルト雑誌

「……………あと、ポルノ映画に、フランス書院とA 大人のVTR」

教師のコメント

ほとんどというか、…全部同じです。

土屋君を構成している5つの要素でしょうね。

未成年者のあなたには必要のない物です。……………何より先生は、

生徒を死なせるわけにはいきません。

### 山崎巧の答え

- ? 肉
- ? 米
- ? 野菜
- ? 果物
- ? 水

「これを食べれば、タンパク質、ビタミンやミネラルもきっちりとれてバランスのとれた食事」

### 教師のコメント

間違っではないです。が、解った上で答えなかったのか、素で残念なことをしているのか知りませんが、……………残念です。これ以上の言葉が見つからず、残念申し訳なく思います（×）。失礼しました。大変申し訳なく思います。

第十一問 明久が島田を！?!? かと思つたら、明久、何叫んじやってるわけ

明久 side

「ホントにアホだなあいつは」

「知ってたはずなのに、改めて認識させられちゃったよ」

「明久、幼馴染みなんじゃろ？」

「そうだよ」

「……だけどスゴく似ている」

「ふふ…… そうですね」

「まるで家族よね。バカとあほだけど」

「兄弟のようじゃ。ワシんところも見習いたいくらいじゃな、その仲の良さ」

「そっか……、そう見えるんだ……兄弟で、家族……か……姉さん喜ぶだろうな……」

「なんか言つたか？ 明久」

「ううん。別に。巧は、相変わらずだなあつて」

「昔からあんななのか、お前らは」

「えつと……昔はもつと」

「頭が良かったと」

「なんでさ！? そんなわけないよ！ 今の方がバカだつて言うの！?」

あれ？ 空気が温かくなつた？……その目は何？ まるで、保育園児や小学校低学年の子を見るような……ん？ 僕、バカにされてる？

「明久。そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ。先に屋上へ行ってるから、巧を連れて来い」

他の場所で話し合いをするつもりのもりのようで、雄二は扉を開けて外に出て行った。

巧を連れて来い？ 僕が？

「バカな！？ あの集団に飛び込んで逝けっつてのわ！？」

「あの、痛かったら言っつて下さいね？」

そう告げて、姫路さんは小走りに雄二の後を追った。背中に悪魔の羽が見えたのは、気のせいじゃないと思う。

「つて、姫路さん！？ ケガすることが前提だよわ！？ それ」

「大変じゃの、明久」

「秀吉も人事のように……」

秀吉も、僕の肩を叩いて廊下に出て行った。

「……………（サスサス）」

自分の頬の辺りを擦りながら僕の前を横切るムツツリーニをじと目で見た。

「隠し撮りしていた時はまだうつすらと残っていたんだけど、今は覗いていた時の畳の後はもう消えてるよ？」

「……………！！！！（ブンブンブンブン）」

「いや、今更否定されても、ムツツリーニがHなのは周知の事実だから」

「……………！！！！（ブンブンブンブン）」

「ここまでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いなと思う。Fクラスの常識なんだよ?」

「……………!!!」(ブンブンブンブン)

「何色だった?」

「水色」

即答か。

「やっぱりムツツリーニは、色々な意味で凄いよ。隠し撮りもするしね? よっ、性犯罪者」

「……………!!!」(ブンブンブンブンブン)

あ、巧呼びにいかないよ。

うん? 僕? 怒ってないよ? あははっ

そうやって話しているといつの間に隣へ立っていたのか、声をかけられた。

「吉井、途中まで一緒に行ってあげる」

うん。巧がいないと不安になるのは、なぜだろう。島田さんの好意が素直に喜べない…。あ、こんなこと考えてるのがバレたら殺される。

神様をお願いして。

何事も起こりませんように……

「吉井?」

「あー、はいはい」

「返事は一回！」

「へーい。解ったよ」

「……一度、Das Brechen ええと、日本語だと……」

「……調教」

「そう。調教してもらわないとね」

「えっ！？ 今……」

僕、ドキドキだよ！

「そういうことは経験ないんだけど、が、がんばるよー！」

「え？ 吉井？」

「……明久？……どういう……」

「僕、頑張つて、島田さんを調教してみせるよー！！」

「え……ええっ！？！？」

「……強気娘を調教……だと……っ！？ ブシャアアアッ」

「えっ！？ どうしたのさ、ムツツリーニー！！」

とりあえず、ムツツリーニを介抱した後で、何故か顔の真っ赤な島田さんと別れて、巧を呼びに行った。

巧 side

何とかしてバカ共を振り切ったところで、明久がオレを呼びに来た。

屋上までの道すがら、明久からついさっきの出来事を聞いた。……。

「あほか、お前」

「何でさ!」

「いや、だって…それは、誰が聞いても島田美波を吉井明久が、性的な意味合いで調教してみせるって言うって宣言してるやろ」

「何だつて!?!?!?」

「貴様が驚くことに驚きやわ」

「そんなの……」

何やいったい。

「僕の方が、調教される側に決まっているじゃないか!!!」

明久は力一杯、DMを公言。バカだなあ……

「屋上着いたぞ」

「あ、うん」

屋上に通じるドアを開けて 僅かに息を飲んだ。

春風に包まれて笑みを零す友人達に思わず携帯のカメラで写真を撮った。仲間に入っていないオレ達は、

「明久」

「ん?」

「あんなにオレらもおつたんやな……」

「だね」

「オレらだけで、写真撮ろ?」

「OK。後で、僕の携帯にも送っておいて」

「あいよ。撮るぞ。 3、2、1、ハイ」 カシヤツ

親友として、家族として写真を撮った。

オレの今この瞬間が、まさか“早速”走馬灯に出てくるとは思っ  
てもみなかった。

第十一問 明久が島田を！?!? かと思つたら、明久、何叫んじやってるわけ関係ないけど、モンハン買い損ねたッ!!!!!!  
売ってた時に、後で買いに来よつて思つて後で行つたら売り切れ…  
……残念です。

あ、またね。

第十二問 姫路がツッコミたいってさ。つーか、オレは姫路にツッコミたい。い

バカテスト

現代社会

【第十問】

・問 以下の問に答えなさい。

P K Oとは何か、説明しなさい。

姫路瑞樹の答え

P e a c e

K e e p i n g

O p e r a t i o n

( 平和維持活動 ) の略。

「国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと。だと思ったら大間違いです」

教師のコメント

間違いではありません。あってますからね？

島田美波の答え

P e r f e c t i o n

K n o c k

O u t

の略。

「ボロ負け。もしくは、ボロ勝ち」

教師のコメント

社会です。体育ではありませんよ。  
一歩？ 丈？ ああ、範 バキ。

山崎巧の答え

P y o c c o l a

K e e p i n g

O p e r a t i o n s

の略。

「ピヨコラ様を かいがいしく お世話し隊の略。  
悪の軍団『ブラ クゲマゲマ団』女首領のピヨコラ アナローグ  
? 世の部下のリク ハイゼンベルク、カイ シュヴァイツァー、ク  
ウ エアハルトの3名からなる。中の人ユニットでもあるつまり、  
声優さんの」

教師のコメント

何人の人が解るんでしょうね。

木下秀吉の答え

P u r e

K i n d

O b l i g i n g  
の略。

「あ、明久かの…巧も…結構優しいのじゃ……」

教師のコメント

純粹で優しく親切な。

優しさですか…教師の間でも評判ですよ。今年の振り分け試験であつたことは。

霧島翔子の答え

P a p a

K i n d l y

O b e d i e n t  
の略。

「…坂本雄二のこと」

教師のコメント

思いやりがあつて、よくいづことをきく従順なお父さん。

坂本雄二の答え

P e a c e

K e e p i n g

O l e

の略。

「俺の平和維持」

教師のコメント

お父さんだそうですね？ おめでと〜いと思います。

吉井明久の答え

Ponytail

Kiss

Obscene  
の略。

「今日はおかしいんです。僕の欲望が…」

教師のコメント

ポニーテイル淫らなキス。

島田さんには見せない方がいいですよ。それとも、見せた方がいいんでしょうか…とりあえず保留で。

土屋康太の答え

Pants

Koshitsuki

Oppai

の略。

「世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体または、世界条令」

教師のコメント

世界無礼んな。

第十二問 姫路がツッコミたいってさ。つーか、オレは姫路にツッコミたい。い

軽く片手を上げて、みんなの輪の中へ入っていく。

「ただいま」

「お帰りじゃ」

「あー！ズルい、僕も！ただいま」

「お帰り、吉井」「お帰りなさい、吉井君」

おーおー。明久、驚いた顔しとる。

「あ、そつだ。島田さん」

「何？」

「さっきはごめんね？簡単に調教するなんて言って」

「……………」

「……………は？」

みんなが一斉に沈黙する中、雄二だけが間の抜けた声を発する。  
オレも、最初聞いた時そんなんやつた。つーか、いきなりその発言  
はどうよ？みんな言葉になってへんやん。

30秒ほど経ったか？ 静寂を破る者が現れた。

「……………ブシヤアアアッ！」

「ムツツリーニー!?」

「…何があつたんだお前ら……………」

「まだ何も無いわよ！」

「島田よ。これから何かあるのかの？」

「あ…、あるわけないでしょっ!?!?!?」

「美波ちゃん……」

姫路に黒い暗いオーラが見えるのは気のせいか？ あれじゃあまるで、『この世全ての悪』（アンリ・マ）を使う、黒桜や……をっ？ 收拾がつかなくなる前に、雄二が話題を切り替えた。

「それより、巧、明久。宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろす。

「一応今日の午後つつたけど、時間の詳細は代表から知らせるって言ってるから」

オレらも各自適当な場所へ座り込んだ。

「ああ、解った。それで構わない」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

上手く話を代えることに成功したみたい。さすが、雄二やな。

「そうなるな。 で。明久、今日はまともな飯か？」

「残念ながら、今日は巧の弁当はなし。だからさ。雄二、パンでもおごってくれると嬉しいんだけど」

「おごるか、バカ」

「え？ いつもは山崎君のお弁当何ですか？ それって……やっぱり2人は……」

「何？ どうしたの、瑞樹？」

「先ほどここへ来る途中で聞いてしまったんです」

「何を？」

「2人が付き合っているって」

「ええっ!？」

「ぶーっ!」「ごはっ!」

オレは飲んでたお茶を吹き出して、明久はさっきオレがやった飴を喉に引っ掛けたらしく、見目汚らしく咽た。

「かはっ、ごほっ! かーっ! (痰が絡んだ時みたく) ぼはあ  
っ!？」 ころっ

出たみたいやけど、オレも大量のお茶が器官に入って、胸の苦し  
い咳が止まらない。

「かはっかはっ、ごほっがはごほっ!!」

「だ、大丈夫か!？ 2人共!」

秀吉がオレらの背中を擦ってくれる。マジ助かる。あー、秀吉。  
マジで秀吉は

「「いいお嫁さんになるよ」「」

「何を言っておるのじゃお主らは!？」

「ほら! 木下君をお嫁さんにしたいって!」

「何で男なのよ! 女じゃダメなわけ!？」

姫路、誰もんなこと言っつてねえよ。

「姫路達も何を言っておるのじゃ!？」

「ごめん、秀吉にだって選ぶ権利はあるもんね……」

「お前な……っ！か、オレはないけど、明久は大丈夫やつ」

「そんなことない！　ワシは2人共大好きじゃっ!!！」

「へ？」

秀吉……明久勘違いするやろ。おもろいからええけどなあ〜っつと。

「木下(君)!!？」

「……っつて！　何を言っておるのじゃワシは〜!!??!!？」

「……告白」

「…っがっ！　ワシは、ワシは……」

康太が余計なこと言うから、秀吉変になったやん。

「秀吉っ!!？」

「なんかもっヤダ、こいつら」

雄二が愚痴りよった。

「雄二」

「何だ？」

「さっき自己紹介終わったとこ」

雄二のテンションさらに下げた。

「初日かあ〜……」

「盛大な溜め息やな」

「初日からコレだぞ？　あとまるまる一年間あるんだぞ？　溜め息

もつきたくなる」

「御愁傷様、代表」

「その原因の一端には、お前もいるんだってこと　忘れてないだろっなあ？」

「はて？　Fクラス1、普通でベストオブ平凡なオレが？」

「はあ〜〜……………冗談でもキツイ」

「なんやそれっ！？　傷つくわ！　ぐう〜〜っ　いただきます」

「ホント、マイペースだなお前は」

「もきゅもきゅ　ほっほへ（ほっとけ）」

「あっ！　巧、そのサンドイッチどうしたの！？」

「んあっ？　さっき逃げ回ってる時に買ってきた。ホレ」

もう一つのサンドイッチを放った。

「え？　僕の？」

「言っとくけど、今度ちゃんと返せよ？」

「もちろん！　巧、ありがとう！　僕はたく　「そらあっ！」「」

明久が余計なことを口走る前に封じた。

「……………ナイスファイト」

「いらんことは言わんでええから、さっさ食え」

「はい。いただきます」

「どうぞ、おあがり」

「あ、あの、吉井君って山崎君のお弁当がない時は、お昼食べないんですか？」

「いや。…一応食べてるよ」

「……………あれは食べていると言えるのか？」

「何が言いたいのか」

明久、解つてて聞いてんのか？

「いや、お前の主食って 水と塩だろう？」

せめて、米食おーな。

「失礼な！ 馬鹿にするにも程がある！」

「じゃあ何か？ お前は」

「きちんと砂糖だつて食べているさ！！」

「……………そうか」

雄二。哀れみっていうか、めっちゃ悲しそうな表情になってんぞ。

「あの、吉井君。水と塩と砂糖つて、食べるとは言えませんが……………」

「“舐める”、が表現としては正解じゃろうな」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

「巧、実際のところどうなんだ？」

実際ねえ…………

「ん〜…新作新刊が出る度に、マンガ買ってラノベ買ってゲーム買って、この前は服も買ってたかな？ 頭から足までマネキンが着てるやつを“上から下まで僕に合うサイズの物ください”って、買ったりしてたもんな？」

「自業自得だろうが。それでよく、仕送りが少ないなどと言えるな」

ほんまやわ。

「ぐっ……………返す言葉がない……………」

姫路がおずおずと手を上げた。…なんや、いつたい。

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」  
「彘？」

姫路大胆やな。島田も負けてられへんで？

「本当にいいの？」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか明久。女の子の手作り弁当だぞ？」

「うん！」

「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井“だけ”に作ってくるなんて」

「あ、いえ！ その皆さんにも……」

「俺達にも？ いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「……お手並み拝見ね」

「解りました。それじゃ、皆に作ってきますね」

「姫路さんって優しいね」

「っ……」

島田不満気な顔しとる。お前も行ったれって。

「そ、そんな……」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「にしたいと思ってました」

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」  
「……………すごい。俺にはムリ」

確かにムリや。あ、ていうか、

「姫路一人やったら大変やしさ、島田も作ってきいや（きたら）。  
半分ずつ作ればええんちゃう？」

「え？ でもそれじゃあ、ウチが…」

「？ ……ああ！ ぼそっ 明久やる？」

「何よ」

「姫路と島田が明久に一つずつと、後残り人数半分ずつ作ればOK  
やる？」

「そ、そうね！ 山崎がどうしてもウチのを食べたいっていうから、  
ウチも作ってくるね」

あ、うん。わかった。それでいいや。

「島田さん本当に！？ ありがとう。ホント島田さん」

「いらんことゆるくなって、弁当食えんぞ？」

「 が欲しい」

「どストリートに来たな」

島田真つ 赤やぞ。姫路もさっきのセリフが残ってんのか、ほんの  
り赤いし…そのクセ、羨ましそうに見とる。

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」  
「だって…お弁当が……………」

明久は、弁当の為なら何でもしそつやな……………

「明日、作ってくるからね」

「はい、楽しみに待っていてください」

「おう、楽しみに待っておく。さて、話がかなり逸れたな。試召戦争の話に戻ろう」

「あいよ」

「のお、雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？ 段階をふんでいくならEクラスじやろうし、勝負に出るならAクラスじやろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

雄二が鷹揚に頷いた。どうする？ コマンド？

「どんな考えですか？」

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？ でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

姫路がおるだけでもちやうもんな。

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれないな。けど、実際のところは違う。オマエの周りには面めん子ごをよく見てみる」

「えーっと……美少女3人と、ごろつきが1人とゴリラが1匹に、性犯罪者が1件いるね」

一つ、生き物のカテゴリーから外れてるって。 犯罪件数になつてる。

「誰が美少女だと!?!」「……………(ぽっ)」「オレ女ちゃうで」

とか思いつつ、ボケる！

「何でお前らが美少女に反応　「だーれが、ゴリラですって!?!」  
何でさ!?!」

ん？　ちよつと待てよ……てことは……

「残りの秀吉か姫路が、ごろつきか性犯罪者？」

「……」「なんでやねん!!」「……」

ナイスツツコミ!

「皆さん、落ち着いてください」

「そ、そうだな」

「いや、まさか姫路と秀吉がな……」

「巧、もついいよ」

「話戻すぞ。ま、要するにだ。………姫路、ツツコミに混ぜれなかつたからといって寂しそうな顔するな」

「次の時ツツコミい？」

「そうだよ、姫路さん。また次があるよ」

「はい！　頑張ります!!」

「……はは……」

コホン、と咳払いをして雄二が説明を再開する。

「また脱線してしまったな。あー、とにかく。姫路に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である

以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「？ それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？ そ

れに。さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦における必要なプロセスだしな」

「あ、あの一」

「ん？ どうした姫路」

「えっと、その。さっき言いかけたって……吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相

「それはそうと一」

さっきのツッコミは、ベストやったのになー。そのタイミングはあかんやろ。ほとんど聞こえたもんな。

「さっきの話、Dクラスに勝てなったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

「何でや？」

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

「勝てる？ ……僕らが？ ……試召戦争で？」

「ああ、そうだ」

自信たっぷりな雄二は頷く。

「…いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

なんや、身震いした。鳥肌立ってるし……

ははっ！ すげーな、雄二ー！！

「ふっ、はは おもろいなあ……。おもろいわ雄二！」

「ふふ いいわね。面白そうじゃない？」

「そうじゃな。雄二の期待に応える為にも、Aクラスの連中を引きずりおとしてやるかの」

「……………（グッ）任せる」

「が、頑張りますっ」

「僕達の手、見せてやる!!」

「ふっ……。そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、オレ達は勝利のための作戦に耳を傾けた。

……………一瞬、視界の片隅で須川の姿が見えた気がする……………

弁当のくだりは、聞かれてへん……。よな……………？

すぐさま見直したけど、おらんかったし、大丈夫やる。うん。

だから、幻の如く瞬間的に見えた須川の血走った様な真紅の眼は、寝不足で充血してたんや。…と、信じたい。。。

第十二問 姫路がツッコミたいってさ。つーか、オレは姫路にツッコミたい。い

レフェルさんヒョウガさん。感想ありがとうございます！

屋上会議の回。次回やっとな試召戦争突入です。遅いですかね？まさかこんな時間がかかるとは、自分でも思ってたので……。

次回もよろしくお願いします。

第十三問 赤壁の戦いはエベレストに登ること？ はあ？ 狂戦士がいつぱい

バカテスト

一般常識

【第十一問】

・問 以下の問に答えなさい。

お米の磨ぎ方を、説明しなさい。

吉井明久の答え

「水を入れて最初の水はすぐに捨てます。（埃等を取り除く為）その後からあまり力を入れずに磨ぎます。力を入れ過ぎるとお米が欠けて、旨味、栄養価、食感までもが損なわれます」

教師のコメント

そうですね。一人暮らしと聞いて心配していましたが杞憂だったようですね。

山崎巧の答え

「蛇口の水を流しっぱなしにして白くなった水がなくなるまで流し続けて磨けば、美味しくお米が炊けます」

教師のコメント

そうなんですか？ 今度試してみます。

坂本雄二の答え

「数回強く手早く混ぜて磨ぎ、母親が帰って来る前に全ての料理を作り終えます」

教師のコメント

…なぜそこまでするんでしょう。本当に胃にダメージが？

姫路瑞樹の答え

「クレンザーと金束子だわしで磨ぎます」

教師のコメント

ははっ、姫路さんにしては面白い解答ですね。

吉井玲の答え

「砥石を使って一粒一粒……」

教師のコメント

吉井君のお姉さん。さすがにそれは1日中かかりますよ（笑）

高橋洋子の答え

「ミキサーに水を入れてスイッチを入れれば完成です」

教師のコメント

ミキサーは使いませんし、まだ完成ではありません（苦笑）

坂本雄二の母の答え

「洗浄機にかけました。洗濯機と迷ってしまったんですけど、さすがに取り出すのが大変だな。と思って」

## 教師のコメント

過去形！？ 取り出すのが大変だからという理由で選ぶのですか！？ 洗濯された後排水されますからね！？ というよりも、洗浄機も取り出すのが大変ですよ？ 手を伸ばす距離って事ですか？！？

もしかして、吉井君のお姉さんも……いや、この解答を見る限り、姫路さんと高橋先生も……

第十三問 赤壁の戦いはエベレストに登ること？ はあ？ 狂戦士がいつぱい

クラスへ戻った途端に、オレ、明久、雄二、康太は、FFF団とやらに取り囲まれた。だからなんやねん、FFF団つて。っつーか、縛られたぞ。意味解らん。

それにこいつら、まともな格好のやつがいねえ…

エリミネータとか大魔導とか…オレからしたら、超エンカウン  
ト。

FFF団員団長が現れた！ 副団長が現れた！ A〜？が現れた！  
FFF団は、会話をしている。って感じで、魔物の群れにしか  
見えん。

『諸君。ここはどこだ？』

『『最後の審判を下す法廷だ！』』

『異端者には？』

『『死の鉄槌を！』』

『男とは？』

『『愛を捨て、哀に生きる者！』』

『宜しい。これより 2・F異端審問会を開催する！』

『おい、俺達が何したって言うんだ？』

「ムダだよ、雄二。こいつら、まともに見えない」

「……………これがまともに見えたらそいつもどうかしている」

「あ」

「どうした？」

「もしかして……………。いや、さっき屋上で血走った目の須川を見た気がし」

『罪状を読み上げたまえ』」

『はっ。須川会長』

「 やっぱり」

『えー…被告、山崎巧、土屋康太、坂本雄二、吉井明久（以下、この者を甲とする）は我が文月学園第二学年Fクラスの生徒であり、この者らは我が教理に反した疑いがある』

「オレが主犯核やと思われてんのが、納得いかん」

「他はいいつてののか？ 俺は、全てに納得がいかないんだが？」

「僕は最後で良かったあ」

「……………おかしい」

『甲の罪状は女性ら、島田美波（以下、この者を赤壁とする）と姫路瑞樹（以下、この者をエベレストとする）に対する強制労働及び背信行為である』

「……………おいつー！……………」

『特に、山崎巧と吉井明久らは、木下秀吉（男の娘というジャンルの美少女。以下、この者をオネニイ様とする）から教理に反する事を言われて、受容している節が見られた。午後から開戦のある事を知っていた我らは、甲らは必ずやここに帰って来るので、万全の態

勢にて待機。扉の開かれた瞬間に対象者を確認。全容疑者が揃った時点で、我らが同胞が確保。現在に至る。

赤壁とエベレストに対する強制労働を未然に防ぐ為、明日の朝日を拝ませないように、甲らを本日中に処分を

「なあ。島田達まで、酷いこと言われてんで」  
「…だな」

『御託はいい。結論だけを述べたまえ』

『女子の手作り弁当と木下から大好きと言われていたので、羨ましいであります！』

『うむ。実に解りやすい報告だ』

最初っからそう言えや！

『隊長！ 早速刑を執行しましょう！』

『ようし！ では刑を執行する』

「早いな、おい！」

『作戦名、【貴様らに朝日は拝ませねえええつ！！！！！！】開始』

『『『ぶうるうあああゝ ああつ！！！！！！！！』』』

『『『バルバトス・ゲー イア！？！？』』』

怖っ！ 狂戦士バクサーカーがいつぱいや！？

オレ達は、開戦直前まで追われることとなった。

「吉井！ 木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテイルを揺らしながら明久達の方へ駆け寄って行ったのは、島田。オレも点数補充が終わって、島田と同じタイミングでの参加。

「ああ、胸か」

「ちよっ！ アンタ、胸を見てたのっ！？ やっぱり調教する気！？」

「えっ！？ ち、違うよ！ 調教はアレだっ」

「ちゃんと喋れな。明久」

明久にツツコミを入れつつ、ふと、島田を見ると、自分で自分を抱きしめるかのように、腕を交差させて胸を隠しながら朱に染まった頬と潤んだ瞳で上目遣いをしながら呟いた。

「う…あ…え、えっち…」

「ぐはっ！?!?」

すげー破壊力やった。…危うく吹き出してまうところやわ。まだ鼻熱いって。オレは何とか耐えたけども、明久は

「よしっ！ たらーっ …耐えきった！」

「出てるって！」

「吹き出さなかったことを褒めてよ」

鼻血を拭きながら、明久が聞いてきた。

「ほーいう巧こそ、っと。平気なの？」

「はっ！ 未だに鼻の奥があちいよ」

「仕方ないよ。あれは反則だもん」

「だよな」

「な、何言ってるのよアンタ達」

「色っぽい島田さんにやられるところだった」

「エロ可愛い島田に魂もってかれるかと思った」

「にゃっ!?!」

「「にゃっ?」

「んでもない。何でもないって言ったにょ!」

「「……………」

島田が噛んだんか？ 黙ってまうオレら。

仕舞いに島田が俯いて、

「……………っ! …… カアッ」

赤くなつた。

「「ふぐおおおおつ!?!?!?!?!」

それを見たオレらは、死ぬほど悶えた。



拷問で間違いない。洗脳されてしまえば、拷問やと気づかんからな。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん？ なに？ 作戦？ 何て伝えんの？」

「総員退避。と」

「意気地なし……」

「うっ……」

「いい？ アンタは部隊長なんだから、臆病風に吹かれてちゃダメ。木下達が点数を補給する間、ウチら中堅部隊が、前線部隊に代わって前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出したりしたら、アイツらは補給ができないじゃない。ね？」

「ごめん、ちよつと弱気になってたみたい。（せつかく勇気をくれたんだ）キミの為に頑張るよ！」

「ふえっ!？」

うん。今オレ空気。オツス！ オレ空気! ……泣くぞコラ。

「イチヤイチャしてんと早よ行くぞ。号令かける」

「「えっ!？」 違っ」「」

あいつら放置で移動。全く、羨ましくない。ホントに、マジで。

「全員突撃いーっ!」

背中では明久の号令を聞きながら進んでいると、オレの方に向かって走ってくる可憐な美少女と目が合った。運命!？

「巧、援護に来てくれたんじゃない！」

「いつ見ても可愛い秀吉、大丈夫か？」

「お主こそ…大丈夫か？……まあとにかく、戦死は免れておる。じやが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい」

冷たいな……………秀吉。

「召喚獣の様子は？」

明久が追いついてきて、確認する。

「明久、お主も来てくれたのか。ワシの召喚獣は、もうかなりへ口へ口じゃな。これ以上の戦闘は無理じゃ」

「そつか。それなら早く戻ってテストを受け直してこないと」

「そうじゃな。全教科を受けている時間はなさそうじゃが、1〜2教科でも受けてくるとしよう」

言つてすぐに、秀吉は教室に向かって走っていった。その後ろに前線部隊に配置されたクラスメイトが続いてく。出陣した時より人数が少ないのは補習室に連行されているからやろうな。

「吉井、山崎、試召戦争のルールは覚えている？ その科目の教師がいないと召喚はできないからね！」

「わかつてる！」

「多分、きつと大丈夫……………やったらええな」

「山崎！？」「巧！？」

【文月学園におけるクラス設備の奪取・奪還および召喚戦争のル―

## ル

一、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。  
。なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。

二、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は、該当科目においてもつとも近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。総合科目については各科目最新の点数の和がこれにあたる。

三、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減点され、戦死にいたりると0点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

四、召喚獣はとどめを刺さ

れて戦死しない限りは、テストを受けなおして点数を補充することでも何度でも回復可能である。

五、相手が召喚獣を喚びだしたにもかかわらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

六、召喚可能範囲は、担当教師の周囲半径10メートル程度（個人差あり）。

七、戦闘は召喚獣同士で行うこと、召喚者自身の戦闘参加は反則行為として処罰の対象となる。

八、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北を持つのみ決定される。この勝負に対し、教師が認められた勝負である限り、経

緯や手段は不問とする。  
あくまでもテストの  
点数を用いた『戦争』  
であるという点を常に  
意識すること。

「らしいよ？」

「「知ってるよ！」」

「九、山崎巧の存在、言葉は絶対」

「絶対！……って、無いよそんなの！ 何で巧最強、最高みたいな  
ことになってんのさ！」

「新世界の神やから？」

「あはっはっはっ！……って、夜 月か！」

「おっ。ノリツツコミ まあ、個人的には八 庵の方が」

「どうせ、同じチームだった美女達がメインでしょ。」

まあ、ルールって言ってもちよくちよく改定されるし、他にも色  
々と細かいルールはあるし、面倒くさいんだよね」

「だけど、大まかには今の八条までを覚えておけばOKよ」

ま、なんとかなるやる。

「吉井、山崎、見て！」

「「任せる（て）！」」

オレと明久は島田を見つめる。時折、各種パーツにも視線をやる  
オレ達。

「う、ウチじゃないわよ！ あっち！」

「そっちは任せた！」

「僕達は島田さんを見てるから！」

オレら息びったりやな。

「何ですよ！ ほ、ほら、五十嵐先生と布施先生よ！ Dクラスの奴ら、科学教師を引つ張ってきたわ！」

数で当たってきたわけか。1 vs 1で勝てるやつは、Fクラスじゃ数人やしな。

「島田さん、科学に自信は？」

「全くなし。60点台常連よ」

「自信満々で返すような点数じゃないやろ……」

「そういうアンタはどうなのよ？」

「一応、100はあるぞ？」

「くっ！？……やるわね」

「それでも厳しいよ。それなら五十嵐先生と布施先生に近づかないよう注意しながら学年主任のところに行こう」

「高橋先生のところね？ 了解！」

「高橋先生のところやな？ 了解っ！！！」

「巧、同じこと言ってる。繰り返さなくていいんだよ。」

もさつとした五十嵐先生と布施先生だとテンションが上がらずに、美人の高橋先生のところへ行けて嬉しいのは解るけど」

「お前はエスパーか！？」

「解らいでか。それより、静かにしないと誰かに見つか。あ、そこにいるのはもはや、美波お姉さま！ 五十嵐先生、こっちに来て下さい！」

「つたよ？」

「くっ！　ぬかつたわ」

「やりおるではないか」

「何者なんだよ2人共！！」

清水はまだオレの目が怖いんか、チラッと見ては怯えやがる。

一声かけて和らげるか？

……………でもさ、オレだって傷つくんやで？　……………誰か癒してくれ

へんかなあ……………切実……………

第十三問 赤壁の戦いはエベレストを登ること？ はあ？ 狂戦士がいつぱい

紅鎖さん、断空我さん、レフェルさん、ヒョウガさん感想ありが  
とっございます！

Dクラス戦一応開戦しました！ が、召喚獣でのバトルがなく、  
バカばかりでした（苦笑）

次回、召喚獣登場！ やっとう！？  
楽しみにしてください（笑）

第十四問 殴られるのは、明久じゃなくオレ！？ なんかオレ、大分空気じゃ

バカテスト

日本史

【第十二問】

・問 以下の問に答えなさい。

徳川綱吉が制定した、殺生を禁止する法令とは何か、答えなさい。

土屋康太の答え

・生類憐みの令

「……………何も思い浮かばなかった。……………姫路や島田に負けたら、立ち直れない……………」

教師のコメント

失礼ですが、あなたよりまともな島田さん、そして、まともで優秀でもある姫路さんに限って、それはないと思いますよ？

姫路瑞樹の答え

・人生憐みの令

教師のコメント

酷っ！？ 姫路さああん！？！？ 『生類憐みの令』！ 『生類憐みの令』ですからね！？ 姫路さん！ しっかりしてください！ 吞まれてはいけません！ Fクラスという闇に！！！！

せめて何かコメントをください！ どうしていいか解らなくなります。(怖いです…少し…)

吉井明久の答え

・吉井玲(姉さん)の奴隷(僕)  
もしくは、吉井玲(姉さん)の奴隷(僕) 憐みの令

「生かさず殺さず……仕舞いには、姉さんと子育て！？！？ 社会的には死…ですよね……」

教師のコメント

何かあったんですか！？  
何かあったんですか！？

坂本雄二の答え

・生涯霧島翔子の奴隷

「生かさず生かさずの人生を歩まないかと、俺は不安で仕方がない」

教師のコメント

『死』オンリーですか!?

木下秀吉の答え

・姉弟憐みの令

「殺さずは、いつまでじゃろうか?……」

教師のコメント

木下優子さんは、優しい子ですから大丈夫ですよ。(……きっと)

山崎巧の答え

・オレも何れは奴隷

「最近……玲さんが、“義弟っていいですね　そうです。子供は何人くらい欲しいですか？”ってメールがちよくちよく送られてきます。……フフツ。……明久と玲さんの関係が進展できるお手伝いをしよう」と画策中です」

教師のコメント

進展させちゃダメですから！

島田美波の答え

・ハラホロヒレハレ

教師のコメント

ぶよか！

木下優子の答え

・人類補完計画



## 教師のコメント

何が言いたいのか、生徒指導室まで言いに来なさい。

西村先生と愉快的アマレス仲間達が待ち構えて いえ、構えて  
待っています。

## 後のFクラス男子達

「不幸だあ〜っ!!!」

第十四問 殴られるのは、明久じゃなくオレ!? なんかオレ、大分空気じゃ

「よし。島田さん、ここは君に任せて僕は先を急ぐよ!」

「ちよっ……! 普通逆じゃない!? “ここは僕に任せて先を急げ!” じゃないの!?!」

「えっ? 友達でしょ? あっちの清水さん…だっけ。が、話たそっにしてるし……」

「糞豚野郎にしては、やりますわね。一応、感謝して上げます」

暴言の上、上から目線。って、どんだけえ〜。

「吉井! このバカっ! こういう時ばかり、余計な気を回してんじゃないわよ!」

まあ、そうなるわな…

「巧、僕の周りには敵ばかりだよ!?!」

「島田。こいつのバカは今に始まったことちゃうで? むっつつつかしから、こうやから。今さら治らんとと思う。バカは死ななきゃ治らんって言うし……」

「お前も敵があっ!?!」

「お姉さま! 逃がしません!」

叫ぶ明久を捌いてる間に、召喚範囲まで清水がやって来た。

「くっ、美春! やるしかないってことね……!」

島田が二の句を告げる前に、清水が召喚獣を喚び出して、島田も

即座に反応する。

敵前逃亡してみなされたら、即刻失格且つムキムキ骨格によって強制的に導かれ、補習室という名の監獄行きやからな。ってか、噛みそうやったわ。

サモンッ！

「 試獣召喚っ！」

喚び声に応えて島田の足元に幾何学的な魔方陣が出てきた。教師の立会いのもとにシステムが起動した証拠。そして、姿を見せた召喚獣は、軍服姿でサーベルを持った“島田美波デフォルメバージョン”って感じの見た目、ぴこぴこ動くポニーさんに、おっきな黄色いリボンまで再現されとる。細かいな……。老婆の神経質さが、見てとれる。そんな感じとりたくなかったっつーに。

清水は、西洋騎士って感じ。……………ていうか、さ。島田の衣装に悪質さを感じます。ベルサイユってか、ウテナ？ 一部の人間しか解らんようなことすんなって。

女子の間だけは、超有名な話だったりしてな。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました……………」

「公言してはりますやん」

「巧？ 何言ってるの…？」

「ちよつと！ いい加減ウチのことは諦めてって」

「ところで島田さん」

「えっ？ 何？」

「お姉さまって」

まあ…、予想ついても気になるわな。

「ウ、ウチは、……………」

「「ウチは、……………」」

「何も知らないわ!」

絞りだした答えがそれかよっ!

「浮気現場を抑えられた時の苦し紛れの言い訳みたいやな……………」

「何言ってるの! よっ!」

「がはっ!」

飛び蹴りいただきましたあ!?! つーか何? 最後の“ よっ

!!” ってセリフと同時に飛び蹴りが入った鳩尾へさらに、ぐりつて爪先を捻り込んで蹴飛ばしただけじゃなく、三角飛びの要領で上手いこと着地しやがった! 格闘技の天才ですか!?! 格闘美神なんですかあっ!?! 一騎当千ってヤツですか!?!?!

…とここで。一騎にせよ恋姫にせよ、呂布って大きい強い つまり、デカいってイメージが胸にも影響されたのか、胸が大きゆうございます。『デカイ(つよい)ね』に、繋がったわけか…………

「み、巧っ!」

「うおっ! どした? いきなり」

「逝ったついでとばかりに、妄想してたでしょ?」

「えっ? ……逝ったの? オレ」

「うん。見てて恐かったよ……………」

「をおしっ! 張り切って行こー!」

「僕あんな風に見えるのかな? 人の振り見て我が振り直せっていうし…気をつけよ」



島田の召喚獣がサーベルを構えて戦闘態勢に入り、いち早く駆け出した。

「ならば、直接その身体に聞いて差し上げますわ……行きます、お姉さま！」

島田の召喚獣を迎え入れるかのように清水も清水の召喚獣も、両腕を広げて笑みを浮かばせてから、清水の召喚獣も駆け出した。清水、変に器用やし。

「はあああっ！」

「やあああっ！」

2人の気合いが廊下に響いた。初のバトルやけど……チビっこいけど、結構迫力あんな。

「こ のっ！」

「負けません！」

5合6合と切り結び、烈しい鏝迫り合いを繰り返した。かっけ〜！

おっと、島田がヤバイ。

「島田！ あっちの方が点数高いから、真っ正面からぶつかったら不利やぞ！」

「そんなこと言われなくても解ってるけど、細かい動作はできないのよっ！」

マズいな……

「明久、お前さ……男に熱の籠もった告白をされたらどうする?」

「嫌だよ! って、突然どうしたの?」

「あのさ……解らんでもないけど、その言い方はちょっと失礼やし、相手を傷つけるやろっから領けん」

「あ、ごめん……」

ホンマ、例え話でも本気で謝るからなあ……ホンマにこいつは……

……

「考えてから、話すようにし?」

「うん、解った。ありがとう」

こっぴつ素直さも、明久のええとこや。

「ええよ。でもさ……その気がない人にとっては、そっぴつ感情を  
持ってまっつやる?」

「そっぴつだね」

「それやのに、自分の都合ええように解釈して、無理やり言い寄っ  
て来たら」

オレは、明久から清水、そして島田の方を見た。

「 どうする?」

「 こっぴつ 夢中になり過ぎて、言われなきや気がつかないのかも  
ね」

理解が早くて助かる。オレの言いたいことを、汲み取ってくれた  
みたいやな。恋愛事に関してこそっぴつやったら、島田も苦労せんやろ

うに……

ま、とにかく

「何事にも限度がある」

「だね。巧に言われたくないだろうけど」

「一言余計じゃ、あほ」

と、

「くうっ！……」

直後、均衡が崩れた。

話てる間に、島田の召喚獣が力負けして得物を取り落とした。

「お姉さま、ここまでですっ！」

清水はそのままの勢いで、島田の召喚獣が押し倒した。その頭上には参考として2人の戦闘力（点数）が出てきた。

『Fクラス 島田美波』

化学 53点

VS

化学 94点

Dクラス 清水美春』

「53点…」

「うるさいっ！ き、今日は偶々…」

「さ、お姉さま、勝負はつきましたね？」

剣を喉元に突きつけられる島田の召喚獣。

腕や足を刺された程度なら点数が減るくらいで済むけど、首や心臓をやられたら即死　つまり補習室行き。島田は、下手に動けん。

「い、嫌あつ！　補習室は嫌あつ！」

「恐れ過ぎやる」

「いや、アレが正しい人間の姿だよ」

「アカンかった（ダメだった）から、補習やる？」

「巧！　正論だよ！　それは」

「そやな」

「そやな！？　なんてこと言うんだ……そんなの、巧じゃない！」

「何で？」

「ボケるかツッコむってというのが、巧の存在意義なのに！」

「ちよお、待てえっ！！」

「何？」

「じゃあいつたい、オレは　何をやっても全く売れない商品」

　価値が無いってかア！？」

島田を無視して、ちよっとした漫才を繰り広げた。

「アンタ達っ！　バカなことやってないで、助けなさいよ！！」

「ごめんごめん。忘れとったわけちゃうで？　ツッコむのに、夢中になってもうてん」

「それを忘れてるっていうのよ！！」

「バカな……」

「今さらだけど、改めて教えてあげる。…バカだからね？ アンタ達。って！ それより、このままじゃ私は、補習室行きなの！ 助けなさいっ！」

「補習室？ ……………フフツ」

清水は楽しそうに笑いながら島田の手を引っ張ってく。そっち保健室やぞ？ 何する気や？

「おい、そっちは保健し……」

「ふふつ。お姉さま、この時間ならベツトは空いていますからね」

「ナニする気や……」

「シヤラップ……」

ビツクリしたっつ。

「さっきから、ワンワン、ブヒブヒと……少し静かにしていただけませんか？」

「本人を前に、そこまでストレートに言われりゃ、むしろ清々しいわ」

「影でこそそやられるよりか、断然マシだよね？」

「「根本とか」」

見事に八モった。

「塵、芥ちりに何を言われようと嬉しくも何ともありません。そのようなくだらないことよりも、わたくしのお姉さまと勝手にイチヤイチャしないでいただけます？ 塵芥あぐたの分際で。お姉さまは、わたくしのもの何ですよ？」

「よ、」「わたくしのもの”だって？ ……島田さんを物みた  
いに言うな！ 君みたいな人には、島田さんは渡さないっ！ 絶対  
にだ！！」 よっ…吉井……」

すんげえー嬉しそうやな。それ見て清水もイライラしとるし……

「殺します……」

「「はあ？」」

「美春とお姉さまの邪魔をする人は、誰であろうとも 全員殺し  
ます！！！！……」

いつもの明久なら、怯えそうなほどの殺気？ とでも言うんか？  
それを受けても平然と返した。

「女の子には優しくしなさいって言われているんだけど……今は特  
別だ。 試験<sup>サモン</sup>召喚っ！！！」

『Fクラス 吉井明久』

化学 19点

VS

化学 41点

Dクラス 清水美春』

「あははっ！ 戦う前から決着ついてますわ！ 何もしていないのにその点数っ！ ……逝きなさい！！」

清水の召喚獣が振り下ろした剣を刹那の間受け、明久の召喚獣を横へスライドさせながら木刀を下へとずらした。清水の剣はその勢いのまま地面を叩く。

「なっ！？」

清水が驚いて声を出す。

明久は、フィードバックでかかる僅かな重さと振動によってその刹那を見切ったんやろおな。

そうやって考えてる間にも明久の召喚獣は、流れるように攻めていく。

前のめりに体勢を崩している清水の召喚獣の顔面に一太刀。回転するように足払いをし、円運動を利用して勢いをつけた木刀を喉元に叩きつけ、止めとばかりに首筋に突きを繰り返す。

「島田さん、大丈夫？」

「ありがとうございます！ 吉井、本当にありがとうございます！」

「島田さんっ！？」

「何抱き合っとなねん。ちゅーするんか？」

「「っ！？！？」」

「ほ、補習の鉄じ 西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします！」

補習の鉄人って、料理の鉄人みたく聞こえる。

「おお、清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ。さあ、こつちに来い」

島田と違って召喚獣にとどめを刺された清水は、補習室に連行されることになる……これが通称『戦死』という状態。

「お、お姉さま！ 美春は絶対に諦めませんから！ このまま平穩無事に卒業できるなんて思わないで下さいね！？」

それとそこのゴミ野郎！ この借りは、必ずや返します！！ かあならあずーーーっ！！！！！！」

嫉妬や憎悪、怨嗟の籠もったとても危険な捨て台詞を残して、清水は補習室へと連行されてった……………。

清水、お前は何がしたいんや。

なんつーか、…………バカばかりだ。

第十四問 殴られるのは、明久じゃなくオレ!? なんかオレ、大分空気じゃ

断空我さん、ヒョウガさん、レフェルさん、感想ありがとうございます。

あー……長いって言われるやもしれん……。

自分でも、美春との戦いだけでこれだけかかるとは思ってたんです。

いいところで切れずに あ、まあ、次は、大丈夫?…かと（苦笑）

次回は、Dクラス戦終わるかな?……+ で、書きたいことありますけど…

ではでは、失礼致します。

第十五問 嫌な予感ってさ、結構当たるよな。心の底から絶叫したことある？

バカテスト？

大喜利

【第十三問】

・問 以下の問に答えなさい。

なんじゃそりゃ！？ NHKのテレビ欄の朝10時の番組『小学6年生 国語』の欄に書かれていた内容とは？

霧島翔子の答え

・上手な夫の育て方

「早めにやっておけば、きっと好きになってくれる」

教師のコメント

一途ですね。

坂本雄二の答え

・逃走経路の謀り方

「勝利とは、逃げることと見つけたり」

教師のコメント

逃げるが勝ち。

Dクラス代表 平賀源二の答え

・便座

「色、艶、形を評価」

教師のコメント

便座のない和式トイレも交ざってました。

須川亮の答え

・ロリコンじゃないもん！

「色、艶、形を評価」

教師のコメント

はっはっはっ。どことは聞きません。

木下優子の答え

・お姉ちゃん大好き

「義弟とは恋仲でもいいのよ!」

教師のコメント

合法シヨタ? え? 何ですかそれ。

木下秀吉の答え

・土下座の有効性

「人前でやれば、すぐに許してもらえ。涙を流すと吉」

教師のコメント

涙の特訓をしなければ…。

島田美波の答え

・明日から使える罵声

「女の子だからって、舐められないようにね？」

教師のコメント

これを使えば、あなたも強者！

吉井明久の答え

・困った時のアレ

「アレだよ、アレ！」

教師のコメント

ああ！アレですか！

## 姫路瑞樹の答え

- ・気になるあの人をネット配信

「写真や動画をチューブやニコで流せば、世界中に自慢できます」

## 教師のコメント

やりましたね プライバシーの侵害です

## 工藤愛子の答え

- ・パンツの見せ方、魅せ方。

「スパッツじゃなくても、見せパンってあるじゃないですか。それをどうやったら可愛く、見せる物だから好きな男の子に、可愛く見せられるように、っていうのもきちんと意識して あ、ボクならねえ」

## 教師のコメント

見放題、見せ放題。

## 土屋康太の答え

・今のうちに、スクール水着を堪能せよ

「……今がチャンス！」

教師のコメント

若さ故の過ちよ。

山崎巧の答え

・まだ使える！ お姉さんに甘えてお風呂に入る！！

「小学6年生は、まだ小学生！ それを利用して、お姉さんの裸を堪能しやがれ！」

教師のコメント

過去の栄光。……あの時は、英雄でした。

………皆さん、大喜利ですよ？ 本気じゃない……ですよ。何だか不安になってきました。



第十五問 嫌な予感ってさ、結構当たるよな。心の底から絶叫したことある？

「島田さん、お疲れ様」

「うん。ホントありがとう」

「ううん。気にしないで。とりあえず一度戻って、化学のテストを受けてくるといいよ」

「わかった。いつてくるね」

「いつてらっしゃい」

……こいつら……

「新婚か」

ズコーっ と離れたところで、島田が転けた。

「須川。島田に付き添ったって。敵がおらんとも限らんから」

「解った。ここは、任せた」

「よ、よし。とにかく秀吉達が補給をしている間、前線を維持するんだ！ 一步も進ませないように！！」

「明久の操作技術見たやる！ 明久をやらせるな！ 身を挺してでも、守り抜けッ！！ 貴様らの犠牲が勝利を生み出す！！！」

『『『『『おおおーっ！！！！！！』』』』』

おー、すげ。盛り上がった。ちやった。

『吉井隊長！ 横溝がやられた！ これで布施先生側は残り二人だ！』

『五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかいない！ 援軍を頼む！』

『藤堂の召喚獣がやられそうだ！ 助けてやってくれ！』

めっちゃ、劣勢ってやつ？

「布施先生側の人達は召喚獣を防御に専念させて！ 五十嵐先生側の人は総合科目の人と交代しながら効率良く勝負をするように！ 藤堂君は可哀想だけど諦めるんだ！」

『了解！』

皆、明久の指示で動き回ってる。一応、隊長として扱ってんのか……。まあ、秀吉や雄二とは違った、人を惹き付ける何かを持っているんやろ。

「Fクラスめ、明らかに時間稼ぎが目的だ！」

「なにを待っているんだ!？」

援軍。

多少頭回る程度じゃア、どうにもならんぞ？ もう動いてるんやし。

さて。そろそろやな。

「大変だ！ 斥候からFクラスに世界史の田中が呼び出されたって報告が！」

「せ、世界史の田中だと!？」

「Fクラスのやつら、まさか長期戦に持ち込む気か！」

Dクラスの偵察部隊に、テストの採点でやってきた田中先生が見つかったか。

世界史の田中先生はおっとりとした初老の男で、その採点の甘さには定評がある。その代わり採点にちよつと時間がかかるけど、長期戦の場合は田中先生が都合が良い。

「吉井、山崎。Dクラスは数学の木内を連れ出したみたいだ」

島田を連れて行ってくれた須川が報告。本陣に戻ったついでに情報を手に入れてきたみたいや。そうか、木内先生か。

数学の木内先生は厳しいけど、採点の速さは群を抜いてる。どうやらDクラスは一気に決着をつける気やな。

やけど、明久の役割はとにかく前線を長く保ち、ひたすら時間を稼いで、試召戦争をやってないクラスが放課後を迎えるくらいまで、試召戦争を引き延ばす。

「須川君！」

「なんだ？」

明久、何かを思いついたんか？

「偽情報を流して欲しいんだ。時間を稼ぐために」

「偽情報？ それは構わないけど。スグにバレるんじゃないか？」

Dクラスで前線の指揮をとってる塚本は声大きいからうまくいってもあつと言つ間に混乱を収められてしまうぞ」

「でも大丈夫。対象はDクラスじゃないから」

「と、言つと？」

「先生達に流すんだよ。他の場所に向かつてくれるように」

「…なるほど」

「確かに。それやったら効果ありそうやな」

「でしょう？」

「ああ。流す偽情報の内容は任せてくれ。確実に騙してみせよう」

「うん。よろしく」

あれ？

「なんか、胸がざわざわってしたんやけど…いや、背筋がぞくぞく  
つと？」

「何言ってるのさ、巧」

「上手いこと言えんねんけど、…嫌な予感っていうか……」

須川のあの、憎たらしいくらいに活き活きとした顔。

「巧、今は戦争に集中しよ？」

「ああ、そやな。続けてくれ」

「解ってる。みんな、僕らは1対1じゃ勝てないからね！  
コ  
ンビネーションを重視して！」

オレどうしよ？……。豚も煽りや木に登る。バカとハサミは使  
いよう。オレ戦わんでもええんちゃう？……。いや、召喚獣ちゃんと  
使ってバトリたいな。やったことないし……。オレ一人盛り上がるっ  
てのも……。んー、ゲーム形式にするか？

「よしー！」

「うわあ……。今の“よし！”は、聞きたくなかった」

「え？ 何で？」

「スゴく悪い顔してたから……」

「は？ 悪い顔？」

「悪代官っていうか、宰相？ 大臣？ 何か腹黒そうだな…」

「そんな、欲望剥き出しやった？」

「うん。勇者に、世界の半分をおまえにやろうって言った魔王以上」

「姫と致して、ハイテンションな状態で、“世界の半分をおまえにやろう”って言われたところで、“姫とまた致すことの方が重要だ”と、魔王をバツサリと切り捨てて、世界を平和に導くっていう勇者とおんなじか！」

「長いよ！ っていうか、勇者欲塗れか！！」

「おまえも可愛いお姫様選ぶや 」「もちろん！」 被ってる。  
とにかく、」

『塚本、このままじゃ埒があかない！』

『もう少し待っている！ 今数学の船越先生も呼んでいる！』

「マズいな…」

「立会人を増やしての、戦線拡大だろうね……………」

「これ以上戦線を拡大されると、負けんぞ？」

ピンポンパンポーン

「ん？」「ん？」

《連絡致します》

「「須川（君）？」」

《船越先生、船越先生》

「先生を呼び出して、戦線拡大を防ぐんか！」



Dクラスがなんか言つとるけど、それどころやない！  
あいつ……

『皆、吉井隊長と山崎副隊長の死を無駄にするな！』

『絶対に勝つぞーっ！』

『隊長、行けますよ！ この勢いで押し返しましょうー！』

「……………」

『……隊長？』

「……………」

『……副隊長？』

「……………」

『す？』

「「「須う川ああああッッ！！！！」」」

Fクラスどころか、放送室まで届いていたらしく（窓とかないから、教室に比べて音が通らないはずだが……）、直後、須川が土下座しに来て、事の真相を暴露した。

「「雄うニイイイイイいいいッっっ！！！！」」」

この声を聞いた眼鏡女教師と、長い黒髪の女生徒が、盛大な溜め息をついていたらしい。

え？ 雄二？ ははっ 冥府の門を開くんじゃないかな？



**第十五問 嫌な予感ってさ、結構当たるよな。心の底から絶叫したことある？**

ヒヨウガさん、ようたさん、レフェルさん、断空我さん。

感想ありがとうございます。

Dクラス戦終結しませんでした。むー………次回は、巧の召喚獣が出る予定です。

では、次回。

第十六問 先こーまでがビビってるし。召喚獣も目付き悪いし。……?……アレッ

バカテスト

化学

【第十四問】

・問 以下の問に答えなさい。

現在、広く使われているプラスチック製消しゴムの主な原料は何か。2つ、答えなさい。

木下秀吉の答え

- ・炭酸
- ・カルシウム

「飲料水にもありそうじゃ」

教師のコメント

わけちゃった!? 正解は、炭酸カルシウムです。

島田美波の答え

- ・塩化ビニル樹脂
- ・塩化ビニール樹脂

「どっちかだったはず……」

教師のコメント

言い方！ 英語のアクセント違いのようなものですから！  
一応合ってます。どちらも正解です。

坂本雄二の答え

- ・製造会社の資本金
- ・労働者の汗

「それらが揃って、完成する」

教師のコメント

ある意味正解。でも、残念。

吉井明久の答え

・ゴム  
・ゴムの

「……（先生にパス）」

教師のコメント

ピストル！

…テストの解答を、先生にパスしないでください。  
後で、職員室へ来なさい。

土屋康太の答え

・ゴム  
・ゴムの

「……ピストン！」

教師のコメント

生活指導室で待っています。

姫路瑞樹の答え

- ・フタル酸系 可塑剤
- ・髪

「一緒に練り込んでいました」

教師のコメント

フタル酸系というところまで知ってましたか。さすがです。

髪を練り込んだじゃったら、不良品です。不覚にも笑ってしまいました。

山崎巧の答え

- ・過去から受け継がれる意思
- ・今も続く歴史

「それを使って消し去るといふのか!」

教師のコメント

何がですか!?

Fクラス他男子の答え

- ・消し
- ・ゴム

「レーザー！」「」

教師のコメント

名前を分けただけです。

英語にしても一緒です。

(必殺技っぽいとは思いましたが…)

第十六問 先こーまでがビビってるし。召喚獣も目付き悪いし。……？……アレッ

「工藤信也、戦死！」

『西村雄一郎、総合残り40点です！』

『森川が戻ってこない！ やられたか！？』

盛り上がった土気のまま戦ってたけど、戦力差の影響が現れ始め、次々と悪報がもたらされる。工藤と森川が戦死（補習室送り）。これで、18人くらいいたオレらの部隊は、残り僅か5人ほどになった。そろそろ限界か……

「巧、明久、あと少し持ちこたえろ！」

撤退か？ と考えていたら、雄二の声が聞こえてきた。どこかで見回して見ると、結構離れたところに雄二が見えた。声でけえよ。

「声でけえよ！」

「今言うことか！？」

「え？」

離れた雄二からツッコまれた。やっぱ、おかしかったか？ でも、言わずにはおれなかった。

「援軍だ！ 合流される前に吉井達を全滅させろ！ 面倒なことになるぞ！」

「マズいッ！ まだ雄二達は離れとんぞ！？」

「あの……さ……。そう思うんなら、お願いがあるんだけど」

「なんや明久。オレができることか？」

「もちろん」

「どうしたらいい？」

「巧も召喚獣使って」

「いやいやいやいや。よし、バトルやな！　って思っ、構えた瞬間に逃げられるんやっ、」

「巧がそうやって意気込んだ瞬間にすごい睨んじやってるから、3秒以上目を合わせらんないんだよ」

「なんでやねん！」

「オーバーキル輪廻転生即死のことを知らない人も、本能的に感じ取るだろうし、何より、直に見た人は“殺られる”って思うだろうし、それに加え、て女子は、“犯られる”とも思うだろうね……」

「それを聞いたオレは、どんな顔すりゃあいいんだよ……！」

「笑えば……いいと思うよ？」

「笑えるかつ！　ったく。したり顔しやがって」

「でもさ、巧が一本道で仁王立ちしてたら、通れないってことだよな？」

「……素直に喜んでええんやるか……」

「ていうか、さ。巧から挑めばいいじゃないか」

「あ」

「え？」

「……」

「……」

「……」

「……忘れてたな？」

「ふっ……」

バカな。

「オレが、そんな初歩的なミスを犯すだけでも？」

「はははっ！ おかしなことを言っつね？」

「へ？」

「世の理だよ？」

「ちきしょうっ！ バカにしやがって！ いつか、目にものを見せ  
てくれる！！」

「巧ってさ、つくづく悪党だよね」

「喧しい！」

「西村雄一郎、戦死！」

また一人減った！

「五十嵐先生、Dクラス鈴木が召喚を行います！」

「負けるか！ Fクラス田中も行きます！」

「ちいつ！ 田中也捕まった！」

『Dクラス 鈴木一朗』

化学 92点

VS

化学 67点

Fクラス 田中明』

田中也刀の餌食に……！ 南無……。

「巧、生きてるからね！」

「どンドン行くぞおっ！」

Dクラスは、やられることを恐れず突っ込んで来る。一部を除いて。

「……………」

オレの後ろに出されたカンペにビビる人々。逃げ惑う寸前じゃね？  
ちらつと見えたカンペに書かれていた言葉。

### 【後で校舎裏】

迫力を増すようにか、筆で。そして、誰が書いたのか、ものすごい達筆で書かれていた。迫力と力ある書道文字の前に立つのは、仁王立ちする　オレ（目付きで人を殺せるらしい）。

「……ひいいいッ！?!?」「」「」

「あはっはっはっ！」

悲鳴を上げて、後退るDクラス生徒と、腰を抜かした教師。瞳を潤ませ、泣き笑いするオレ。

「カオス混沌だ……」

「狩るぞ、明久！」

「僕!?!」

「ちやうわ、理解せえよ。次腰折ったら、マジ狩るぞ?」

「!　よよよよよ、よしっ!　みんなやるぞ!　背水の陣だ!」

『『『??.?』』』

「さつき巧をおちよくった(からかった)奴が邪魔をすれば、巧に狩られるぞ?」

『『俺達は、まだ死ねないッ! ……だろ? 隊長!』』』

「死亡フラグに僕を混ぜるな!!」

『Dクラス 鈴木一朗』

化学 25点

VS

化学 66点

Fクラス 柴崎功』

「鈴木一朗、戦死!」

「先生、Dクラス笹島圭吾行きます! 試験召喚!」

『Dクラス 笹島圭吾』

化学 99点

VS

化学 41点

Fクラス 柴崎功』

柴崎をあつさり倒した笹島が、明久へと向かう。  
オレもおるっつーに。

「明久」

「解ってる！」

召喚範囲内に入った。

「吉井明久！ その首級くびもらった！」

オレ無視か……。明久の点数さつき出てたからって、勝てると思  
ってんか？ オレもおんのに？ ククツ……

「負けてたまるかつ！ いくぞおお！！」「楽しい〜ねえ〜？」

サモン！！！！

「「試獣召喚！！！！」」

まず、明久の召喚獣が現れた。

ミニ明久に学ランを着せて木刀を持たせたヤンキー。

「チンピラやなー」

「巧のがよっぽどだよ！」

現れたオレの召喚獣は、何割増しかで、さらに目付きが凶悪なも  
のとなつて、黒のパーカーに腰パン（ジーパンを腰より下で履いて、

パンツが見えている状態)。中に着ているシャツとバタフライナイフが血の色のような真紅。

「町中でたむろしてそんな不良じゃないか！ よっぼど、チンピラだよ！」

「おまえなんか、学校のヤンキーやんけ！ そっちのが、チンピラやる！」

『『『どつちもだよ！』『』』』

敵味方関係なく、オレと明久にツツコミ。

「この部隊長、副隊長はバカだ！ 俺一人で充分だから、みんなは残りを！」

「明久、おまえは残り少ないから、援護しろ」

「くたばれっ！」

「一気に片付ける！」

「了、解っ！」

明久の召喚獣が攻撃を避けながら足払いをかけて、倒れていく相手の召喚獣の背中をオレの召喚獣がナイフで刺し貫く。

「『『『！！！！』』』」

Dクラスも、同じFクラスでさえも、息を飲んで目を見開く。

「一人でなんやって？」

「充分じゃなかったみたいだね」

「くっ……」

「さて。ここから先は、」

オレと明久が構えた。

「「オレ（僕）達が相手になってやる……！」」

「残ったみんなは、僕達の援護を！」

『『『おおーっ……！……！……！』』』

数は少ないつてのに、指揮が上がる。

味方には、“勝てるかもしれない” 敵には、“負けるかもしれない” と思わせるようなパフォーマンスをすればいいわけや。

ま。負ける気なんて、更々無いけどな。

「さあ……、来いよ……！」

「ぼそっ やっぱり悪党だよね……！」

第十六問 先こーまでがビビってるし。召喚獣も目付き悪いし。……?……アレ……

ヒョウガさん、ようたさん、断空我さん、レフェルさん。

感想ありがとうございます。

連投しました。が。

Dクラス終わってません。

次回平賀退治。

orz.

長々引いてしまったあ!?

「えーい」

ドゴーン!

「……え?」「……」

「あかん、そっちの康太と明久と巧はすぐに逃げるんや!!」

「深紅!?!」

「ふえ? 違うよ?」

「…アレ?」

「相沢綾菜じゃの」

「だな」

「あつくん！」

「ごぱあっ!？」 メキヤツ

「なんか、有り得へん音がしたんやけど……」

「万力なんてもんじゃないっ…ロードローラーだ……」

「勢いつけ過ぎだろ」

「御愁傷様じゃ」

「あつくん大丈夫？ 酷い目にあつたね？ 感想欄に行つて慰めな  
きやつて……」

「……もう聞こえていない」

「つーか、酷い目は、現在進行系な気も……姫路とか…いや、雨宮  
や桃宮でも怒るんちゃうか？ 綾菜ちゃんは悪ないけど、姫路達が  
おらんからつて、あの幸せそうな

く(、、) / こんな顔…

てか、ちよお待つて！ 感想欄ちゃう！ ここ“あとがき”やで  
!？」

巧がツツコミし疲れて、息を切らせていたら……

「たつくん？ ……大丈夫、怖くないよ？」

「へ？」

(「なんか、言われましたけど?…」)

「猫さんが人に懐くように、同じ猫科のチーターさんや虎さんも、  
人に懐くんだよ？」

「康太。解るように説明してくれる？」

「……たぶん綾菜が言いたいののは、虎のような獰猛な動物でも可愛  
いところはある。見た目じゃなく中身なんだ。と言いたいんだと思  
う」

「つまりは、あれか？ 自分に言い聞かせて、恐怖心を和らげよう

っていうこと？」

「……違う。あいつは、怖い時は怖いつて泣く。その上、たいていの動物は、……凶暴だと言われているホオジロザメでも一瞬で綾菜になつく」

「すげーな……えつと……じゃあ……」

「………これも予想でしかないが、“私は違うんだよ。怖がらないよ”ってことだと……」

「オレは猛獣と一緒にか!？」

「すきあり」

「しまつ　ぐふえつ!？」

「巧も捕まったのじゃ!？」

「………考えさせて、油断を誘う為？」

「康太。相沢に捕食されているようにしか見えないんだが……」

「………純粹ないい子だ」

「天使の笑顔で、明久を土気色に染め上げる純粹さは、恐ろしくて仕方がないんだが……」

「あ、あ綾菜ちゃん。君の可愛い笑顔と、………巧!　今の綾菜には、逆効果だ!　余計な………」　………心遣い、スゴくう嬉しいよ」

「ほんとあ!？」

「むーっ!？」

「聞こえてなかったようだな」

「………遅かったか」

「うん。うん。来てよかったあ」

お胸様という“テイルナノグ”から何とか抜け出した一瞬をついで、アイコンタクト。

「ゆ、うじ……」

「何だ?　遺言か?」

「可愛い女の子に抱かれて死ぬってのは、本望や」

「……本望なのか……」

「けど、な……明久の隣に並んで死ぬと……か、納得でき……ん……」

「その状況でよく言えるな」

巧の目が虚ろとなり、ほそほそと声が漏れ聞こえた。

「……眩し、い……」

「……?????」

「ああ……光……」

「こえーから！」

「相沢！ 離してやってくれんか？」

「えー。もうちょっと」

「もう癒された大丈夫だ」

「……目的がすり代わってる。明久は、いつもこれだけ抱きしめられない。巧とも、ほとんど会えない」

「じゃから、今は抱きしめ続けておると」

「ジタバタジタバタジタバ……」

「……」

「ちっ！ 反応がなくなった。こっなら……秀吉！」

「解ったのじゃ！ ううん！ 康太の声……綾菜、俺にもしてくれないか？」

「…… プンブンブン！ 」

「こーちゃん」

「……！ 雄二、秀吉。離せ！」

「秀吉、飛び退くぞ！」

「心得た！」

「「せー… 「こーちゃん」 ……ぬおふあっ!?」「」「こふ  
っ!……」

アイコンタクトで会話

「……綾菜を甘、く…見た、な…?」

「くっ…あの速さについていけなかった…悪、鬼羅刹、も…地  
に墮ち…たな…」

「巧…明、久…すまん。助…けて、やれなんだ…」  
終了

パシパシッ

3人揃ってタップ。強く叩くこともできず、手加減してしまい。  
綾菜には伝わらない。

呼吸できないながらに気を遣った秀吉、雄二、康太の3人。仕舞  
いには、手足をだらんとさせる。

「あれえ？ みんな寝ちゃったー？」

綾菜はそれを不思議そうに、首を傾げて見る。

「「「「「……」」」」」

返事がない……

「ふあ〜っ…… こくり こーちゃんとねるう…… zzz…」

大きく伸びと欠伸をして、綾菜は康太を抱き枕に眠りへ就く。ただの屍、になりかけた明久達を救ったのは、ありす達。綾菜と同じところから来て介抱してから帰った。

(そこで一悶着あつたかは、定かでない……)

目を覚ました、みんなの共通見解。

『お迎えが来たのかと思った』

レフェルさん。ちよっと、ぐだぐだになってしまいました(苦笑)  
綾菜を呼ぶ時、綾菜が呼ぶ時(名前)どうするか、話方変じやないか、動物には“さん”付けするのか?……とか。  
何かありましたらおっしゃってください。すぐに、直させていただきます。

少しでも、楽しんでいただけましたら幸いです。

それでは、失礼致します。

第十七問 Dクラスにも変なヤツ。Aクラスにも変なヤツ。あ、教師にも変なヤ

バカテスト

化学

【第十五問】

・問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

霧島翔子の答え

・問題点 …… マグネシウムを鍋に使う点。100%炎に反応する。

・合金の例 …… アルミニウム合金。ステンレス。鋼。

『アルミニウム合金』がベスト。あと、「鉄」、「クロム」、「ニッケル」等の合金である『ステンレス』。もしくは、一般での『鉄鍋』といえば、『鋼鍋』のことを指すので、化学的には「鉄」と言えば、純粋な“Fe”を指し、この化学の問題的には正しくありません。ですが、一般的には不純物として炭素を含んだ「鉄」。す

なわち、「鉄」と「炭素」の合金『鋼』のことを指しますから、もう一つの解答としては、『鋼』が正答だと思います。

「……ツツコミ待ちだった？ ボケ待ち？ だとすれば、不覚……。とりあえず、合金は『ジュラルミン』と言っておけば“ ”？ 大したボケではないですけど」

#### 教師のコメント

返す言葉もありません。

……ボケたつもりはなかったんです……  
アルミニウム合金……土屋君も書いてましたね……。土屋君に謝って来ます。

#### 木下優子の答え

・問題点 …… 爆発させる気で製作されている点。

・合金の例 …… アルミニウム合金

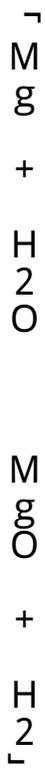
「マーブルコートのフライパンはうちにもあります。焦げつきにくいフライパンですので、アルミニウム合金で製作されている鍋の方が同じく、焦げつきにくい鍋ができます」

#### 教師のコメント

テストを作ってる時は、大丈夫だと……爆発させる気なんて……  
そうですね。

### 久保利光の答え

・問題点 …… 材料にマグネシウムを使用すること。その鍋に火がつくと、専用の消火剤を使わないと火は消せません。それを知らずに水をかけると、



化学反応により、むしろ水素に引火して大爆発します。

火がつかずとも、お湯を沸かせばマグネシウムと熱水が反応し、



マグネシウム鍋でお湯を沸かしていれば、水素が発生して…やはり爆発します。

酸化マグネシウム化した鍋を、使い続けると、どんどんマグネシウムが削られていって、鍋が消滅しますね。

もし、なんとかが上手くいったとしても、酸化マグネシウムは酸によく溶けますので、料理には使えません。

・合金の例 …… ステンレス。鋼。アルミニウム。

「結論としては、マグネシウム鍋はただの爆発物で兵器」

教師のコメント

問題だらけですね……………すみません。

兵器作りの提案をしてしまいました。

工藤愛子の答え

・問題点 …… そもそもマグネシウムを使うことを提案したところが問題

・合金の例 …… アルミニウム合金

「重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。」って。ぷっ！ 久しぶりに、泣くほど大笑しました。問題だらけじゃないですかー」

教師のコメント

ですよね。

そうなんですよ…



第十七問 Dクラスにも変なヤツ。Aクラスにも変なヤツ。あ、教師にも変なヤ

「はっ。勝ちやあいんだよ、勝ちやあ。勝った方が正義や」

「もうツツコまないからね？」

「キヤアツ」

「「はあ？」」

「子猫ちゃ 吉井君も鬼畜だん 山崎君も、人前で突っ込んじやダメだよ。恥ずかしくて見られなあいつ」

「指の隙間から、ガン見してんじゃん！ それよか、鬼畜男子って誰やねん！」

「山崎君って意外と優しいから、吉井君のへたれ攻めに屈する山崎君もありかな。キヤツ」

「キヤツ」じゃねえよ。無視しやがって」

「大丈夫かな？ あの子」

はい？ 本人を前に、絡ませる妄言をしてるんやぞ…どう見たって、ハイで変です。

「じゃあ、……」

「ん？」「？」

Dクラスの女生徒は、何を思ったのか、某娘々、銀河アイドルの如く、左手の平を広げて中指と薬指だけを折り曲げ、顔の横にくっ付けウインクしてポーズをとった。

「…キラツ」

「大丈夫に見えるか？ 明久」

「全く。僕のこと、子猫ちゃんって言ってたしね……」

「……………視線をこっちに カシャッ」

「……………」

いつの間に来ていたのか、康太がカメラのシャッターをきりまくっていた。

こいつは、ほっとして……

「五十嵐先生！ 山崎巧が挑みます！！」

「サモン試験召喚！」

『Dクラス 中野健太』

化学 43点

VS

化学 84点

『Fクラス 山崎巧』

「巧？ 100点あるって……」

「バカ。四捨五入したらなるやろ」

「それだつたら80……」

「ちやうちやう。前を四捨五入」

「それやれば、島田さんも100点だからね？」

「構うか！」

「構つわ！」

「雄二は、黙れ！！」

雄二のツツコミに対して、オレと明久の声が見事に八モった。

「康太。…俺、代表だよな？」

「……………さっきのことがバレている。雄二も、巧と明久のあの叫び声を聞いたはず。……………言っておくが、俺は、関わっていない」  
「なっ！？」

「雄二よ。自業自得じゃろ。ワシも知らんからな」

とりあえず……………

「一丁あがりっ！」

「なっ！？」

飛んでいった2本のナイフが、敵召喚獣の額と首に刺さった。

「くっ！ ここは退くぞ！ 全員遅れるな！」

Dクラスが退いていく。…逃がすか！

「深追いはするな。俺達も明久の部隊を回収したら一旦戻」

「雄二！ おまえの部隊は、点数補充終わったんやろ？」

「ああ」

「明久、日本史は大丈夫やな？」

「うん。まだ消費してないし、80点以上あるよ」

「充分！ 康太、日本史の先生を！」

「……………いいのか？」

「……康太、行つてくれ。話は俺が聞いておく。それと、姫路と島田も動くようにと」  
「……解った」

康太が行つた後、すぐに雄二が振り向く。

「代表の命令を無視したんだ。勝つ見込みはあるんだろうな？」  
「当たり前や。移動しながら話すぞ？」  
「構わない」

小走りで移動しながら話す。

「Dクラスっつか、みんなそうやるうけど、まだまだ操作に慣れてなくて、直線的な攻撃がほとんどで、簡単なフェイントさえも使つてこーへん。それに比べて、オレらなんか組体操もできるわ」

「ぶはっ！」「」

秀吉と雄二が吹き出した。

「組体操だあ！？」  
「っつか、あやとりもできる」  
「あやとり！?!？」  
「“できる”つてどこにツッコもうよ」  
「ていうか、あいつらの手でどうやってあやとりなんか……」  
「いや、普通に指使って。でないと、なんも持てんやろ？」  
「なっ！……おまえら、指先まで自由に動かせるのか？」  
「みんなもやつてるじゃないか」  
「明久。みんなは装備されている武器を振り回してるっただけ。オシらは、物持ち上げたり指使わなできひんこともやらされてきたか」

ら、言ってみればレベルが違うわけ。つまりは、オレと明久の操作技術の差が大きいってことかな」

「僕はLevel 5ってわけだね!？」

「おまえは黙ってる。だが確かに。それは強みだな」

「やる? 因みに…明久は、精々Level 3。他が、まだLevel 1、2ってだけ」

「お主はどうなのじゃ?」

「Level 4ってとこちゃう?」

「明久より一つ上ってだけでも、大したことだ」

「どうも。」

ああ。そうそう。もう一つ「

もう一つ?」

明久が首を傾げた。

「…あいつらも、まさかこのまま追撃してくるなんて………思わんやろ? ニヤアツ」

「悪い顔になっておるぞ」

「どや? 雄二」

「解った。全てをおまえらに託す。負けんじゃねえぞ?」

雄二が拳を突き出した。

それに合わせて、オレと明久、秀吉もが、拳を突き出してぶつける。

「つたり前じゃ!」

「勝つしかないよ」

「ワシもできうる限り、力添えをするぞい」

島田が追い付いてきて、拳をぶつけてきた。

「ちよつと？ ウチも入れなさいよね」

「はあ、はあ…あ、あの…私もいいですか？」

「もち」

「え、えいつ」

姫路の拳も、遅れて突き出された。

「よし！」

雄二が頷いて鼓舞する。盛り上げる感じや。

「聞いている通りだ。このまま一気にDクラスを攻め落とす！  
は、前までの作戦と同じだ。頼んだぞ？」 姫路

「はい！」

姫路が力強く返事をして駆け出す。

駆け出す！？

「ちよつと待つて！」

「はい？」

「姫路は、オレらの後に来い（来て）？」

「あ、はい。解りました」

たまにボケるなあ、姫路は。

「他は、明久と巧に続け！ 作戦変更だ。放課後を待つ必要は無い  
ケリをつけるぞー！」

『『『おおーッ！』『』』

威勢いいのお。…ん？ 追いついた！  
Dクラスに入られると面倒やな…いや、入って油断してるとこ  
を……

「雄二、あいつらが教室入ってから攻めるぞ」

「近衛もバラけるし、油断する。…と」

「そ。そーいうこと」

そこにムツツリーニが駆け寄ってきた。

「……待たせた」

「康太！」

「何も走らなくとも…」「はあ、はあっ」

「…に、高橋先生と遠藤先生？」

胸に手を当てて、呼吸を整えている遠藤先生……

「はあ…はあ んっ…」

「カツ！！」

息を吸おうとしたのか、唾を飲み込もうとしたのか、妙に色っぽい  
声が出てビックリ。康太も目を見開いてるし……っーか、

「…えろっ」

「……… ブシャアアアッ！」

「うおっ！」

「土屋君!？」

「遠藤先生が行っちゃダメですって!!」

「……… ドクドク」

「あーもっつ！ マジおまえ面倒くさいッ」

コンコン ノックした後に ガラツ とAクラスの扉を開ける。

「失礼しま…うわっ。アイアンマンや」

「山崎、まだ引き摺っているのか。…で、何のようだ？」

「そやった。すみません、保険委員います？ ウチのクラスのヤツが倒れたから、保健室連れてったってほしいんやけど」

教室を見渡すと、一人手を上げていた。ショートヘアで笑顔の素敵な、可愛い女の子が。可愛いわ、ホンマ。

「ありがとうね」

「バツ むぐっ」

思わず両手で自分の口を塞ぐ。また喋った。くそおっつ気いっけな…

「ボクが保険委員。工藤愛子って言います」

「あ、ども。ご迷惑お掛けします ペこっ」

「ははっ。面白いね！。よろしくね、目付きの悪い王子様？」

「ごほっ！？」

何も無いのに咽たわ！

「大丈夫？ さすさす」

背中気持ちよ〜っ…いやいやいやいや。

「オレちゃうって。こいつ。おい、康太。世話なるんやから、

挨拶くらいせえ」

うっし！ 話逸らせた。

呼び掛けに反応して、オレの後ろで倒れてた康太がもぞもぞと上半身を起こした。

「……ちゅちやごうは。世話ひなる」

「あははっ！ ちゅちや君ね？ よろしく」

「……ブンブン！ とっていや」

「ぶっ！」「くくっ！」

「「とうていや」「

「……違っ」

「ええから行ってこい」

「じゃ、行こっか？ ええっと……」

……“ちゅちや”に、“とうていや”じゃあ名字解らんもんな。

「んー。あ！ 康太君だ。そうだそうだ。名字解らないし、いいよね？」

ウィンクしてみせた工藤は、いたずらっぽく微笑んだ。

「ボクも愛子でいいからね」

「……ほれは、」

「いってらっしゃい」

「いってきます」

康太は無視して送り出した。ノリええなあ、工藤。



「「「「「」」」」」」

みんなで大合唱。

「！ またビツクリしたよ。気をつけて？」

「こつちのセリフですよん！ 何してはったんですか？ いったい」

「ん？ 空飛んでたら、急に飛べなくなって落ち続けるんだからビツクリだよ」

「どうやら、寝てたようです。」

「夢の出来事を、さも日常の出来事のように話してることにビツクリですから」

「え？ 寝てた？」

「……ばつちり。なんなら、証拠写真を見せる」

康太のヤツ、寝顔激写しやがって！ 後で見せてもらうからな！

康太にアイコンタクトとサムズアップ。

康太も こくり と頷く。………？ あれ？

「おまえ何でここおんねん」

「……シャッターチャンスは逃さない。驚いた先生達の顔もばつちり。」

神がかり的な何かか俺に囁きかける。オラクルを聞くこ……」

「あつ！ こんなところにいた！ さっきのは、スゴい量の出血だよ？ ちゃんとベッドで休まないよ」

「……ふっ……。あんなものには慣れてる」

「慣れちゃダメなんじゃないかな」

「……大丈夫だ。日常茶飯事……俺にとって、もう既に日常と化している」

「日常！？ 毎日ってこと！？ ねえ、何で誰も驚かないの？ ……えっ？ ボクがおかしい…？」

「ちやうで。オレらも慣れたんやと思っつで？」

「慣れ？ 先生達も…？」

「ええ。土屋君は、1年生の頃からこうでしたから」

「あはは…確かに慣れちゃったかもしれませぬね」

「血を見慣れた自分自身にビックリ」

「そうなんですか。慣れって怖いですねー…」。

あ、康太君、そろそろ行こ。保健室いっぱいになっちやうと休めないし」

「…俺はもう平気だ。だから」

「保健室…ベッドの上で撮影会とか…」

「ふっ…。そんなものに揺らぐ俺で」 「半脱ぎで」 望む

ところだ！」

強く望んじやったよ。

「…少し時間をくれ。急ぎ機材を取って来る」

「あ」

言ってすぐ走ってった。

「じゃあ、ボクはこのまま康太君を保健室に連れていくよ。またね」

「おっ」

行っちゃったよ。……撮影会、か……試召戦争がなけりやな……

「せや。試召戦争中や。……雄一。急いで終わらすぞ！ んでもって、

」

「半脱ぎの撮影会!!」

さっすが、雄二と明久。解ってんなあ（しみじみ）。ってしてたら、

『何だつて!?!』

『今の話は本当かッ!』

『神は、俺を見放さなかった!』

どこから聞きつけたのか、残りのFクラス男子大集合。回復試験中のはずのヤツまで混ざっとるし……  
なんか、勝てそう。

「よっしゃ! こんなんちゃつちやと終わらす! 1分、1秒でも早くキングダム(王国)へ行くぞ!」

『『『おーっ!』』』

「てめえらの道は、てめえらで切り開きやがれっ! 目標Dクラス代表“平賀 源二”。目標を、駆逐する! 雑兵共 突貫!!!」

『『『うおおおおおーッ!!!!!!』』』

キラキラ とした、男性陣の目。女性陣は逆に、冷やかな冷たい、絶対零度の視線。

こんな時に限って、女性が多い……。そりゃあ、煽ったのはオレやけどさ……。オレに視線集中させんでも……。いや、半脱ぎやもんな。仕方ない、甘んじて受けよう。



第十七問 Dクラスにも変なヤツ。Aクラスにも変なヤツ。あ、教師にも変なヤ

暮灘雪夜さん、レフェルさん、ヒョウガさん、よつたさん。感想ありがとうございます。

めっちゃ悩んだ。……変更する可能性もありますので、そこら辺は、ご容赦願います。

つーか、日本史の先生作っちゃいました（苦笑）

最近、巫山戯たあとがきじゃなくなってましたので、関係ない変な感じで書いていきます。

「どしたの？ ムツツリーニ」

「吉、な」

「……明久。さっき、先生が謝りに来た」

「あ……」

「え？ 何で？」

「……化学のテストの答え、あつてたらしい」

「めんか、バカ……」

「ふーん……」

「……………」

「っ…はっ…」

「……………巧、何をやっている？」

「秀吉弄り」

「何をやってるのさ！ 秀吉は巧のなんなのさ!？」

「……………秀吉は、みんなで愛でるものだ。独り占めは許さない」  
「なっ!？」 秀吉嫌だったら嫌って言うて？ 僕が守るから」

「キヤアツ 優子ちゃん聞いた？」

「玉野さん、余計な音声入れないで。今いいところなんだから…」  
「動画？」

「そう。家族の思い出は、大切にしなくっちゃ」

「思い出？ 秀吉君が襲われそうになっても？」

「いいのよ。頬染めてるんだから」

「本当は？」

「私が見た 「やっぱり」 って、何言わせるのよ!」

「あ。後で、ムービー見せてね？ 私も、ステキな写真を見せるか」  
「ら」

「今の？」

「今の」

ガシィッ！ 固く握手が交わされる。

秀吉の貞操は、これからも守られそうにない……………



第十八問 いいなあ〜明久（羨望）。…いや、やっぱ…いいわ（拒否）。死女

バカテスト

音楽

【第十六問】

- ・問 以下の問いに答えなさい。  
次の記号の読み方と意味を答えなさい。

- ・ p（読み方：意味）
- ・ pp（読み方：意味）
- ・ ppp（読み方：意味）
- ・ mpp（読み方：意味）

吉井明久の答え

- ・ p（パンチ：弱パンチ）
- ・ pp（パンチパンチ：中パンチ）
- ・ ppp（パンチパンチパンチ：強パンチ）
- ・ mpp（マックスパンチ：最強パンチ）

「格ゲーですか？」

教師のコメント

パンチって!? 違いますからっ!

音楽ッ!!!

木下秀吉の答え

- ・ p (パワー: 体力)
- ・ pp (パワーポイント: 技力)
- ・ ppp (パーフェクトパワーポイント: 攻撃力)
- ・ mp (マジックポイント: 魔力)

「解り辛いRPG。明久が持っておった気が…」

教師のコメント

体力、技力、攻撃力、ときて、魔力なんですか？ せめてマックスにしませんか？

だがしかし、ゲームじゃありませんっ。って、あるんですか？

坂本雄二の答え

- ・ p (ぶっ…きた)
- ・ ppp (ぶっぶっ…ならきた)

・ p p p p ( ) ぶぶぶぶっ : かなりきた  
・ m p p ( ) むぶっ : っらえて ( )

「笑ってっらえて。いや、吐きそうなのか？」

教師のコメント

音出しているだけですよね？

知らんがなっ! ?

(壊れた?)

土屋康太の答え

- ・ p ( ) プレイ。 1 P : 1 人で ( )
- ・ p p ( ) 2 P : 2 人で ( )
- ・ p p p ( ) 3 P : 3 人で。 女性 2 男性 1 の比率が望ましい ( )
- ・ m p p ( ) マゾプレイ : 特殊な ( )

「……………最後まで、書ききれなか…った……………」

教師のコメント

とりあえず、西村先生が体育館でお待ちです。

ほぼ書いてますから!



## 教師のコメント

意味が強ち当たっているのが納得いかないんですが……

ジヨ ヨですか!?

## 姫路瑞樹の答え

- ・ p (ピアノ) : 弱者
- ・ pp (ピアノ) : さらに弱く
- ・ ppp (ピアノ) : さらにさらに弱く
- ・ pppp (ピアノ) : さらにさらにさらに弱く
- ・ mpp (メゾピアノ) : やや弱く

「自信がありません」

## 教師のコメント

! ? 『p』の読み方は“ピアノ”で、意味は“弱く”です。

『pp』がピアノなら、『mpp』はメゾピアノで、意味は、やや弱者!?!? 弱者って!

ボケたことが、ですか!?

第十八問 いいなあ〜明久（羨望）。…いや、やっぱ…いいわ（拒否）。死女

ガラッ！ Dクラスの扉を開けて、第一陣、第二陣と傾れ込む。  
驚いた顔のDクラス達は置いて、すぐさま檄を飛ばす。

「須川、島田、他、数学得意なヤツ、手上げえ！」

ぱっ と見て、指さしていく。

「おまえとおまえとおまえとおまえ！ 近衛を蹴散らせっ」

「ああ！」

「解ったわ！」

『『『任せろ！』』』

「巧、前線の指示は任せた！ 俺は後ろをする！ 明久は、巧を援護し続ける！！」

「了解や！」

「OK！」

「Fクラス！？」

漸く緊張が解けたのか、平賀が叫んだ。

「高橋先生！ 島田美波と」

「須川亮とその他が、近衛隊に数学勝負を申し込みます！」

『『『その他！？』』』

「解りました。承認します」

『『先生まで！　だが、そこがいい!!』』』

「あほかおまえら」

「なっ!?　高橋先生だと!?!」

勢いと雰囲気にもまれるDクラス。それを好機と攻めとるFクラス。

「『試獣<sup>サモン</sup>召喚!』」

『『試獣<sup>サモン</sup>召喚!』』』

「後半分の近衛隊は、近藤率いる化学部隊に任せた!」

「解った。人数は?」

「自身を含め10名で行けっ!」

「いいのか?」

「オレらの腕見たやろおが。大丈夫や。それに今は」

「指揮官だしな?　“山崎巧の言葉は絶対!”　なんだろう?」

「は、ははっ　そういうこと」

「行っってくる!」

「おう!」

「巧。まさか本当に言われるとはねー」

「“絶対!”　つてヤツ?」

「そうそれ。あ、巧。次の指示」

「解った」

まだピンチんところはないな。

「みんな、点数がヤバくなったら、手を上げて声を出せ！ 雄二の周りの近衛以外のヤツらは、必ず2人1組になって連隊エレメントで、ことに当たれ！」

『了解っ！！』

返事のあと、近藤達の召喚獣が喚び出された。ええ感じや。状況は、刻一刻と変化する……ん？ 数学か。

「山崎！ ウチと須川が30点を切ったわ！」

近藤達化学部隊は、まだイケるか……5分……いや、

「2分でいい！ 持ち堪えろっ」

「解ったわ！」

「近藤！ツ！ 聞こえてたろ！ 2分や！ 一人落とせ！！」

「そんなこと……」

「そっちのリーダーはおまえやる！ 弱気発言禁止！ツ！ yes かnoで答える！！」

「あーもう！ やるよー！！」

「頼りにしてる！！」

「ふっ……ああ！」

後は

「明久、ここ任せた」

「解った。巧、島田さん達よろしくね」  
「当然！」

お見通しか。

「遠藤先生！」

教室の入口で隠れるように待機していた遠藤先生を

「山崎くん？」

「島田のどこまで急いで移動しますから、ちょっと失礼します」  
「きゃっ……」

抱き上げた。所謂、お姫様抱っこってやつ？

「やるなア」

「ていつ」

「っ！ てめ……」

茶々入れたと思われる雄二に脛キツク。

「いらんこと言わんでええ」

「いいから行けっ」

ケツを蹴られながら走り出した。バカ雄二がっ。

高橋先生の近くまで移動した。

（「顔近いです！ 山崎くんっ！ これじゃあ……」）

「遠藤先生！」

「はひっ！」

？ どしたん？ 顔赤ないか？……熱あるかもしれんな。…なお  
さら急いで終わらさんと………

「遠藤先生、辛いかもしれませんが、もう少し我慢してくださいね？」

「!?!?!?」

あれ? ……怖い? オレの笑顔怖いんやろおな…失敗した。ほんのちよつとや、ごめんなさい。

「えつ…と…辛くないです」

なんか、声小さく……震えてる? ……そこまで、……はあ。

「気持ち切り替えて!」

「はい?」

「いえ。先生、近衛隊に英語で勝負を挑みます」

「あ、えと……はい。承認します」

「サモン試獣召喚!」

オレの掛け声と共に、フィールドが“消滅”する。

「「なつ!?!?」「『『なつ!?!?』『『」

敵も味方も驚く。おい、味方は動けつて。

召喚フィールドが消えたのは、2つ以上のフィールドを極端に近い位置で展開すると、フィールドが互いに干渉し消滅するってのを利用して消したわけ。

「島田、ついて来いッ」

「え? あ、うん」

次は、五十嵐先生や。

「遠藤先生」

「だから近 あっどうぞ」

「? : 山崎巧が英語で勝負を挑みます!」

「承認しますっ」

「<sup>サモン</sup>試獣召喚!」

またもフィールドを消滅させて、

「近藤達化学部隊は、島田達数学部隊と入れ替え。別教科になるけど、点数は減ってる! 後は、そのまま押さえ込めばいいから!」

「了解よ」

「解った」

それぞれ部隊長が頷いたところで駆け出す。

「逃がすか!! Dクラス里山が!」

「五十嵐先生、島田美波が受けますっ! 行って山崎!」

「サンキュー! 助かる!」

「<sup>サモン</sup>試獣召喚!」

島田の声を背中で聞きながら、高橋先生のもとへ戻りつつ明久と雄二に視線を送った。明久も雄二も頷いてた。

「高橋先生、近衛隊に数学勝負を申し込みます!」

「…承認します」

よし、順調や！

「明久」

明久のところへ行って確認。

「ばつちりだよ。先…生？」

いないと思って探そうかと周りを見ようとしたところで、爪先に何かぶつかっ

「どこで寝とんねん！」

「今乃先生こんの！ 起きてくださ

ばたっ 明久倒れる音。

もにゅっ 先生の胸を鷲掴み。（因みに、姫路の胸が霞むくらいおっきい）

「んっ …… もうっ…吉井君、ビックリだよ？」

「す、すすすすすいませんッ！！ 今のは、夢です！ 夢っ！」

苦しい言い訳やって。やけど明久…羨ましいやつ……

「吉井君、先生を呼び捨てにするのはだめだよ？」

「え？ 僕は、そんなこ “夢” っと呼んでくれたよね？」  
なっ！？ 違っ！？ 僕は

「吉井イツ！？」

「はいいいいっ！…！」

直立不動の明久。敬礼とかしそっやし…

そういえば、そうやな……先生の名前って、今乃夢（このゆめ）って名前だったか？ オレも気いつけよ。『murder！murder（謀殺、殺害）！……』言ってる奴らの餌食になるからな……いつ覆面かぶった？ こいつら……

「後で、massacreしてやるんだから」

「ん？ まさかあ？ 巧、“まさかあ”って？」

「あ？ massacreってのは」

すつ と誰かが明久の真後ろ、オレの真横に立って“いた”。

！？

「massacreっていうのは、殺戮、皆殺し、もしくは虐殺や大虐殺。っていう意味ですよ、よ・し・い・君？」

「ごくり ひっ、ひめ、姫、路さん？……」

「はい」

怖ッ！ 明久……羨ましくないやつ……

「butcherとincinerationどっちがいいですか？」

「ばっちや、え？ いんしね？……はい？」

「incinerationですね？ 解りました。Dクラスの平賀君ですね？ よろしくお願いします」

「えっ……ちよっ、巧。なんか怖いっ、どういうこと！？」

姫路が ペコリ とお辞儀をした。

「姫路さん？ えっと……こちらこそ」

「はい」

すっげ、笑顔…

「遠藤先生、Fクラス姫路瑞樹と吉井君が、Dクラス代表平賀君に英語勝負を申し込みます」

「……はあ。どうも」

「ええ！？！？」

ああ。そういうことか…。姫路、恐ろしい子……

「<sup>サモン</sup>試獣召喚です」

「<sup>サモン</sup>試獣召喚！？」

明久と平賀がとつさに反応する。なんもせんかったら、問答無用で補習室への強制連行やからな……

『Fクラス 姫路瑞樹

Fクラス 吉井明久

英語 403点

英語 36点

VS

英語 119点

Dクラス 平賀源二』

「え？ あ、あれ？」

戸惑いながら平賀は召喚獣を構えさせた。

姫路の召喚獣は、西洋鎧を着て背丈の倍はある大剣を構えて……  
即座に腕輪が光った後、熱線が迸る。  
平賀に

「あ、っつ！?!?!?」

向かって構え、対峙していた明久の召喚獣に。酷っ！

キュボツ！ もう一線。

「頭アっ！ 頭が焼ける!?!」

「ダメじゃないですか、吉井君」

「ええ!?!? 僕っ!?!?」

「そうです。攻撃の線に入るのは、危険です」

「ちよつと待って!?!? 姫路さん。おかしいよね!?!? 攻撃の線  
上つて、剣の切っ先だけが僕に向かっ キュボボツ あっつッ!  
?!?!? 言ってるそばからっ キュボツ 顔オオオツ!?!?」

「明久、さつきどういふことって聞いたやろ? あれな…: i n c i  
n e r a t i o n の意味がさ…: 焼却。つまりは、おまえを燃すっ  
ていふことやと…: さつき気づいた」

「おせえええっ!?!?!?!?!? 早く言っつてよ!?!?!?」 キュ ボツ  
明久の召喚獣が飛んで躲した。

「何度も食らってたまるか!?!」

□ Fクラス 姫路瑞樹

Fクラス 吉井明久

英語 403点

英語 0点

V S

英語 0点

Dクラス 平賀源二『

明久の避けた熱線が平賀に命中。なんか……な……

「ついでに言うと、butcherってのは、屠殺っていう  
「姫路さんは、僕をどうしたいの!？」」

さあ?……

今の結果発表されるみたいや。

【Dクラス代表 平賀源二 討死】

「姫路さんの勝利です!」

ん? なんかちゃうんちゃう? 代表倒したんやし……

「失礼致しました。 Fクラスの勝利です!」

(『『『さっきの言葉の方がしっくりくる……』『』『』)

みんなおんなじこと思ってそうやな……

姉(玲)さん。今日も平和です。いつも通りです。…あ、そだ。  
慣れって怖いな……



第十八問 いいなあ〜明久（羨望）。…いや、やっぱ…いいわ（拒否）。死女  
ヒヨウガさん、レフェルさん、暮灘雪夜さん感想ありがとうございます。ごぞい  
ます。

とりあえずのDクラス戦終了。反感を買わなければよいのですけど  
……

今回のあとがきには、レフェルさんの【俺と彼女と召喚獣】の新条  
ありすが出てきます。レフェルさんファンにも楽しんでいただけま  
したら幸いです。

感想欄の遣り取りから始まりますw  
ので、他キャラも出ます。

「半脱ぎ…ね」

「……アキ君」

ゆら… と幽鬼の如く佇むありすとつぐみ。

「ありすとつぐみが暗いオーラーがでてる」

「綾菜、しゃーないやろ。ありすとつぐみの場合好きな奴が叫んで  
んやで？」

「…似顔…絵…書いた」

周りなど気にすることなく、由香里は、巧が何気に言った一言に、  
似顔絵を描き上げていた。そのことに驚いて、つぐみは声を出す。

「え!?! 巧くんを、本当に書いたの!?!」

「わー、イメージが変化してるよ〜」

その絵を見て綾菜は、楽しそうに言った。  
それとは逆に、ありすの怨嗟の音が木霊する。

「そんなに死にたいの？」

「美波ちゃん、なんとかして〜（汗）」

「ああああ、ありす!?!?!? ビームサーベルを出してこっちきた  
ー!ー!ー!」

「ぶるっ うおっ…」

「雄二、どうしたの？」

「何か悪寒が…」

「そういえば僕も…。アレ? ムツツリー二と巧は？」

「……俺は平気。………たぶん」

「何ゆってんの? おまえら第六感とかあんの? すげーな」

「巧だつて」

「その時は、巻き添え喰うからな？」

「だよな」

「お主達は……呆れてものも言えん」

「秀吉。僕達、大変なんだよ? 雄二もそうだけど。なんか、あり  
すが光学兵器とか使ってきたりして」

「バカ。いくらなんでもそんなことあるわけが…ぞくぞくっ  
!

キョロキョロ」

「どしたん？」

「いや、さつきより妙な寒さが…」

「虫の知らせだったりして」

「やめろ、明久! マジでこえーからっ」

「あははっ！ おまえら大袈裟やから。断頭台にでも、立たされたような顔してんで？」

「「！ 巧、おまえな！」」

「え？ 何々？ ぞくぞくっ！ ちよっ！ 待って！？ 寒さが遷った！ 来んなって、おまえら！」

「……合掌」

「「縁起でもねえええッ！！！」」

「ちよっと行ってくる」

歩き出したありすの背中につぐみが声をかけた。

「あー、あたしはやめとくよ。瑞希ちゃん達を止めることは今回無理そうだし」

「巨大ピコハンで叩けばいいじゃん、ギャグなんやし」

「でも、あれは両手持ちになるよ？ 確かに軽いけど。」

綾菜ちゃんは、いいの？

「??？ こーちゃんは、写真がすきなんだよ。いつも一生懸命で、こーちゃんはいつも元気」

「あ、うん……ぼそっ 普通の写真なら……ねー……」  
「ありすぎない！！」

あかりの叫びで、深紅が異変に気づいた。

「あかん！ 次元の壁をビームサーベルで切りさいたみたいや！！  
二度目の退避せーや！！ 特に坂本！」  
「核兵器とかそういうの作れる彼女ですから、大変そうですね。彼氏になる方は」

晃希の呟きは、雄二に……………

バチッ

「？ 何の音だ？」

『二度目 ダッ！ の退避せーや！！ 特に坂本！』

「判断が早いな。さすが、神童ってところか」

「巧、どうしたの？」

「いや、何で ブオン サクッ ………………新条？」

「雄二いつ！」

「ちやうつ！？ オレじゃないオレじゃない！！」

「あれ？ 山崎巧君よね？ 初めまして。かな？ 新条あります。  
趣味は、料理と雄二をいじる事です」

「すごいインパクトのある自己紹介やな。とりあえず、初めまして。  
山崎巧です。好きに呼んでくれてええよ。雄二弄る時は、呼んでくださいな ニヤリ」

「ありがと。ぜひとも、呼ばせてもらおうわ ニッコ」  
「悪代官と越後屋みたいだ」

「ん？」「ん？」

「な、何でもないよ」

「で、本題」

「何？」

「ブオン 雄二は？」

ビームサーベルを軽く素振りしながら、ありすは尋ねた。

「「あっち」」

2人して、あっさり友達？を売る。

「まだ見てないのに、死ねないよね……」

「明久、でもさ……」

「何？」

「今回おまえは、見るどころか、今乃先生の」

「わあ！ わあっ！？ ダメだって蒸し返しちゃ！」

キヨロキヨロ はあくっ……誰もいなかったからよかったけど、  
言わないですよ？」

「もちろん！ 柔らかいとか気持ちいいとか呟いたんは、近くにお  
ったオレくらいしか聞いとらんやろっしな」

「アホおっ?!?!?」

駆け出したつていうか、逃げ出した？ 明久の背中を見送りなが  
ら、巧はほんの少し羨ましく思っていた。

「明久もモテるからなあ……」

レフェルさん、半脱ぎ撮影会（笑）次回なので、ありすを次回もお借り致します。よろしいですか？話し方とかのダメ出しもあれば、すぐ直します。

では、また。

バカテスト

化学

【第十七問】

・問 以下の問いに答えなさい。  
時に食用できる地下茎を持つ、英語で「lily」という名の植物を答えなさい。

姫路瑞樹の答え

・百合

「ですが、もっとも有名なものは、レスビアンです」

教師のコメント

正解です。

アレ？ そつちですか！？ 植物！ plant！  
いやいやいやいや。もっとも有名なものは玉葱です。

木下秀吉の答え

・百合

「男は、薔薇らしいのじゃ。……姉上が……なんでもありません」

教師のコメント

正解です。

知りたくなかった！ そんな事実っ！

坂本雄二の答え

・清水美春

「アイツは、ガチだな」

教師のコメント

なぜ清水さん何ですか？

……。さて、次の採点を……

吉井明久の答え

・清水美春さん

「間違いなく、百合だと思います」

教師のコメント

あなた方は、わざと間違っているのですか？

ノーコメント。答えてるようなもんですって？ 先生に何を言わせたいのでしょうか。

山崎巧の答え

・性は、清。名は、水。字は、百合。真名は、美春。

「Dクラスに所属との噂です」

教師のコメント

三國志か！ というより、それだと恋姫十無双ですから！

島田美波の答え

・百合（清水美春）

「ウチに襲い掛かって来ます」

教師のコメント

一応正解です。

……強く生きてください。

土屋康太の答え

・百合（女の子×女の子）

「……女の子×男の娘は、どうなるでしょうか?」

教師のコメント

……正解。

今から不正解に変えても……いや、答えてますよね？ 解ってるからこそそのボケ……くっ……

## 平賀源二の答え

・百合

「清水さんって……まあ、オープンだから……」

## 教師のコメント

Fクラスだけじゃ、ない……？ Dクラスにも！？ 感染拡大と  
いうことですか。最終段階である、V O . ? 『絶対包囲』にまでな  
ると教師陣は！………データドレインの使える人を探さないとお  
うツ！？

黄色い救急車を呼ばれるところでした。

黄色い救急車は、精神病院直通。

『『『うおおーっ！』』』

『『『そんなあーっ！？』』』

その知らせを聞いたFクラスの叫びとDクラスの悲鳴が混じり、  
耳に痛い。喧しわ。

「凄えよ！ 本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。 アレはDクラスの連中の物になるからな」

「坂本雄二サマサマだな！」

いやいや、むしろ姫路瑞樹様々。

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

姫路は凄かった。ノーマークでした。島田だけかと……

「坂本万歳！」

「姫路さん、愛しています！」

ある意味正解。

代表である雄二を褒め称える声があったるところから聞こえる。…

……あいつなんかしたか？

雄二の方を見ると、がっくりと頂垂れているDクラス生徒達の奥  
でFクラスの野郎に囲まれてた。オレと明久にやったこと忘れてへ

んかあゝ？

「あー、まあ。なんだ。手放して褒められると、なんつーか」

「ああ、憎い……」

明久と顔を見合せて頷き合う。

「雄二」

「ん？ 明久に巧か」

雄二が振り向く。

そこに颯爽と駆け寄って、

「僕も雄二と握手を」

明久は両手を突き出した。ガシィツ と雄二に手首を掴まれたが、オレらは ニヤリ とする。

「なっ！？ おまえら!?!」

「明久っ!」

「解ってる!」

オレと明久が脚を振り上げ、

「うらあっ!」

シュートするように雄二の足を蹴り抜く。

「うつをっ!?!」

雄二は体勢を崩し、バランスをとろうと、雄二自身が無意識に手首をさらに強く握る。もちろん、明久もやるうな。

そしてそのまま、ぐるん と一回転する勢いで バン!!! と床とキス。

「ごあああッ!?!?!」

全ての衝撃を顔面で受け、もんどりうつ雄二が、痛みを和らげようと撫で擦ろうとしたのが、手首を掴んでいた手を離れたけど、明久は離さない逃がさない。

やけど、まだまだ……

「巧、なんか足りないよね?」

「!?!?!」

痛みで声になっていない雄二は放って、同意する。

「せやな……誰か!」

「はっ」

「化学部隊の近藤か。ちょうどええわ。テトロドトキシンの用意を」

テトロドトキシンのフグ毒。

「山崎副隊長、よろしいので?」

「よろしかねえよ!?!」

「あ、復活した」

「復活した。じゃあねえよ！ 解ってんのか！？ フグ毒って死ぬんだぞ！？」

「ふーん……」

「違うよ、巧。ごうだよ。」

「へえ、そうなんだあ（棒読み）」

「おっ、そっか！」

「へえ、そうなんだあ（棒読み）」

「おいっ！ てめえら！」

「「しらなかつたなあー（棒読み）」」

「ムカつくな、ホント！ テトロドトキシンはやめろ！」

「仕方ないね。じゃあ、スリジャヤワルダナプラコッテを」

「島だ！」

「何？ どうしたの？」

「違うっ！ 島田を呼んだわけじゃないんだ」

「仕方ない。次は」

明久は、なおも雄二を無視。

「ちょっと待て。おまえは島をどうするつもりだったんだ！？」

「ええっ！？ 吉井、ウチをどうするつもりだったの！？」

「島田っ！ 違うって言っただろっ！」

「スリジャヤワルダナプラコッテ島じゃないんでしょ？」

「そっだ……いや、違う……あー！ もう！ おまえらどっちもだよ！？」

「じゃあ次は、スライム食べてみよっか」

「スライム？ それって食べられるの??」

「食えるかあっ！？ なんだ！？ この力オスっっ！」

明久の言葉に、マジボケの島田。雄二が終に叫んだ。

「食べ物として出されてるんやったらええやろ？」

「何がだ？ さっきまで静かだと思っていたが、おまえは何をしていたんだ？」

「刑罰のリストアップを」

「何をするつもりだ？」

「例えば、その気のある殿方に、雄二を好きにして構わない。と拘束した状態で生け贄　ちやうわ。差し出す」

「生け贄つつたか？　生け贄つつたか？」

仕方ない。そこは、素直に認めよう。

「うん」

「PTSDになるわ！　それに、例えが具体的過ぎる！　マジで実行されそうで怖えよ！！」

「……………」

明久と目が合い、　ニヤアツ　と口角を吊り上げる。

「ちよっ！？　誰か！　俺の身が危ないんだ！　助けてくれっ」

雄二が喚いている間に島田に耳打ち。

「坂本、あんたの好物って……アレね」

「巧、何を言った！？」

「海外には、色々な虫の料理があつて、雄二はそれに目がないって「んなわけあるかあっ！！」

「特に、水ゴキブリの素揚げと蠍サンリの唐揚げが好物やつて」

「下手したら、おまえなんかより変態だぞ！？」

「ちょっと待つてよ、雄二！」

「何だ？」

「ずっと、何か引つ掛かってたんだけど……アレ。遠藤先生にリス  
ト書かせてるんだ」

オレ、両手塞がってるもん。

「ああ、そういう事か……なぜ明久がメインで攻撃をしてきていた  
のか、これではつきりとした」

「ねえ、巧。なんでずっと抱っこしてるのさ」

「なんつーか、抱いてること忘れてたわ」

「いやいや。無いだろ」

「そんなこと有り得ないよ」

「んー……抱き心地がいいからとか……女性特有のいい香りもするし、  
離したくないっつて、無意識下で思ってたのかも？」

「う……あ……えっと……ありがとうございますで、いいんでしょうか  
……？」

なんかお礼言われた。

「みんなっ！ こいつは、異端者だ！」

明久っ！？！？

『男とは、愛を捨て、哀に生きるもの！ 異端者には、死をくれて  
やる！』

『die of!』

くっ！……ここは逃げるが勝ちや！

『異端者が逃走したっ!』

『愛の逃避行だと!? 許せねえ!』

『駆け落ちしやがってええッ!』

「何を言っとなねんあいつ……ら」

「？」

目が合いました。ああ、うん。先生、降ろすの忘れてた。  
ん？ 遠藤先生、俯いてどうしたんやろ?……

「欲求不満なのかな？」

『『『ぐはっ!?』』』

この人は、何をいきなり?!?!? 後ろの半数が削れたのは、行  
幸やけども。

ちっ!……仕方ないっ。

「あっ!……霧島翔子のスカートが捲れてる!?!」

『何っ!?!』

『どこだ?』

『それより目の前のアイツ』

「誰か直してあげて!」

『『『俺が!……!』』』

うん。バカばっかやな。

気が逸れているうちに、角を曲がって下に下りて保健室直行。みんな忘れてるっばいしな。

いざ！ 夢の国へ。

夢の国へ、夢の国へ。行ってみたいと思いませんか？ ウフッフ

↓

マイペースに生きてます。

こんにちは。

ヒヨウガさん、レフェルさん、暮灘雪夜さん。感想ありがとうございます。

いつも元気もらってます。

今回長くなりましたので、半分にしました。（苦笑）

雄二弄ってたら長く…

軽快なリズムで廊下を駆ける美少女。

「ぶつぶつ… 雄二、どこよ!…」 ブウン

…恐怖のリズムで廊下を駆ける美少女。

それに捕まる一人の男子生徒。

「ごめんなさい、ちょっといいかな?」

「え? はい」

美少女に声をかけられた男子生徒は、浮かれて返事をした。

「坂本雄二ってやつ見かけなかった？」  
「さあ？」

名前を知らないのかも。と、少女は探している男子生徒の特徴を述べていく。

「身長は180cm越えていて、赤い鬘たてがみみたいな髪に、えっと……結構引き締まった体つきで、たくましい感じの……頼りになるっていうか、その……」  
「その……？」

男子生徒の問いかけに我に帰った少女は、

「あ、ごめんなさい！」

付き合ってもらっているのに、話が脱線したことの謝罪と、先ほどのことを有耶無耶にする為に頭を下げた。

（「何を言ってるのよ！？ 私は！」）

「とにかく！」 ブオン サクッ

妙な音に男子生徒は、首を傾げて音のした方を見てみると、『消火栓』と書かれた赤い箱が斜めに斬れ、重みに従ってズレ落ちていくところだった。

「はい？」

男子生徒はわけが解らず、高い声を上げてしまっ。

「あ」

少女は勢いよく腕を振るった為、近くのを斬り裂いたようだ。

「あの……」

「はいっ！！？？ あ、あああああつちの方で見かけましたアツ！  
！！」

男子生徒は、この恐怖から逃れるべく、咄嗟に保健室方面へと指を指す。

少女は男子生徒の反応に“しまった！”と苦笑いをほんの一時だけ浮かべたが、

「あー……うん。解った。ありがとう」

お礼を言って走り出した。

それを見て、男子生徒は安堵の吐息をついた。

「そうだ」

「！！！！ ビクウツ！」

「それ、後で直しておくから、安心していいよ？」

「忘れてた忘れてた」と笑顔で告げる。

「 コクコクコクコク」

男子生徒が頷いたのを見て、少女は笑顔を浮かべて去って行った。少女が去った後も、男子生徒は コクコクコクコク と頷き続けていた。

男子生徒は、恐怖で震えていただけなのかもしれない。

後にそれは、学園で噂になる。

やれ、『光の剣を持った神の御使い』。だの、『死を振る舞う女神』。だの、『戦慄の妖精』。だの………あげればキリがないくらいだ。

だが、噂の美少女である当の本人、『新条ありす』は知らない………

レフェルさん、すみません。ありすを超、使いましたアツ！

なんか、暴走気味でありました。

大丈夫でしたでしょうか……？

ありす 器物破損。恐喝擬い？

なんてこともしてますし。

……ここは、ありすっぽくないなどじゃんじゃん仰ってくださいね？  
即座に直していきます。

ではまた、近いうちに。

第二十問 撮影会に迫る危機。魔王ドナドナ（前書き）

バカテスト

現代社会

【第十八問】

・問 以下の問いに答えなさい。

ローソンやファミリーマート、吉野家、BOOK・OFF等の大手企業が自己の商号・商標などを使用する権利、自己の開発した商品やサービスを提供する権利、営業上のノウハウなどを提供し、これにより自己と同一のイメージ、ブランドで営業を行わせ、他方がこれに対して対価、ロイヤリティーを支払う約束によって成り立つ事業契約とは何か、答えなさい。

285

姫路瑞樹の答え

・百合

「百合契約、もしくは、姉妹の契り。複数の姉妹<sup>スール</sup>、姉、妹を持つことは禁止されていて出来ない。そのため、「スール関係にある」<sup>スール</sup>「特別に親しい」とみなされる。通常、上級生が下級生にロザリオを授ける事でスール関係が成立する。

通常のお姉様方ではなく、薔薇様方に認められ、ロザリオを授けられた場合、特別な妹、妹<sup>ブレイ・スール</sup>ではなく、ロサ・キネンシス・アン・ブ

ウトン（紅薔薇のつぼみ）と呼ばれる。

因みに、薔薇様は3人で、

ロサ・キネンシス

紅薔薇

ロサ・キガンテリア

白薔薇

ロサ・フェティダ

黄薔薇

のお姉様方からなります」

教師のコメント

正か 違う違う！ もう終わりましたよ！？

マリみて！？ 問題と関係ない上になげえ！

答えは、『フランチャイズ』ですつ。

島田美波の答え

・ロイヤルティー

「午後 紅茶。ウチは、ミルクティーが一番好きかな」

教師のコメント

ロイヤルティって書いてない！？ 書いてますよね！?!？

午後ティーじゃねえよ！？ 商標つてのはあってますけども、解

っついてやってますよね!?

“好み”は、聞いてません!“答え”を聞いているんです!

“こ”って文字と、文字数だけしかあってませんというか、  
答えを書くんですよ? っつてところから始めないとダメえっ!?!?!?  
!?!?

吉井明久の答え

・フラン……妹様

「あ、思い出した。フレンドール・スカーレットだ」

教師のコメント

x

雨の中、弾幕<sup>じゅうぶ</sup>っっすんの?

坂本雄二の答え

・フラン……蛙のアレ

「ヴァリア の人……人なのか?……アレは」

教師のコメント

deathです

頭に刺しまーす……死ぬって！

でも、生きているのがヴァー アークオリティ。

木下秀吉の答え

・フランチャオズ

「天さん……」

む。姉上の影響が強くて出てきた気が……」

教師のコメント

……。

やっぱりか！

土屋康太の答え

・フランチャイナ

「……明るいというか、元気な感じの中国人……美女！」

教師のコメント

惜しいですね。

そういうことでしたか………あんたって人はああーッ！

相沢綾菜の答え

・フラン・フラン

「ミハエル・ブランの幼なじみー」

教師のコメント

酔っぱらいですか？

クラン・クランでしたか。マク スFの20話は、切なくなりま  
した。

新条ありすの答え

・ファイナルアンサー？

「あのための長あい間ってツツコミ待ちなのかと思っわね」

教師のコメント

ミリ ネア。

言うてはならないことを……！

桃宮あかりの答え

・フツ……

「あゝ！ ダメっ！ いざボケる側に回ったらボケられない……！」

教師のコメント

笑い？

そのような場ではありませんよ？……悪しからず。

神埼深紅の答え

・ファイナンスシャルファンタジー？

「不朽の名作です。先生は、やらはりました？（やられました？ やりました？）」

#### 教師のコメント

え？ え？（2度見）

どこからツッコめと！?!?!?

ゼロ魔とかロードスとか……パーティーメンバーに金融屋。パ  
ンの横には、ディードリット。ディードリットの横には金融屋。  
ルズとサトと金融屋……シリアスな場面が笑いになりそうで  
すよ!?!?

技は、『銭投げ』オンリー（笑）  
っておおいっ！（ノリツッコミ）

#### 山崎巧の答え

##### ・ドミトリー契約

「カプンの格ゲーのヴァンパイアシリーズに出てくる吸血鬼か？  
いや……なーっ草が。なーがれて、くっ　　って歌ってる2人  
組？」

それとも、落ちている埃や塵を拾うこと？」

#### 教師のコメント

お住みになられますか？　　つて、不動産屋行って！

デミ　リだよ、それは！

それはケミス　リー！

ゴミ取りっ！

いい加減、ドミトリーから離れろっ！？

それと、最後に言っておきます。　　お題じゃないからっ！！！！

先生の最近の悩み。

ツッコミが、洗練されていくこと。

…… Fクラスだけじゃないんだよおおおっ！！！！

先生が、面白く成りつつあることを喜ぶ生徒達。

普段ツッコミの人も数少ないボケる機会だと、張り切ってます。

(他教師含め)

第二十問 撮影会に迫る危機。魔王ドナドナ

ガラッ カシヤカシヤカシヤッ ドアを開けて入ると、カーテンの向こうから連続したシャッター音が聞こえた。くうっ…、もう始まつてる！

「康太」

「……来たか。たく……何だその状態は……」

「え？ ……ああ……。すみません、また忘れてました」

よっ、と。

とりあえず、もう一つのベッドに遠藤先生を降ろした。

なんか熱いんやるか？ 顔を パタパタ と手で扇いでる。

「いえ、気にしてません。…それより……土屋くんは、何をしてるんです？」

「……………しゅ…修行」

修行！？ この現代に修行をする10代の学生がどれだけおるんやっ！ そんなん信じるわけないやん！！

「そうなんですか。スゴいですね、土屋くんは」

ほら見る！ ……おろ？

「将来を見据えてるんですね？」

信じはりました。あ、そうや。ええ事考えた。

「遠藤先生。康太は、将来プロのカメラマンになることを志て日々研鑽してるんです」

「へえ。土屋くんは偉いですね」

「……っ」

康太、気まずそうな表情になつとる。まあ、実際はエロな写真を撮ってただけやしなあ。

「康太の写真技術向上の為に、同年代の被写体だけではダメだと思  
うんですよ」

「そうですね。同じ事だけをしていても仕方がないのかもしれない  
ですね」

うんうん。そうですね？

「それで、ですね」

「「ぼそっ　それで？」」

「別年代である先生に被写体になっていただけじゃないかな」と

「「ごそごそ　カチャカチャツ　……………（真剣）」」

反応はえーな。反射的やん。康太達の遣り取りに、耳を傾ける。

「……よし！」

「康太君、それって……」

「……輸血パックだ」

「それはまあ解るんだけど、どうするの？」

「……点滴しながらであるならば、血を噴出させても大丈夫だ」

「えっと……どっちみち、一気に出血したら貧血で倒れるよね？……」  
「……問題ない」

言い切ったよ、この子。

「ひ、被写体っていうのは、モデルをすればいいのかしら？」

ずっと先生を見過ぎたみたい。『ひっ』て、声が上がってた……オレの目付きなんかならんやるおか……。だがしかし！ とりあえず今は、目先の欲望を！！

「はい。そうすれば、康太ももっと夢に向かってイケると思うんです」

「……うーん……」

迷ってる！ もう一押しやっ！ 先生の両手をとって真っ直ぐ目を見つめる。真剣なお願いで、康太の夢を応援したいって気持ちを伝えれば……

「遠藤先生！ あなたが必要なんです！」

「！？ わ、わわわ、わわ私でよろしければ！？」

「ありがとうございます」

（「こういう時は、不束者ですがよろしくお願いしますというべきなの?? どうしよ?? と、とりあえず」）

「不つつちゆか……」

（「噛んじゃった!?!」）

不つつちゆか？　???　何やる？

「あうゝ」

呻いた。何！？　この可愛い生物は何や！？

「お持ち帰りしてもいいのかな？　かな？」

「……俺も我慢している」

おおツ！?!?　康太がいつにもなくストレートや！

ま、しゃーないわなあゝ

「ずっと2人でおったんやもんな？　そのカツコの工藤と」

「！」

目を見開く康太と目を細める工藤。

「康太君、そうなんだ？」

「……違う」

「それはそれで傷つくなあ」

「……うっ……あー……」

「困ってる困ってる」

工藤が楽しそうに康太の頬を突いてる。前屈みになったら見えるって！　とか思いつつ、オレは見るけど。

ネクタイを外して首にかけてるだけってのは、ポイントやな。それに加えて、シャツのボタンも上から2つ3つ外してるってのも素晴らしい。こういうタイプは、スポーツブラかと思ってたけど……  
……レースが付いた可愛いデザイン。んでもって、工藤愛子

の髪色と爽やかな雰囲気とマッチしたパステルカラーやけど、明る過ぎないライムグリーンの色。と、その奥で透けて見える白く柔らかそうな……アレ？ ……あれも絶対領域ってやつか？ うつつすーく、透けて、見えそう！ でもっ！！ みたいな感じになっ  
とる。

ま。とにかくにも、先生の気が変わらんうちに遠藤先生加えての撮影会ツツ！！！！

「先生よろしくお願いします」

オレは、きつちりと頭を下げた。顔を上げたところで、目が合っ  
て、遠藤先生は笑顔で返事を返してくれた。

「あ、はい」

「ほら、康太も」

「……ペコリ よろしくお願いします」

「こちらこそ。よろしくお願いしますね」

うん。ええ人や。

「康太。前言ってたデジカメ。今譲ってもらえへん？ 今ある金は渡すから」

「……もう用意してある」

「なっ！！」

「……この機会を逃す様なことはないと思ってた」

こいつ……！！

ガシッ！ がつちりと、熱い篤い、握手を交わした。さらに  
友情が深まった気がするわ。

「康太。おまえは、最高の友や」  
「…………おまえもな」

ガラツ ドアが開いた。誰や？

「はあ、はあ、…始まつ、てるか？」

「はあつ…はあ、まさつ、か終わってな、いよね？」

「雄二？ 明久？」

息も絶え絶えに喋ってた。

「……………そんなっつなに見たかつたんか。そうかそうか……………くふっ

…さらに驚愕の事実があるのだよ」

「何だ？」「何？」

明久も雄二も身を乗り出してる。そんだけ興味があるっつーこと  
やな。

「遠藤先生も参加することになった」

「「なつ…にい！？」……………」

「ぼそっ オレの口添えのお陰や」

（「「そうなの（か）？」」「（

明久と雄二は、アイコンタクトで康太に尋ねた。

「……………こくり」

「崇め奉ってくれて構わんで？」

「感動したっ！」

「おまえなら、やってくれると思っていた。俺は、おまえを誇りに思う」

「巧は、人類の至宝だよ！」

先生と工藤が何か話してるっばいけど、聞こえんかった。ま、ええわ。

「オレは、康太の動きを追いながら撮るから、康太よろしく」  
「…待て」

後ろ下がろうとしたら康太に腕を掴まれた。

「ん？ どした？」

「……遠藤先生は、巧が撮れ。その後でオレも撮る」

は？ 康太のが上手いやろ。

「何でなん？」

「……その方がいい画が撮れる」

「??？ そういうもん？」

「……そういうもんだ」

「あー……遠藤先生。オレが撮ることになりました。改めて、よろしくお願いします ペこっ」

頭を下げたオレに、ベッドの上で可愛らしくお辞儀をする。ホント可愛らしく。たまに、この人は本当に年上なんか？ って疑ってしまう。

「えと、えつと…お願いします」

撮影会は「あっ」という間やった。

テレビで見たカメラマンみたく、「ちゃん可愛いねー、今度はこのポーズとってみよっか？」とか、言ったらしい……。ノリで撮ってたんやけど、ノリ過ぎたらしいよ？……雄二とかちよい引き気味やったもん。別に雄二らにどー思われよつと、どうでもいいよ。何より、楽しかったし。

「巧、保健体育の参考書に載ってそうな、かなりキワドイ写真とかも撮ってたよね？」

「おう。欲しいんか？」

「「もちろん!!」「」」

あれ？

「康太は自分で撮ってるやろ？」

「……こっちで手一杯だった」

「そっか。でも、なあ……あげるの惜しいわ」

「何を？」

「何を？ つて、だから遠藤先生の色っばい」

声のした方を振り向いたら、島田と姫路と高橋先生？ と、霧島翔子も？

「つーか、みんな目が怖いっ……死んだ魚のような目を……」

「さ、続けて？ “色っばい” 何？」

「「「「!!!」」」」

どこを見てるのか解らない視線の島田が先を促す。

「色っばい」なあ、遠藤先生は。って言おうとしたんや。な  
? な? 明久」

苦しいけど、明久…頼む!

(「僕!?!?」)

「そ、そうなんだよ。遠藤先生があまりにも色っばいから押し倒す  
んじゃないかつ 「バカ! おまえ何を言っで!」 て、…へ  
?」

「雄二……浮気は許さない…!」  
「ちよっ!?! 待て! 俺は何 ガシイツ! 頭が割れるっ!?!?」

雄二の力で持っしてても、霧島の腕は剥がれへんのか。

「…雄二が寝たきりになっても、甲斐甲斐しく世話をする」  
「待て待て待て待て待て待て! これから俺の身に何が起こるって  
んだ!?!」

「…雄二。骨まで愛してる」  
「誰かあつ! ずる… 警察をお ずるずる… おおおおおお  
っ!…!」

雄二が引き摺られてく…ドナドナドーナ、ドーナ ……シュ  
〜ルっ。

「雄二。ホント、お痛が過ぎるんだから…お仕置きの間ね…」

「なあっ!?!」

ん? 保健室の外にも誰かおんのか?

「ブウン 調理(家庭科室)にする? ブオン 解剖(理科室)にする? それとも……」

「ご飯にする? お風呂にする? って感じで聞くなっ!? さっきから振り回して唸って聞こえる風切り音が死の足音にしか聞こえねえ! 何、お前らレベル5なの!? 俺も首掻き筆りそうだわ! つーか、何でここにいるんだ!? ありs」

追加された人員は、戦闘鬼人っぽいし、後は無し……か。かなりパニックするのは伝わる。言葉を紡ぐ余裕すらなさげ。おまえのブウン まで精一杯生きるよ……

「さ、行きましょ。翔子」

「…もちろん。私の凄さを見せる時が来た」

バイバイ、雄二…

「「よーしいー(君)」

「ガクガク しつ島田さんつ。 ぶるぶる しつめじさん!」

こっちにも、修羅がおるわ。明久震え過ぎて噛んどる。“しめじさん”て。

「美波ちゃんは、呼べたのに……」

「! びくっ」

「私は、菌類ですかあ?」

「ひっ！ あ、あああの、」

今度は明久。

おとーさん、おとーさんっ ……タイトルは、……………そう！  
『魔王』。めっちゃしつくりくるわ。低音ボイスに爆笑した記憶  
が…

「ぼそっ ウチの拳が真っ赤に染まるうーッ！ よし、これでい  
こ」

島田、おまえは何すんねん（するの？）。

「ねえ？ それって、僕の血で？」

「え？ やーねえ。冗談じゃない」

「冗談に聞こえないから聞いたんだけど…」

やな。 8割方本気やろ。あの言い方は。

「瑞樹、先行つてて。このバカを力尽くでも連れていくから」

「はい。解りました」

「え？ 解って欲しくなかったよ！？ 姫路さん！」

明久、頑張れ。

「じゃあ…」

明久の手を取ろうとした島田の手が、虚しく空を切った。 ……  
あー……………

「島田さん、本当に勘弁！ 許してくださいッ！」

うん、なんか……

「……………」

ほら。島田落ち込んだ。落ち込むくらいなら言つなよ……

「島田さん……？」

「ぼそつ さすがに……ウチも傷つく……よ……………」

「ぐっ、ごめん！ 島田さんホント、ごめん！」

島田が俯いたまましゃべった。

「……本当に悪いと思ってる？」

「もちろんだよ！」

「……………」

「あの、島田さん。どうすれば許してもらえるかな？」

明久、お人好しやな……ほんまに。

「……………」ウチのこと……………名前で呼んで

おおっ？ そーきたか。

「え？ ……それだけでいいの？」

「…うん。それだけで…嬉しいな……………」

「へ？ ……あつと、その……………」

明久、ちよつと赤なつた。

素直な島田つて可愛いさ倍増やも ピシャン！ 静かやけど、力

強くドアが閉められた。……あれ？

「あの2人の邪魔をするのは、どうかと思います」

“いいとこやったのになー。”とは思ったけれどもさ。

「いやあ、邪魔なんて……」それよりも「はい？」

なんか、アレですよね？……

「どうしてこうなったのか……あ、あなた達がしていたのは、」

怒ってらっしゃいませんか？ 高橋先生……。

「が、がが学内での、い、淫行行為……」

「はあ！？！？」

ちよつ、今つ！？

「つ、つまりは、不純異性交遊を……しかも、教師とだなんて、許されることではないんですよ！？」

“なんて破廉恥な！” つてことやる？ でも、そんなスペシヤルなことしてへんもんな。

「そもそも……遠藤先生も、軽はずみな行動は慎んで頂かないと困ります」

「はい、すみません……」

しゅん…… ってなった遠藤先生。……あー……見てられへんわ。

「高橋先生。遠藤先生には、無理矢理協力してもらったので、遠藤先生には非はないんです。責めるのは、オレ達だけにしてください」

オレは深々と頭を下げた。

……今、M？　とか思ったやつかかって来い。相手してやんよ。

「……」　ぼそつ　……M？」「」「」

「誰や！　つつーか、高橋先生とオレ以外の全員やんけ！　遠藤先生までゆつとは思わんかったけどお？」

「……感動した？」

「するかあつ！」

康太は、やつぱりバカです。

工藤は、意外とバカです。えろくて可愛いけどな。

遠藤先生は、いい人です。背徳感ががが…

高橋先生は、やつぱり真面目な美人さん。恥ずかしさに赤くなつてたのは愛らしかった。

ていうか、遠藤先生がキツパリさっぱり否定してくれれば、高橋先生はお怒りにならなかつたのでは？……どっか抜けてんのかな？　オレが高橋先生と遠藤先生がギクシャクしないようにフオロ―を……あれ？　オレって結構まともで真面目？

第二十問 撮影会に迫る危機。魔王ドナドナ（後書き）

ヒヨウガさん、レフェルさん  
感想ありがとうございます。

レフェルさん。頭のバカテストもあとがきまで、レフェルさんキャラがいっぱい…

上手く使いこなせていないとは思いますが、楽しんで書かせていただきました。

ありがとうございます。

今回、結構真面目っていうか、ありすの話書いてたら、サイン出せませんでしたので、次回か次々回のあとがきか本編にて触れます。レフェルさん、またお世話に（？）なります。

バカテストにウチの子を。

本編、あとがきにてウチの子を。

っていう作者様方がいらっしやいましたら、お声かけください。

全力で取り組みますっ！

マイペースにのんびりですが……

ではでは、早速どうぞ。

「雄二は、保健室に居るってこと？」

ありすは、携帯を取り出してコールする。1コールで相手に繋がる。

「もしもし、翔子？ 雄二のことで話が  
『…解った。すぐに合流する』」

保健室の前で、ありすは翔子と合流する。中を伺おうとしたところで、美波と瑞樹が駆けて来た。

「霧島さんにありすちゃん？」

「2人もここに用があるのね…」

「うん」

2人が頷いた。

「、かなりキワドイ写真とかも撮ってたよね？」

「え？」

何か盛り上がるものがあつたのか、中から声が聞こえた。

（「キワドイ？…」）

それを聞いた4人は頷き合つて、耳を澄ませる。

「おう。欲しいんか？」

「もちろん！！」

キワドイ 欲しいか？ 力強い返事 執行！

「康太は自分で撮ってるやる？」

「……こっちで手一杯だった」

音も無くドアを開け、

「そっか。でも、なあ……あげるの惜しいわ」

「何を？」

尋ねた。

「何を？ って、だから遠藤先生の色っぽい」

美波達を振り向いたみんなの瞳孔が軽く開いてた。雄二が一番の反応をしていて、過呼吸気味だった。

「さ、続けて？ “色っぽい” 何？」

「「「「！！！！」」」」

どこを見てるのか解らない視線の島田が先を促す。

「色っぽい” なあ、遠藤先生は。って言おうとしたんや。な？ な？ 明久」

ぴくっ と美波と瑞樹が僅かに反応を示す。

「そ、そうなんだよ。遠藤先生があまりにも色っぽいから押し倒すんじゃないかっ 「バカ！ おまえ何を言って！」 て、…へ

「？」

「雄二……浮気は許さない……！」

「ちよっ！？ 待て！ 俺は何 ガシッ！ 頭が割れるっっ！？」

雄二は、翔子の腕を剥がそうと藻掻いていたが メシメシッと軋む音が響くだけ。

雄二にとっては死刑宣告の、なにものでも無い翔子の言葉。

「……雄二が寝たきりになっても、甲斐甲斐しく世話をする」

「待て待て待て待て待て待て！ これから俺の身に何が起こるってんだ！？」

「……雄二。骨まで愛してる」

外で待機していたありすは、刹那の間……相好を崩した。

(「翔子……。……雄二。私は、」)

「誰かあつ！ ずる…… 警察をお ずるずる…… おおおおおおおつ……！」

雄二の声が近づいて来て、ありすは考えていたことを霧散させる。すぐさま、いつものありすに戻って雄二を出迎えた。

「雄二。ホント、お痛が過ぎるんだから……お仕置きの時間ね……」「なあっ！？」

先ほどよりも、さらなる驚き。雄二の息を飲む音が響いた気がした。

今度は、翔子が複雑そうな顔をする。他人が見ても気づかないほどの微かな変化。

「お」

雄二の言いたいことがまとまる前に、ありすが言葉を発する。

「ブウン 調理（家庭科室）にする？ ブオン 解剖（理科室）にする？ それとも……」

（「雄二は乗ってくれる。当然翔子も……」）

「『飯にする？ お風呂にする？ っで感じで聞くなっ！？

（「ほら、ね」）

さつきから振り回して唸って聞こえる風切り音が死の足音にしか聞こえねえ！

（「私を私として受け入れてくれる、私の」）

何、お前らレベル5なの！？ 俺も首掻き筆りそうだわ！！ つ  
ーか、何でここにいるんだ！？ ありs 「

ありすは ブウン と一振りして、光剣をしまっ。

ありすの満面の笑顔に、雄二は言葉を飲み込んで、いつものニヒルな笑いとは違う、本当に優しい笑みでありすを見ていた。

（「 大好きな人達 精一杯生きるよ……」）

ありすは雄二の手を取り、歩き出す。

「さ、行きましょ。翔子」

翔子も雄二の手を取り、歩き出した。

「…もちろん。私の凄さを見せる時が来た」

雄二は、今は自分を卑下したりしない。  
今はただ

ぎゅっ

「え？」

雄二はありすと翔子の手を握り返し、  
今はただ この瞬間を大切にしたいと思った。

「雄二」

「ん？」

「これとさっきのとは、話は別だからね？」  
「！……………」

「雄二？」

「…解った。この埋め合わせはする」

「ホント!？」

「行きたいところでも考えてろ」

「…雄二、嘘は絶対にダメ」

「約束だからね」

「解った解った。」

ぼそっ

全く…物好きだな…ふっ…」

呟く…。

2人の笑顔に挟まれて、雄二は静かに笑みを深めた。

雄二ボコられるの楽しみにしてた方すみません。期待を裏切っちゃいました。

レフェルさんは、どうでしょうか？

雄二こんな感じになりました。（苦笑）

ダメ出し等も、よろしくお願いします。

第二十一問 それぞれの放課後……。変な娘と会いました。『変』覚えていま

バカテスト

一般常識

【第十九問】

・問 以下の問いに答えなさい。

みなさんは、日本や一部の国々では、4月1日が会計年度の初日にあたるということをご存知ですか？

それと同じくして、入学式、入社式もありますよね？ 何故だと思えますか？

そこで問題です。

入学式、入社式などが4月に行われるのは何故か、答えなさい。

吉井明久の答え

・やりたかったから

「そんな感じ」

教師のコメント

気分！？ ちげえっ！！！！

どんな感じだあッ!?!?!

答えは、『政府機関や企業などでは、多くの様々な制度の変更や新設、発足などがこの日に行われるのですが、それに伴った勤務異動が行われる為』です。

ですから、新入学、新入社なども行われるというわけです。

4月というよりは、4月1日は、その様な大きな変化が起こる日なのです。

そのように昔から行われてきたことが一般化し、4月初旬には、保育園や幼稚園では入園式。小学校、中学校、高等学校、大学では入学式も行われ、桜の季節は卒業に続いて、新しい気分になりますね。

この入学式とは、学校への入学を許可し、祝う式典を指します。

また、多くの企業においては4月1日に入社式が行われているようです。

因みに、簡潔であろうとも、これに類似した答えは正解としてま

断じて気分などではありません。

土屋康太の答え

・何となく

「……世界の常識」

教師のコメント

何となくで社会はできてねえよ！

君だけの世界ですから！ 固有結界でも張るんですか？ 心象風景を具現化するって言うアレですね。

うん。解りました。

勝手にやってる

坂本雄二の答え

・それとなく

「ちよちよいつとできそうな気がするのは、俺だけか？」

教師のコメント

何となくと変わりませんから！

あなた達“だけ”ですね。

島田美波の答え

・知ってるわけがありません

「帰国子女ですから」

## 教師のコメント

素直に言えばいいというわけでもありません。

いつまで帰国子女なのでしょうか？ 島田さんは、まだこちらになれていないのでしょうか？

難しく感じるでしょうし、大変だと思いますが、文字を覚えるだけで変わりますし、身につけたことはあなたを裏切りません。勉強頑張ってください。

## 木下秀吉の答え

・学校や会社が決めた

「バレンタインは、お菓子会社がつつたイベントなので、同じ理由かと思つたのじゃ」

## 教師のコメント

です。

その考えは、強ち間違いではありません。

姫路瑞樹の答え

・4月……春の陽気に当てられて……

「ぽかぽかしていいです」

教師のコメント

春だからとか関係無いんですよ？

春だから………（遠い目）

山崎巧の答え

・大人の事情

「オレの為の、オレだけによる、オレが定めた情事」

教師のコメント

ある意味ね………

“事情”と“情事”は違いますからっ！ っっていうか、何をするつもりですか！？

最近知ったのですが、先生のツッコミに採点をしているとか………

…アノヒキマコトヲ思フシシキ、 哀トナル今日ノ頃。

第二十一問 それぞれの放課後……。変な娘と会いました。『変』覚えていま

瑞樹 side

「遅いです……吉井君も美波ちゃんも……はあ……」

「なんだか、ダメですね……」

「どうしたのですか？ こんなところで」

「あ、あの、友達を待ってまして……」

「来るんでしょうか？ その生徒は」

「え？ どうして……ですか？」

「姫路瑞樹さん、でしたね？」

「あ、はい」

「あなたは今回、体調不良の為にAクラスに入れなかった。悔しくありませんでしたか？」

「悔しいです……もちろん」

「けど、吉井君が助けてくれたから……」。

「でもどうして、そんなことを？」

「あなたの身体が弱いということを知っていて、この場所を選んだのではないのですか？」

「え？」

「それってどういっ……」

「あなた自身が進んでこの場所を選んだとは、考え辛い。………も

しかすると、この場所を待ち合わせに選んだ生徒が「美波ちゃんはその人じゃありませんッ！」　その美波って生徒は来ていないのではないかな？」

「そ、それは、ちよつと遅れているだけで……」

「では……その生徒は、今何をしているのだから？」

へ？ ……アレ？　そもそも、どうして私はこんなことをしようとするの？」

あ。美波ちゃんでした。吉井君をとっちめようって言ってました。止めた方がいいって言ったのに、押し切られました。ん？　その美波ちゃんは、今何をして……

「そう言えば……」

「？」

「先ほど見かけたな。美波と呼ばれている生徒が」

「え？」

じゃあどうしてここにいな……

「確か、呼んでいたのは……あの吉井明久だったと思うが……」

「……………え？」

え？　何ですか？　どうしてですか？　さっきまで名前で呼んでませんでしたよ？　あれ？　……………おかしいですよね？

「どこですか！？　どこで見ましたか！？！？」

「来たまえ。案内しよう」

「…はい」

もしかしたら、見間違いかもしれません。……………そうです…よね

…？

「ほら、あそこだ」

びくっ…

「あ…」

……どうして…

「…美、波…ちゃん…」

美波ちゃん、どうして？……

「アキ、聞いている？」

「聞いているよ……あ」

「ん？ どうしたの？」

「あ、いや……」

「何よ？ はっきり言いなさいよ」

……吉井……

「その……夕日が髪に反射して、美波が…綺麗だな……って。…あ、あはは……何言ってるんだろうね」

……明、久…君……

その会話を聞いている途中から足が崩れて、美波ちゃんと吉井君が通り過ぎるまで、扉の影から動けなくなりました……

「アキ。…このまま何処に行っちゃっ？」

遠く離れて、ほとんど聞こえなくなってた声……何故か、その言葉ははつきりと自分の耳に届きました……  
…私は……

ギリッ

歯を食い縛っているこの現状が、理解できずに、……

「うして……どうして？……どうして？……」

と、言葉を繰り返していました。  
…どうして……？……

美波 side

「アキ。…このまま何処が行っちゃう？」

「何言ってるんだよ、美波。姫路さん待たせてるんでしょ？」

「解ってるわよ。でも、この後瑞樹も誘って、帰り何処か寄ってくる？」

「それなら……っ、ついていくくらいなら……」

「またお金無いの？」

「あはは……そうなんだ」

全く。アキったら……

「仕方ないわね……今回はウチが……あれ？ キョロキョロ」

「ここで合ってるわよね…？」

「どうしたの、美波」

「うん…。瑞樹がいないのよ」

「え？ 先帰っちゃったのかな？」

「でも、一言くらい何か言っただけじゃない？ 瑞樹なら」

「僕達到着に時間がかかったし、姫路さん何か用事ができたのかもしれないよ？」

ん……………

「…そうね。あんまり遅くなるとダメなのかも。瑞樹のところなら、門限とかありそうだし」

「うん、確かに」

「言ってみたら、しっくりきたわ。じゃあ……………瑞樹には悪いけど、アキと寄り道でも……………」

「じゃあアキ」

「僕達も帰ろつか。寄り道は、また今度だね」

「え？」

「バカアキっ！ 違うわよ！ ……あれ？ アキは？」

「美波ー、置いてくよー？」

「ちよっ！ 待ちなさいよ！？」

もっつ！ こんなチャンス滅多にないのになあ……………

男の人に名前なんて呼ばれたのって、何時ぶりくらいかしら？……男の人って年齢でもないんですけどね……ああ、でも……20代30代だからといって、男性の魅力を感じるかといったら、そうでもないですよ……その人だからって言うのはあると思うんですけど……あの子は、

「先生？ 遠藤先生」

「ひあい！？」

「えっと……何かありましたか？」

「いえ！ 全くもってありません。大丈夫です。少し……か、考え事を……」

「そうですか……？ ……なら、いいんですけど……」

あー、驚きました……

パタパタ…… 少し顔が熱いですね……

あの子は、1年生の時から見てますけど……たまに大人びた？ 達観した顔……？ と言いますか……そんな……あ……うん……何処か悲しそうな顔に見えた気がしました。普段は、よく笑うのにつて……

あ。目が怖いんですけど、優しく包み込んでくれそうな笑顔もできるんですよ。初めは、かなり怖かったんですけど、よく見れば解るんですよ。怖そうな優しい人だって。目は、慣れても怖いんです。勿体ない……

あれ？ なんか……保護者みたいですね。……ふふっ

「ぼーっとして、大丈夫でしょうか？」

「先生？ 遠藤先生」

「ひあい!？」

「えっと……何かありました?」

「いえ! 全くもってありません。大丈夫です。少し……か、考え事を……」

「そうですか……? ……なら、いいんですけど……」

「考え事、ですか……赤い顔で?……まさか、先ほどのことを思い出して!？」

「今度は笑顔に……大丈夫……なんででしょうか……本当に。」

「それにしても、山崎君は何をか、考えているのですか! 全く。ご、誤解だというのは解りました。ですが、誤解を招くような行為をすること事態……いえ、そもそも何故あのようなことに?……それに保健室は、そ、そそういう事をする場所ではないというのに、山崎君はどうしていつもいつも……あ。山崎君で思い出しました。」

「……もう帰りましたよね……? 教師であり、大人である私が、お礼の言葉をかけることを忘れるなんて、弛たるんでいる証拠です!」

「しかし、どうやって返しましょうか……何かできることがあればいいのですが……体調管理のできなかった事事態! 私が弛たるんでいる証拠です!……弛たるんで……ぷにっ」

「……」

「ぷにぷにっ ……うん、大丈夫です。私は、決して弛たるんでない……」

「巧王子は、そのまま高橋先生を抱き上げて保健室に行

ったの』

『あー、それはね……2人が、お姫様抱っこしてたから』

「……………」

……………ジムでも通った方がいいかもしれません。……………運動量が足りなかったが為に体力が落ち込み、倒れてしまったのです。他意はありません。

『巧王子は、そのまま高橋先生を抱き上げて保健室に行ったの』

『あー、それはね……2人が、お姫様抱っこしてたから』

パタパタ！ リフレインしなくていいです！ 思わず頭上を払ってしまいました。全く……それもこれも……山崎巧君のせいです！ 全く……………

「「はあ……………え？」」

遠藤先生と同時に……………こっぴつ時はどうすれば……………

(「「あ！」「」)

チラッ と見てみると、またもや、遠藤先生と同じタイミングだったみたいです……

「「ふふっ……………」」

あの人ならノリで何とかできそうですが、私には笑って誤魔化すのは、難しいと思います。  
だというのに

（「「咄嗟に思い出したのが、山崎君の笑顔なんですよね」「」

巧 side

「へくちっ！ あー……風邪でもひいたか？」

んあ？……校門に生徒？……。可愛い……いや、綺麗な子やな。髪も綺麗や。二の腕くらいまであつてサラサラしてる。なんかええ匂いしそう……。で。美人ちゃんは、何を見とんねん？ 視線のっ先ー……、はー？ んー……。校舎……いや、どっかの教室か……？

新一年生 side

初日に大遅刻だよ……。あーあ。友達作ろうつて気合い入れてたのに、自己紹介逃したからなあ……。担任の先生が余計な気遣いさえしてなければ、次の日は安泰……。つでもムリっすねー……。悪目立ちしちゃうもん。Aクラスって環境なら、それを気にする子もいるだろうし……。点数でクラス分けて……絶対虐めの原因に一役買ってるとアタシは見た！

あっしは、虐められちゃう予定のか弱い女の子

……はあ……教室ってどの辺何だろ……

「おう。どないしたん？」

ん？ 誰？ くるっ！?!?!?!?

「イヤアツ！ 殺されるっ!？」

「おまえもかつ!! っていうか、往来でなんちゅーこと叫んどんねん! それにおまえ、ちょー失礼やからな? っーか、初対面の第一声がそれかい」

怖ッ! 怖ッ!! リーク!? うわうわっ…死神だ…死神ユークだっ! 誰かアタシにDeath noteをッ!! えっえっ!?! 心臓発作あ?

「あつ。死ぬかも。心臓バクバクいつてる バシッ! あ痛っ!」

うう……チョップされた。

「考えてること漏れとるわ! それと! 心臓バクバクしてんのは、自分が興奮してるからやろうが」

「あなたのドキドキが移ったんすね? 解ります」

「“自分”って、そういう意味合いじゃねえよ“自分”<sup>おまえ</sup>って意味や」

「そうですか……りんごあげるから、許してください」

両手を上に掲げて捧げるポーズ。

「まだ引き摺ってたんか! っーか誰が死神や、コラ」

びっ

「指差すな」

あ、腕を振りかぶって

「死神チヨッッ バシッ プ痛っ」

「アテレコもすな」  
「はい」

面白い人っ

「残念美人は、ここで何してん？」  
「美人！？」

鏡を見る度に、「もしかしたら……」って思ってたけど……

「やっぱりね。綺麗だと思った」  
“残念”って付けたろ。強調した方がよかったか？

ははっ うん。面白い人だな。なんかうじうじ悩んでたけど、元気でた。

「ふふっ ありがとう」

「噛み合ってたねえ！」

「あの……」

「今度はなんや？」

「何で声をかけたのかな……って」

「質問を質問で返すんかい。」

はあ……、まあええわ。んと、な

「うん」

「なんや寂しい顔してんなあー……って。そんだけ」

“そんだけ”……か……。いい人だな……。目付き悪いけど

「なあ、おま……キミはさ」

いきなり下ネタのわけ無いよね？ おまえ？ を、言い直して、  
“キミ”？

「おまえでも卵白でもありません。1年Aクラス、鳳おおとり翼つばねです」

「えっ？ ん？ …ああ！ いきなりやなホンマに」

「ええやないですかー」

「真似のつもりか？ “どすかー”なんてゆわんからな？」

「らじゃっす。…で、お名前は？」

「逸れに逸れたな……2・F山崎 巧。よろしくな？ 因みに、“

キミ”って卵の黄身ちゃうし、黄身やったら卵黄やし。ってツッコ

ミどこ満載の自己紹介どうも。後輩の“残念”美人ちゃん」

「本当に強調したよ、この先輩。」

あ。先輩もありがとうございます。ツッコミだけじゃなく、毒を

吐きつけての自己紹介……何だか……疼きますね……？」

「Mかよ！」

「その通り！ Mなのだ」

「認めるんかい！ つっか、さっきオレに聞いたってより、同意

求めたやる！？ アホかっ」

「その通り！」

「どれに対しての“その通り！”やねん。ワケ解らんわ」

「全部その通おおりッ……」

「全部かい……！ 力強く言い過ぎやっ」

「そん……な……」

「何愕然とした顔して膝折っとなねん！」

「その通りイッ……」

「何がや！？」

「その通オリ？」

「イントネーション変えたところで伝わらんぞ？」

「ぼそっ その通り……」

「力強く言い過ぎっての、今直すな！ おまえホンマめんどくさい

な…。

おまえの友達は、大変なんやろおないっつも。同情するわ」

友達、か……

「なんや？ また“その通り”か？」

……。

「……その通り、じゃない。…かな……」  
「ん？」

先輩が視線で話を促してくる。  
変に思われるだろうな…

「えっと……アタシ、さっき学校に着いて……初日だっというのに、友達作り損ねちゃって……あはは……」

「は？」って顔してる。

…先輩。傍から見たら、美少女が絡まれているようにしか見えな  
いっす。

「なあ。オレらは？」

え？ どういうこと？

「はい……？」

「お互いに自己紹介し合って、こんなアホみたいに喋ってんねんで  
？」

スツゴい笑顔。子供みたい。

「と、言いますと?」

「もう友達ちゃうん?」

「へ?」

聞き間違い? かな…?

「少なくとも、オレはそう思ってたけどな」

あ。聞き間違いじゃなかったんだ…えっと…その…どう…したらいいんだろう……

「鳳翼 「スツ…」

手? 握手? …だよな?……

「 よろしく 」

「よ、よ、ゆるしくお願いします! 山崎巧先びやいっ」

「ははっ、噛みまくりやな」

あっしもそう思います。

「学校に来て初めての友達が、オレで良かったな?」

「どうしてっすか?」

良かったと思ってますけど……自分で言っかなー。

「だって鳳って、変やる?」

失敬な。先輩には負けます。

「至って普通かと思えます」

「至って普通のめんどくさい人やる？ オレじゃなかったら、変な目で見られたりして、友達作りできひんところやったで？」

え〜〜？ じと〜と 見ちゃうアタシ。

「今既に、目の前の先輩に変な目で見られているんですよ〜」

「オレはいいねん。自身も変やから」

「あははっ ホント面白いですね」

「おまえに言われたないわ」

「日い沈んでまうで？」

「ホントっすねー。長々と話してしまっただみたいです。が、後悔はしていない！」

「されたら、傷つくわ！ ホンマに……。」

んじゃ。鳳、行こか」

「そんな！？ あっしはまだ、綺麗なままでいたいのに……」

「“あっし”っつーな。せめて“アタシ”にしるな？」

ワガママだなあ。

「アタシイー、まだ綺麗でいたいんだけどおー」

「ギャルっぽくゆーな、うぜえ。っーか、おまえと一緒にあったところで、そういう雰囲気なんか微塵も起こらんやろ」

手をぐーにして親指を突き立てて、そのままクルツと反転。親指

を真下にして、上下に揺らす。

「ぶー、booーっ」

先輩は、「はいはい」って言って、ゆっくりと歩き出した。  
たぶん、家まで送ってくれるんだろうな…  
…うん。

「ぼそっ 初めてが先輩で良かった…」

「ごはっ!? がはっ! おまえさ…、勘違いするからそういふ事は、声出すな」

何で咽たんだろ…?

「?……」

「いや、ええわ。なんでもあらへん」

微笑みながら、ぽんぽん っって軽く頭を叩いてきた。

「…ふ あ……」

いいな……友達って。友達って、みんなこんな感じなのかな?  
ふふっ

「何笑つとんねん」

「べっ、つにい〜」

まだ出会って数時間。信じ過ぎるのは、よくないけど……でも、優しさが伝わってくるんだよね!。彼女さんは、きつと幸せだよ。あ、そうだ。

「先輩、彼女さんは？」

「ノーコメント」

即答だ。答えてるのと変わりませんって。…あれ？ 怖いからって、みんな近づいてないとか……こんなに優しいのに。みんな見る目が無いんっすねー！。

ま、初対面で絶叫したアタシが言えたことじゃねーっすねー！。

ん〜……彼女かあ………とりあえず、友達以上恋人未満を目指そ。

「ほってくぞー」

「とか言っつてえ〜、待ってくれるとか………にくいつす」

「うっせ。バカ」

「にはは」

生まれて初めての友達が、山崎巧で良かった。

…うん。

…うん

明日から、学校楽しみだ

第二十一問 それぞれの放課後……。変な娘と会いました。『変』覚えていま

レフェルさん、ヒョウウガさん。  
感想ありがとうございます。

今回は巧メインじゃなく、色々な人の回でした。  
遠藤先生の名前が出てきて、新キャラの後輩ちゃんも登場。とりあ  
えず、2人共やつと出せた感でいっぱいです。  
また変なのが増えました。  
類は友を呼ぶ。ってやつです。  
あ。レフェルさんちのツイーンがいよいよ登場します。  
早速どうぞ。

あの後、巧はやつとのことで先生達から解放され（遠藤先生が話を  
をややこしくするような言動もあった）、夕焼けに染まり始めた校  
舎を歩く。

「あゝ……なんか……1日が長かった。むしろ永かつ」 ったん、  
ぺったん』 はいい？ 歌ア？」

何処からともなく、歌のようなものが聞こえてきた。新学年初日、  
部活動は行われていない。はずだった。  
歌は止むことなく、

『ぺったんぺったん。一人でがんばる。私は、がんばるのですです』  
』

巧の進行方向から聞こえた。

「切なっ！ 誰か手伝ってあげて！？ この歌、どう聴いても孤独やん！ 泣きそうやオレっ」

巧は、歩む足取りを早めた。競歩のオリンピック選手も唸る速さ。走ってんのと変わんねーよ！？ ってくらいの勢いで。

（「悲しみの源況を突き止める！ 大袈裟か？ ……この歌にこの歌詞…聴かせてやりてえよ。聴いた全員が全員同じ気持ちになるわっつと。 この先か…？」）

声源が近づき、 バツ と勢いよく角を曲がった。

「ちっさっ！！」

その存在を見て、巧は思わず声を上げる。

「ちっさくないです！ ツインは、これが普通で」

小さな少女？は、途中で言葉をのみこみ、わなわなと震え出した。何事かと、巧が声を発した。

「あ？」

「キヤアアッ！！！？」

迫力満点だったようだ。

「なんや！ どうした！ てか、どっから声出した！？」

今気にすることでもなかったが、急に叫ばれた為に、巧は少し錯乱してしまったみたいだ。

「ツ、ツインは食べても美味しくないんです！ ももも、もっと、ふくよかな方を食べてくださいいい！！」

相手の方が、もっとパニックのようだ。

「食べねえよ！？ 得体の知れない喋る生物を食いたいと思うヤツが、どんだけおんねん！」

「ガクガク…ぶるぶる……」

人形のような手の平サイズの喋る生物ごと、『ツイン』が、震えながらもきちんと、さらに小さな“羽”を動かし続けて“空中”で、じいーっと巧の目を下から瞳を潤ませて見上げていた。

ツインが突如 びつ と、巧に震える指でさした。

「はあ！？！？ 食わねえよ！！ 罪悪感でいっぱいになるわ！」

「……ホントですか？」

「ほんまや」

「ホントのホントですか？」

ツインは、巧の目の凶悪さから、未だ信じられず、再度聞き直す。

「…そうやって」

「ホントのホントのホントですか？」

「…何回も言わすなや」

「ホントのホントのホントのホントのホントですか？」

ツインが聞いた直後に、巧は意見を覆した。いい加減にしろ。と思つて、ちよつと巫山戯たつもりだったが……

「ああ、もつ！ マジ喰つちまうぞ!？」

「!?!?!? ……つ、」

巧の凶悪な目付きが災いし、ツインの我慢は決壊する。

ぽろっ とホントに小さな一滴が流れ落ちた。

「! ごめ「うわぁーん! 酷いです! 非道ですう! 食べないって言ったのにーっ!」 ほんまごめん!」

巧がツインを優しく包み込む。

割れものを扱うかのように小さな頭を指の腹で撫で、時折背中をとんとんとんと軽く叩き、傷（怖がらせ、泣かせたこと）を早く癒せるように、癒えるようにと、あやしていた。

「ううゝ…! ……ぐすん……」

暫くしてから少し落ち着いたのか、ツインが涙に濡れ真っ赤になつた瞳を上げた。

それに気づいた巧が声をかけた。

「ツインちゃんやっけ? ……」

できる限りの優しい声で。

「ぐすつ……はいです……」

「ほんまごめんな？……ちょっと冗談が過ぎたわ……ごめん……」

巧の思いが伝わったのだろう。ツインはぎゅっ　と巧の指を掴んだ。

「少し……驚いただけです……。えっと……」

「……うん」

「ゆ、許しますので、その……悲しい顔は、なしにしてください」

「あ……ごめん。解った。ありがとうな……」

今度は笑顔で、頭を撫でる。その気持ちもあってか、ツインはくすぐったそうに、けど心地よさそうに目を細めて、僅かの間、巧に身を委ねた。

「なあ、色々聞きたいんやけど……さ？……」

「すう……すう……」

「寝ちやつた？……」

泣き疲れたツインが目を覚めたのは、夕焼けのオレンジがさらに濃くなった後。…時間にして1時間と20分あとだった。

翼に会う前に　ツインと遭遇。色々聞き出そうとするも、寝ちやつた（笑）

この後、起きてからのバカな展開は次回！

レフェルさん、ツインが泣いちゃいました（苦笑）  
怖がりインをイメージして書いたら、泣きました（汗）

因みに、翼に言ってた「おまえもか！」って巧のツッコミは、一応  
ここです。

あとがき読んでなくても、言われなれてのツッコミとっていただ  
いても構いません。そこは、お任せ致します。

……あとがきの方が好きです。とか言われたらどうしょ。  
どちらにせよ、読んでいただけているだけで、幸せですが。

それでは、また。

第二十二問 たまには真面目にやるって。え？ 別人やって？ ま、色々あんな

バカテスト

保健体育

【第二十問】

・問 以下の問いに答えなさい。

女性のバストのサイズを現す単位に『カップ』があります。基準となるAカップの大きさを説明しなさい。

土屋康太の答え

・トップバストと、アンダーバストの差が10センチメートル。

「……世界の常識。……因みに、Bカップは」

教師のコメント

正解。保健体育の強さは神がかっていますね。

詳しく書きすぎです。どれだけびっしり書いているんですか！  
点描かと思いました。

吉井明久の答え

・島田美波

「あれはAです。触っていいと言われましたが、どうしていいか解りません。触診して確認してみてもいいのでしょうか？」

教師のコメント

コメントを控えます。

当人同士の問題です。

木下秀吉の答え

・木下秀吉

「わしは、Aカップじゃ」

教師のコメント

違います。

って、それ以前に男だから！

姫路瑞樹の答え

・アンダーとトップの差が60cm以上

「まだまだ成長期ですっ。これ以上ふくよかになりたくないです」

教師のコメント

Aカップじゃないです。それは。

!?!?!? 先生は何も見ませんでした。

坂本雄二の答え

・島美 坂本翔 子サイコ

「 、 「

教師のコメント

血っ!?!?!?

り。  
怪文書にしか見えません。というより、これ……怖いです。かな

島田美波の答え

・何それ？ 美味しいの？

「先生のご冥福を祈ってください」

教師のコメント

え？ いやいや……

！？ ちよつ！？ 生きてますから！ って、自分で祈るんですか！？！？

ん？ 予告状……？

山崎巧の答え

・解りません！……！

「誰かおっぱい測定させていただける女性募集中」

教師のコメント

力一杯言っな！

欲塗れかつ！？ おっぱいゆーな！

1年Aカップ 鳳翼の答え

・アタシはだいたい35〜46cmくらいです。

「2年Fクラスの山崎巧先輩は、どれくらいが好きでしょうか？  
最近おっぱい大きくなった気がするし……巧先輩に測ってもらい  
にいつてきます」

教師のコメント

幅広っ！ って聞いてませんというか、あなたは1年生っ！！  
しかも、Aクラスじゃなく、Aカップって何！？ そもそも30cm  
あればAカップじゃないし！  
ツッコミどころがあり過ぎでしょう！？

餌食！？！？ え？ 今？ 今？ 何時行くの？ え？ 何これ  
？ ツッコむところしかねえっ！！  
っーか、おっぱいってゆーなってだから！

誰かへールプっ！！



第二十二問 たまには真面目にやるって。え？ 別人やって？ ま、色々あんな

翌朝。今日は早よ目え覚めた。シャカシャカ……ぼーっとしながら  
ら歯あ磨く。

「むー……」

なんつつつか、忘れてる気がする。……思い出せん。って、  
ジジイかオレは。……あ。……ああ！

「わふうえほつは（わすれとつた）！」 ペツ！

グチュグチュグチュ、……ペツ！ おしっ！ 昨日の今日や。忘  
れた内に入れへん。相手は耄碌もろくしてる！

急いで準備をして、明久を起こす。

「んー……何……？」

「明久！ 早よせえ。学校行くぞ」

「え？ もうそんな時間？」

あー……。ま、いつか。布団をひっぺがして急かす。

「おう、そうや！ 急げ！ オレは用意できた。行くぞ」

「ちよつと！？ 僕はままだって！」

「カバンは玄関置いてる。あとは着替えて、トーストに目玉焼き挟  
んでるから、それ食え」

「あ、そうなんだ。……ありがとうね」

どきどき　寝惚け眼の明久つてだけでも可愛いのに、照れて頬を染めながら、もじもじとしてお礼をゆう様は、なんとも情欲をそそられ　ごはっ!?!　危ねえよ!　どうしたオレっ。

「やめろ、その照れ笑い!　新婚さんかっ」

「ちよっ!　何を言っているのさ!　僕を死なせる気だな!?!」

「何がじゃ」

「ごすつと“軽め”の拳骨を食らわす。

「があっ!?!　陥没するう!?!」

「あゝー!　バカやってないで行くぞ!?!」

校門に聳えるように肉塊がある。  
肉塊もとい鉄人に挨拶を。

「何だおまえら。随分と早「おはよーございます!　何だおまえら」とは、随分な言い種ですね?　西村京太郎先生」　サスペン  
スなんか書かんぞ?」

訝しげな目付きをしながら、余計なことを言いそうだった鉄人の言葉を遮る。

「巧?　今28号がなんか言ってたなかつた?」

明久のクセに鋭い。

「吉井！ 貴様、遠回しに鉄人だと言ったろ」

「いえ。バーベルの塔を制覇した猛者ですよね？ っていう話を」

ナイス！ 鉄人&明久。

「何故伸ばす音が入る」

「「え？ 先生のガチムキの肉体なら、きっとそうなんだと思ってました」」

「そこで山崎が入る必要が何処にある。∴それに、おまえ達が言っているのは、ただのバーベルだ」

鉄人は呆れるように溜め息をついた。何それ、傷つく。∴明久が。

「そうなんですか？ 僕はてつきりハーメルンの親戚のバーベルンかと。巧は？」

「オレはバーバリアンの身内のバーベリアルやと」

「俺は笛吹きやヴァイオリン弾きではないし、ベホマも使えん」

「「ただの肉じゃないですか」」

「とりあえず、ノーザンライトボムだ」

自分の右手を相手の股下に差し入れ、相手の体を地面と垂直になるように持ち上げ、そのまま垂直落下で相手の頭から叩きつけるプロレス技。 しろーとは、決して真似しないように！

っていつか、

「「とりあえずの威力がおかしいっ！！！！」」

ねえ、何なの？ バカなの？ この人。てか、人なの？？

「ふむ……では、柔術の寝技、上方四方固めを……」

明久を犠牲に、オレはノーザンライトボムを受ける！

「オレはノーザンライトボムを受けますんで、明久にお願いします」

……あら？ どっちもどっちな気も……いや、オレのがキツイか……？

「バカなっ！？ 友達を売るっていうのか！」

「おい、おまえ達」

ビクッ！

のそっ、と鉄人が踏み出した一步に恐れおのれ達。

「来るなアツ！ おぞましい！ その大胸筋を近づけんな！」

「そうだぞ、鉄人！ その危険な物体をしまうんだ」

「バカ共が。しまつてなかったら、露出狂だろうが」

「「え？ 違うの？」」

「茶道室にて、組み敷いてやる」

「止める気持ち悪い！ 想像しちまったらうが……！」

うぶっ！……あ。胃液。酸っぱ。

「こいつは危険過ぎる！ 巧、撤退だ！」  
「おう！！」

脱兎の如く。離脱！

「山崎！ 吉井！ 待たんか！！」

はあっ、はあっはっ……はあ……。撤いた……校門に戻らなきゃ  
なんない鉄人の負けやな。  
息を整えてから話す。

「明久、オレは職員室寄ってから行くから先行ってて」  
「え？ それなら待ってるよ？」  
「ありがたいけど、先勉強しとけ。回復テスト受けなあかんやろ」  
「あ。そうだったね。じゃあ悪いけど、先に行くね？」  
「おう」

明久を見送ってから学園長室へ。昨日の用事済ませとかなな！。

コン、コン。…暫く返事を待つ。老人の朝は早いから、いないな  
んて有り得ん。  
と、

「誰だい、こんな朝っぱらから」

小汚いシワ枯れた声が聞こえた。声だけじゃなく、一々感に障る言い方をするのが、ここの学園長。一応、念のため、ま、仕方なく、丁寧に挨拶をば。

「2年Fクラス、山崎巧です。お話があつて参りました」

「ほう…、ドアホかい。入んな」

「ちっ！…」

ヤバイヤバイ。舌打ちしてもうた。なおさら、柄悪く見られるわ。訂正訂正と。

「失礼致します。おはようございます。学園「気持ち悪いさね、

その笑顔。引つ込めな」 老

「何だい、学園老って！」

「先に失礼なこと言ったのは、どちら様でしょうか？ 今度、人中見舞いに2〜30発ほど贈らせていただきます」

「あんたの言っているのは、“陣中”じゃなく、“人中”だろう！ 人体の急所さね！ 何考えてんだい！」

不満でもあんのか？ 2〜30発じゃ足りんか？ もう2〜30発あげた方がいいか？

「不愉快なことを仰る。老衰会会長の武天漏死様むてんろうしともあるうお方が「あんたの方がよっぽど不愉快なこと言ってるじゃないかい！！」

そうか？ 歳をとると怒りっぽくなるっつーし。

「学園老。落ち着いてください。話が進みません」

あ、高橋先生居たんだ。変なのばかり見てもうたわ。勿体ない。っていうか、

「うむ、仕方ないね。…ん？ 高橋先生、あんた今」  
「それではどうぞ、山崎君」

うん。お茶目さんだ。真顔つても素敵やわ。

「あ、はい。 おはようございます」  
「おはようございます」

高橋先生だけが返してくれる。微笑がサイコーですわ、ほんま。おっと、いかんいかん。見惚れてる場合ちゃうわ。

「ではとりあえず、5つほど」  
「は？ 5つだって？」

素っ頓狂な声を上げてる学園長に見せてた手の指を、小指から順に2本折り曲げた。

「ええ。ですが、まずは3つだけ」  
「通るとでも？」

学園長の声が低くなったけど、ペースを崩すつもりはない。

「もちろん。あなたは優しいですから、少し甘えさせていただけこうかど。」

「学園長の恩恵を授かりたく」

恭しく御辞儀をしてみせた。挑発に見えたかもなあ？

「巫山戯てんのかい？」

ほら。

「まさか！ 本気も本気、超本気です。それに」

少し大袈裟なくらい。けど、大袈裟過ぎない戯けたお調子者“風”<sup>おど</sup>。でも目は真剣に、言葉にもそれを僅かに乗せて。

「何だい」

「Fクラスの成績向上の為。……引いては、学園の為にもなります。あのFクラスに勉強させてみせます」

「ほう……続けな」

少しは、興味を引けたか……  
指折り言つてく。

「まずは、昨日Fクラス代表坂本雄二から提出されている、Fクラス総員了承済みの意見書の承諾。承諾書付きでお願いしたい」

「いきなりかい？」

探るように尋ねてきた。あかん（ダメ）とは言わん（いわない）  
みたいやな。

「いえ。一月以上置いていただいて構いません。ただし、遅くとも学園祭の半月前をお願いします」

「先生を代えただけで、学力向上に繋がるのかい？」

「Fクラスを舐めておいでですよね？ 当然」  
「ま、そうさね」

半分本気で、か……

「アイツら…オレも含め、バカばかりですから、綺麗な担任の先生なら、いいところ見せようとかがんばります」

「山崎、吉井、坂本の3人が揃っている時点で想像に難くないね」

「でしょう？ とりあえず、その証拠と言いますか、証明をします」  
「どうやって？」

「昨日、Fクラスが試召戦争を行ったのをご存知ですか？」

「ああ。ずば抜けたバカ共だね」

「そうですね。ですが、中途半端な人間より、ずば抜けた人間の方が強いし凄いですよ？ “これから” 見ていてください。結果を出してみせますから」

「そいつは、楽しみだねえ」

ほんまに楽しそうに笑った。ガキかつーに。

「判断は、それからでも構いません」

「そうかい。で、担任候補は確か、高橋先生に遠藤先生だったね？」

「私、ですか？」

「ええ。生徒の信望が厚いのです」

「今乃先生はどうなんだい？」

「今乃先生も信望はありますが、あのマイペースさは、僅かばかりではありますが、不安になります」

「確かにねえ…」

そこで、すつ　と高橋先生が一步前に出てきた。

「学園長。すみませんが、私はAクラスの担任をしています。今さらFクラスなんかの担

「もうええよ」

「はい？」

「なんや……そうか。しょーもない人間の類いか。自分自身を含めた誰にでも平等で厳しくある人やと思っとなつたわ……ほんま、……がっかりや。」

「高橋先生はムリですので、遠藤先生にお願いしましょう」

「いえ。私は別に、ムリだというわけではありません」

「はあ……。ちやうつーに。」

「違いますよ」

「何がでしょうか？」

「オレが、高橋先生はムリやと思ったんや」

「え？」

何驚いた顔しとんねん。まだ解らんのかい。

「じゃあ聞くけど……何処のどいつが、見下してる輩に教えを請いたいと思っねん、ああ？」

「……………」

逡巡した後、息を呑んで目を一回り大きくさせてるってことは、気づいたってワケや。

「すぐ否定できんかったってことは、少なくとも思わす言っただってんじゃあなさそうやな？」

「…それ、は……」  
「オレが何言われようとお我慢するわ。ダチのことまで貶してんぢやうぞ」

すうーっ、ふう……。……ちよつとは落ち着いたか。  
深々と頭を下げて謝ってから、次の話へと移った。

「…失礼しました。  
残りの2つも話していきます」

顔を上げて正中線を正す。こんなもんか。っと。傍から見たら、ちよつ事務的ななんやろーな。有能な秘書然とした。というか、お嬢様に傳く、できる執事っつーか……。まあ、そんな感じ。

「次は、召喚獣に関して」  
「召喚獣だつて……？」  
「ええ。それも、ちよつとしたことで成績は向上されるはずです。Fクラスに限らず」

学園長が視線で先を促してくる。あいよ、仰せのままに。

「確か……学習意欲を高める為だとか、謳ってませんでした？」  
「それがどうしたつてんだい」  
「私達の学年が2年に上がった本日今現在までに、やめた生徒は一人もいませんでしたか？」

ビクッ。  
目を凝らさないと解らないほどでしたけど、僅かに反応を示した。  
という事は、つまり……

「ああ、結構です。まあ、この世で絶対だと言えるのは、数えるほどもありませんから。……………ですが、そのやめた理由の中に、召喚獣の見た目が発端だということがあったやも知れません。新一年生を見ていけば、そういったことが、これから起こらないとも限りませんよね？」

「どうだろうねえ…？」

学園長が顎に手を当てて少し首を捻って考える素振りを見せた。

「そうでした！」

それに対抗するかのように、私もわざとらしく手を打って話しました。いや、話す。

考えてる時まで喋り方遷ってるし。

「早速一年生の生徒と仲良くなったんですね。この一年間、その方に色々聞いていけば何か解るかもしれませんね」

「……………」

さすがに表情は出さなくなってきたか……………ま、ええよ。

「“鳳”という珍しい名字なので、学園長も知っているかもしれないですね」

「！」

なんや…？ 今度は明らかに反応した。鳳となんや関係あんのか？

「そんな名前の生徒がいた気もするねえ」

白を切るつもりか。鳳本人に一応聞いてから、最終手段として康

太に頼んで調べてもらおうか。

ブルツ。 …？ 何や、変な寒気が……

「どうしたんだい？」

「いえ。 話しが逸れました。 すみません。 話を戻しますね。」

中学から上がったばかりの数ヶ月は、精神的にと言いますか、意識が変わらずある生徒もいるでしょう。 中には、誹謗中傷やコンプレックスを突く人間もいるでしょうね。 私なんか、解りやすいでしょう？ 『目付きが悪い』それからのイメージで作られたであろう召喚獣を見れば、解りますよね。 服装などの装備によっては、より凶悪に見えます。 私も目は、コンプレックスです。 が、こういう性格が幸いしているわけです。

逆に内気であったり、悲観的であったりすれば、相乗効果で尚更に虐められる要素となり得ると思いませんか？

「そこまで考えが至らなかつたようだ。 すまないね」

「謝るのならば、そういった理由によってやめていった生徒にすべきです。 今からでも動いてくださいね？」

「ああ。 約束しよう」

軽く頭を下げて続ける。

「そういったことを減らす為にも、試験召喚獣の装備を長期間固定ではなく、ある程度制限はかけても、装備の変更、アレンジをできるようにするとか、試召戦争開始30分とか1時間前に武器選択ができるとか、それによる戦略の幅が広がるでしょうし」

「んー… そうだねえ……」

「けれど、手持ちの武器でどうやって切り抜けるかってのも、おもしろいかと…… あ。 そうです。 今思いついたんですけど、各戦争ごとに特別ルールを設けてもおもしろいかもれません」

「特別ルール？」

「さつきも言いました、“武器選択ができる”とか“腕輪使用の禁止”とか“制限時間あり”とか“かなり厳しい制限を設けて、実は抜け道あながある”っていうのとか色々です。如何でしょうか？」

なんか、めっちゃ一気に喋ってもうたわ……ま。人生何事も、楽しまな損やしな。

「…ふむ……おもしろい。積極的に、取り入れることを考慮に入れるよ」

「ありがとうございます」

「いいよ。むしろ、こっちがお礼を言いたいくらいさ」

ほーかほーか。じゃあこのまま……

「もう一つは、Fクラスの教室について。言われなくとも、修繕されるでしょうが、忠告を。と思ひまして」

「忠告？ 何言ってるんだい。あんた達が勉強しないから」

「では？」

「では。学習環境が著しく貶められたまま過ごせ。と？」

「そうさ」

すぐさま返事が返ってきた。ふうん。……そ。

「割れたガラス窓から吹く風が未だ寒く、吹きさらしの状況で風邪をひくな、と？ さらに言わせて頂ければ、転けた拍子に突き刺さってしまったも構わないということですよな？」

「そんなことは言っていないさね。それと……嫌なら勉強をしな」

ちっ！

「それとこれとは別モノでしょうか？ はあ……見下げ果てた人間です。砂利を咀嚼したかのような心地になります。」

ああ、学園長。あなたが砂利を咀嚼した時どのような気持ちになると思えますか？」

「さあ？ やったことないから解らないね」

考えるように促したろおが。うぜえ。

「そうですね。考えるのも嫌になるほど最悪です。まあ、本音は置いておいて」

「あんたねえ……」

「現担任の福原先生は、軽い力で物を破壊できる怪力だと思いますか？」

「いいや」

「はい。そう思いますよね？……その福原先生が、手を打ったくらいのパンっていう音を鳴らして、教卓を粉碎した昨日のHRの映像があるんですけど……見られます？」

渋い顔になった。畳み掛けるか。

「それに、チヨークも置いていないってことは、授業する気は無いっていう意思表示ですよ？ それで勉強頑張れ？ はっ、嘗めてんの？」

おっと、口調が戻った。

「万歩……いや、億歩譲って、それはいいとしましょう。……けれども……」

教室が写った写真の束を学園長の目の前に置く。

「特にこれ。… 何だかお解りになります？」  
「……………」

その一枚だけを見れば、ただの黒一色で焼き増しを失敗ったのか、レンズに蓋をして撮ったようにしか見えない。

「解ってらっしゃいますよね？ …… Fクラスの教室の畳です。ほら、よく見てください。これ。ぐじゅぐじゅに腐蝕して腐り落ちてるだけでなく、カビの胞子が飛び散っていました。これは由々しき事態です」

おいおい。何黙つとんねん。理解不能って言わんよなア？

「カビの胞子が肺や外耳道、鼻腔など体の内部に感染 深在性感染することがあります。これらの一連のカビによる感染症をアスペルギルス症あるいはカビ性肺炎と言います。最も一般的な型はアレルギー性気管支肺アスペルギルス症、アスペルギルス腫、侵入性アスペルギルス症です。」

なかでも肺に感染したものは、肺アスペルギルス症と呼ばれ、“治療が困難”であるため医学上重要とされています。肺アスペルギルス症には肺結核患者の肺に生じた空洞内で菌塊を形成するアスペルギローマや、白血病末期などに肺実質内で菌糸が増殖するアスペルギルス肺炎が含まれます。これだけでも、どれだけ危険か伝わりますね？」

「そうだね」  
「それだけでも、十分に危険なのですが……この他、本菌は皮膚に感染し、表在性感染することもあります。多くの場合これらアスペルギルスによる感染は日和見感染で、健常者が発病することは比較的少ないと言われていますが、ゼロではありません。それに加え、

数年前まで病弱だった姫路瑞樹は、日和見感染する可能性が極めて高い。

そして、感染した場合。免疫力が低下している際に起こりやすいことから症状の進行は速く、全身に感染するため症状は多岐に渡ります。治療が遅れた場合の“致死性は高い”本当に危険なモノなんです。

具体例を上げますと……呼吸器系への感染では、『血性痰』、『喘息』、『肺炎』、『副鼻腔炎』などで、血管内に進入した場合、『口蓋または歯肉の潰瘍化』、『血栓』や『出血性壊死』などが起こり得ります。

皮膚感染は手術創に発生することが殆どで、急速な組織壊死を起こし、中枢神経系感染は『脳膿瘍』を呈し、全身播種性感染の部分症です。　ということなんですが……これでもまだ、“最低限”勉強できる環境にあると思われませんか？」

「……解ったよ。考えさせてもらうよ」

“考える”だ？　ちやうやろ、それ。

「欲しい答えではありませんね。証拠映像、音声、写真、今までFクラスに入ったことのある生徒達に先ほどのことを全て見せ、話したうえで、言質をとって、それらを持って弁護士と共に教育委員会のところへ行って、法廷にも立ちましようか？」

「っー！」

危険性を話せば、怒るやろっし、打倒する為に協力を仰げば、きっと8割方乗るやろ。

「あー、そうそう。学費が変わらないというのに、格差が大き過ぎるっということ、Aクラスの写真や映像等も既にあり、持参するつもりでいます。」

ここでは敢えて被害者と呼ばせていただきます。その被害者の「両親にも話をします。当然。」

被害者の方々に賠償金を払っていただけますでしょうか？ ああ。その為にも、やはり法廷に立つべきですよ？ 教師の方々にも、自主的に協力を仰ぎます。それだけの危険性があつたFクラスの状態を黙認していたままでいるのならば、あなたも裁かれるのではありませんか？ と

「脅すつてのかい」

「人聞きの悪い。こつちの身が危険に曝されているのに、黙っている方がおかしいですよ。」

ま、“窮鼠猫を噛む”。と言いますからね  
「噛んだのは、頸動脈さね」

おいおい。何溜め息ついとんねん。溜め息つきたいのは、こつちやわ。

「回答は、本日の放課後。私の帰宅するまでの間としましょう」

遠回しに聞きにいかんって言つとく。

「はあ……了解したよ。“こちらから”伺わせていただくよ」

何だかんだで頭は、いいんやな。

「それでは、これでお暇やすみさせていただきます」

「山崎、一ついいかい？」

「はい。何でしょう？」

「このシステム。どう思った」

「試験召喚システムについて。ですか？」

「そつれ」

「んー……試験的に導入した割りには、おざなりと言いますか……もう少し此方側の立場になって考えていただいてもよかったのでは？」と思わないでもありませんでした。あの教室を見た今は、欠片も考えなかったあなた方を軽蔑すらしてしまいそうです。

「……けれど、これから変えていけばいいですね」

「まだ軽蔑してないってのかい。お人好しだね、あんた」

ほっとけ。

「これからのFクラスの活躍。……是非とも、ご照覧あれ」

優雅に礼をして、頭を垂れる。

「失礼致します」

「ああ、楽しみにしているよ」

「……………」

ボタン。ドアを閉めてから一息。

「あー、しんどっ。肩こるわあ」

目は口ほどにものを言うってな。氣い抜かれへんわ、ほんま。  
一夜漬けにしちゃーやれた方やる。

「全く。喰えない男さね。ガキだつていうのに、達観し過ぎだよ。今はまだ、ガキの時分を楽しむ時だろうに……頼りにならないだね。大人ってのはどうも……」

「ぼそっ …… 矮小な人間ですね、私は……」

落ち込み過ぎてやしないかい……？ 全く。

「そうさね…… けどそれ以上に真っ直ぐなのさ。歪んだ大人と違って、ね」

「そう…… ですね……」

あたしからすりゃあ……どっちも真っ直ぐで、まだまだガキだよ。軽くフォローはしてやったよ。後は、当人同士の問題さね。……ふう……

「若人はいいねえ」

第二十二問 たまには真面目にやるって。え？ 別人やって？ ま、色々あんな

Dr・クロさん、レフェルさん、ヒョウガさん感想ありがとうございます。  
います。

Dr・クロさんは、お声かけどうもです。

キャラ制作まとまってません。悪しからず。

何となくのイメージとか少しずつ出していますので、話し方どうしよう？とか迷っていますけど、プロットは、とりあえず本編に入れて通常通り営業してから、オリエピも考えていけたらな。と考えております。

さて。今回は、山崎巧クソ真面目です。たぶん……

裏側の話は、バカです（笑）  
どぞ。

早朝の校舎内に少女達の声が木霊する。

「わっぷ……あれ？ 誰もいないよお？」

「無理に移動したので、おかしな時間についてたのかもしれないです」

「むっ」と唸って考え込んだ、小さな小さな小さな小さな小さな、  
人形のような小さな美少女？ ツインと

「そんなに小さくないですう!!!」  
「? どーしたの?」

地の文にツッコミを入れたツインに（他人から見たら、急に叫び出したように見える）、疑問を投げ掛ける大きな（身長的な意味合い）巨大な（身体的な意味合い）美少女、相沢綾菜。

「何だか小さいと言われた気がしたのです。6回も」

「ねえねえ、ツインちゃん。ほとんど誰もいないよ?」

「朝早いですから。きつと、先生かクラブ活動の朝練でしか来ないのです」

ツインの話を聞いているのかいないのか。綾菜は、別の事に気を取られて話をして、ツインも気になる素振りも見せず、返事する。

「そっかー。たつくんいないかな?」

「巧くんは、まだいないかと…? あ!」

ツインが指差した先。そこに巧がいた。丁度学園長室に入るところだった。

「いたあ たつくん」

「! 待ってください!!」

抱きつきモードに入った綾菜は聞く耳をもたず、駆け出した。

「ちよ、ちよっと待ってくだ、さい! こんなに朝早くから態々学園長室に行くからには理由が…」

ツインは、綾菜を押し留める為、襟首を掴んで懸命に進行方向とは逆に引つ張ってはいるが速度を落とすに留まり、綾菜の直進を阻めずに学園長室の前に着いてしまう。

「絶対入っちゃダメですよ！」

「？ 何で？」

「ツイン達は、言ってみれば不法侵入なのです。ですから」

「あ。たつくんがものすごく真剣に話してる」

「ツインも聞きます」

真面目な巧が気になり、ツインは流され、耳を敬そはだてる。

「ホントです」

「でもツインちゃん。どうしよっか？」

「むう、そうですね……」

扉の前で唸って佇むツイン達に、元気な声がかかった。

「おはようございます！」

「！ ぼそっ 隠れなきゃですっ」

「おはよー」

「あれ？」

声をかけてきた生徒は、首を傾げた後、キョロキョロ したした。何かを探しているようだ。

「どーしたの？ 探し物？」

「あ、はい。何というか……さっき「」に「」に「」まで小さくないです！ それに女の子です……」

「……」

「しまったあっ!?!」という声にならない叫びが、ツインの表情だけで伝わってくる。

「アタシは、1年Aクラスの鳳 翼って言います。あなたは何ちゃん?」

「ほえ? ……ツイン……です」

「ツインちゃんか」

「わたしは相沢綾菜。2年Fクラスだよ」

「相沢先輩っすね。よろしくっお願いしまっす」

「綾菜でいーよ?」

「はい! 綾菜先輩! あっしも翼でいーです」

「翼ちゃん」

「ふあっ」

翼は、綾菜にぎゅっ と抱きしめられる。

「翼ちゃんはまた違った抱き心地だあ」と言っつて、頬擦りしていた。

そこにツインが、戸惑いながら翼に声をかけた。

「えとえつと……ツインを見て驚かないんですか?」

「そりゃ、もちろん驚いたけど、それ以上に食べたくなくなるくらい可愛いよね」

「ひあっ!?! ツインは美味しくないです! 何で巧くんと同じ!」  
と言っつんですかあ!」

「にはは。…ん? 巧くん?」

ツインの言葉に翼は首を傾げてオウム返しに尋ねた。

「そうです! 巧くんです! 巧くんのあの目で“喰っちゃまっつぞ”」

なんて、怖すぎでした!」

「もしかして山崎巧先輩…ですか?」

「もしかしなくても、山崎巧くんです」

「おおっ!?! そうなんですか!?! あっし、巧先輩の友達なんです」

翼の言葉に綾菜とツインは即座に反応を返す。

「わたし達もだよー」

「ですう」

巧と一度しか面識がなく、且つ、泣かされたツインと、巧とほぼ面識のない綾菜の2人は、自信満々に答えた。

「そっかー。だから、食べたくなったのかも」

「うん、うん」と頷いて、翼は理解したと話を進める。

「え? どういうことですか?」

「友達だけじゃ収まらなくなったんですよ」

「友達以上…? 親友ですか?」

ツインは顎に指を当て、首を傾げる。

それに対し翼は、指を左右に揺らして答えた。

「ちゅちゅちゅ。甘い。甘いっすよ。ミルクセーキより甘いっす」

「そんなに、ですか?」

「はい。食べたいって言うのは、……………」

「言うのは?……………」

勿体ぶって間を開けた翼に、ツインは食い付いて空中にて身を乗り出す。

そして翼から返ってきた答えは

「性的な意味合いです！」

飛んだ答えでした。ツインも顔を真っ赤にして慌てふためく。

「そそそそんなっ！？ ツイン心の準備があつ！？」

ツインは巧と一度しか面識がありません。

「間違いありません！ 巧先輩は、そういう人です！ ロリコンなんです！！」

力強く力説していますが、翼も巧と一度しか面識がありません。

「ロリコンさんなんだあゝ。……それって何??？」

ロリコンという言葉が気に入ったのか、何度となく綾菜は呟く。  
ツッコミのいないままに会話は続けられ、巧は強制的にロリコン確定。

『ぺったんぺったんお胸がないです　ぺったんこです』

『ロリコンさん　ロリコンさん』

『あっ、ダメです　こんなところで、先輩っ！　拒めなあい  
アタシ』

ツイン、綾菜、翼が自作の歌を即興で歌いながら空き教室へ移動していた頃、巧は震えたとか。

第二十三問 明久と主に姫路の固有空間。オレ？ …… いないけど何か？（前書き

バカテスト

現代国語

【第二十一問】

・問 以下の問いに答えなさい。

『押してもだめなら引いてみな』このことわざの意味を答えなさい。

土屋康太の答え

・綱引き

「…… oh yes! oh yes!」

教師のコメント

引き合う競技……って違う……!!

しかも鼻血！ 何を考えて……見たことあるんですか？……とりあえず、生徒指導室にてお待ちしています。

では答えですが、目的に対してがむしやらに押し進めるだけではダメ。原理や状況を見極めて、場合によっては引く事も必要。という様な意味です。  
難しく考えることもありませんね。

吉井明久の答え

・ライバル

「『貴様にやれるとでも?』

『次は本気でやるさ』

『ふつ。やってみな!!』」

教師のコメント

ライバル???

掛け合いじゃないから!

坂本雄二の答え

・悪足掻き

「あいつが引く様なたまか?」

教師のコメント

せめて他の言い方はなかったんでしょうか？

……自身に關したことでしたか……

霧島翔子の答え

・と、見せかけて押す。

「…引かない、めげない、逃さない」

教師のコメント

フェイントじゃないですっ！

捕縛三原則！?!?!

島田美波の答え

・尚更に気がつかない現実

「引いて反応するくらいなら、こんな苦労しないわよ」

教師のコメント

? それって……

強引にいき過ぎると逆にダメかと思えます。アプローチの仕方を変えてみてはいかがでしょうか? 頑張ってくださいね。

木下秀吉の答え

・そんな事できん!

「押す……? ワシは、男じゃ。だと言つのに……あーっ! ワシはどうすればっ」

教師のコメント

え?

……正直、即答しかねます。ですが、後悔のない様に……木下秀吉君の気持ちを大切に。よく考えてから決断してください。胸を張って答えられるくらい。

理解ある人間もいるんだってこと忘れないでください。先生でよければ、相談に乗りますから。

山崎巧の答え

・つーか、凝視

「逆に相手側が引く」

教師のコメント

見るんですか!?

あれ? 文字が滲んで……

この解答题紙を見られた、とある先生が心配していました。相談してみてもいかがでしょうか? 親身になって相談に乗ってくれると思います。例えば英語の先生とか、学年主任の先生とか……ね。

工藤愛子の答え

・それから誘惑?

「スカートをゆっくりゆっくりと捲り上げていく感じで……」

教師のコメント

残念。色々と。

そのまま頭の方までずらして被ればいいと思います。むしろ被ってください。あなたの行動に期待しています。

姫路瑞樹の答え

・誘います

「とりあえず、ノーブラで」

教師のコメント

はい???

てよっ!?!?!? 姫路さん? どうしました! Fクラスの影響

...? いや.....工藤さんといったらもっと.....

結論。この学園がおかしい。

第二十三問 明久と主に姫路の固有空間。オレ？ …… いないけど何か？

明久 side

「たっただいまー」

まるで我が家のように声をかけて教室に入る。実際設備は畳と卓袱台なので、教室というよりは我が家の方がしっくりくるかもしれない。

「よ、吉井君!？」

「あれ？ 姫路さん？」

誰もいないと思った教室には姫路さんがいた。随分と早いよね…？

382

「どどどどどうしたんですか？」

なにやら慌てている様子。何だろう？

姫路さんが座っている席(?)を見る。卓袱台の上には可愛らしい便箋と封筒が置いてあった。

「あ、あのっ、これはっ」

何をしているんだろう。まるでラブレターに使うような便箋とラブレターに使うような封筒を用意しているみたいだけど、使い道が解らない。全く。

『現実を見る。明らかにラブレターだ』

お前は、僕の中の悪魔！？ 黙れっ、僕の中の悪魔！ 僕はそんな虚言に騙されはしない！ だいたい、そこまで言うからにはこれがラブレターだという証拠はあるのか！！ あるって言うのなら見せてみる！！！！

「これはですね、そのっ」

「うんうん。解ってる。大丈夫だよ」

「えっと ふあっ」

コテン、と卓袱台に躓いて転ける姫路さん。

その拍子に隠そうとしていた手紙が僕の前に飛んできて、その一文が目に入る。

《あなたのことが好きです》

「……………」

「……………これ以上ない物的証拠だと思うが」

「……………」

「解つただろう？ これが現実だよ」

「……………」

『さ、諦めて認めようぜ？』

飛んできた手紙を綺麗にたたみ、姫路さんに返してあげる。姫路さんを気遣うように笑顔で一言。

「変わった不幸の手紙だね」

『コイツ、認めない気だ!』

何を言っただこの悪魔め! お前の言葉はいつも僕を不幸にする  
っ! もう騙されないからな!

「あ、あの、それはそれで凄く困る勘違いなんですけど……」

「そんなことしないで、言ってくれたら僕が直接手を下してあげるのに。ああ大丈夫。スタンガンなら隣のクラスの三木君に借りてくるから」

「吉井君。これは不幸の手紙じゃないですから」

「嘘だ! それは不幸の手紙だ! 実際に僕はこんなにも不幸な気分になっているじゃないか!」

「吉井君」

子供のように手を振り回していると、きゅっと手ん握られる感触が。見てみると、姫路さんが暴れる僕を抑えようとして手を握ってくれていた。

「落ち着いて下さい。そんなに暴れると身体をぶつけて怪我をしちゃいますよ?」

諭すような彼女の言葉。

心が落ち着き、望まない現実が僕の中に浸透し始める。

「……仕方ない。現実を認めよう……」

がっくりと膝をつく僕。なんだろう。こんな敗北感は昨日ぶりく

らいだ。

宛名って誰なんだろう？ まさか、腐れ外道の雄二？ 気になる

……

「その手紙、相手はウチのクラスだったり」

「…はい。クラスメイトです」

顔を真っ赤にしながらも迷いなく答える姫路さん。

これで確定した。僕は罪人を裁く必要がある。いったい誰なんだ？ その罪深き人間は。いや…人にも劣る畜生だ。

「……そっか。でも、そいつのどこがいいの？ そりゃ確かに、外見は（みんな）それなりだとは思うけど」

「あ、いえ。外見じゃなくて、あっ、もちろん外見も好きですけど！」

「憎いつ！ その男が心底憎い！」

「そう、ですか……？」

「うん。外見に自信のない僕には羨ましくて」

「え？ どうしてですか！？ とっても格好良いですよ！ 私の友達も結構騒いでいましたし！」

「え？ ホント？」

自分で言うのもなんだけど、なんて酔狂な友達なんだ。

「はい。よく解らないですけど、坂本君や山崎君達という姿を見ては『逞しい坂本君や男らしい山崎君と男の娘の木下君に、寡黙っ子土屋君、美少年の吉井君が歩いているのって絵になるよね』ってよく言っていました」

「ステキな良い友達だね。仲良くしてあげてね」

「『やっぱり吉井君と木下君と土屋君が受けなのかな？ いやいや。』

「へタレ攻めも……」とか

「とか!?!」

「『掘つたり掘られ』」姫路さん!」 はい?」

「前言撤回。その友達とは距離をおこう。ううん。むしろ、絶縁にしようね? それに、姫路さんにはまだちょっと早いと思う」

僕が雄二と……おえつ。ムツツリー二は、………無い。え? 有りとか思っていないよ? 秀吉は、問題無い。

僕が巧と………あれ? 別に大丈夫 ごすつ! 何を考えた! 僕っ!? 大丈夫ってなんだよ!!! 近親相姦はダメだって、いつも姉さんに……って、それ以前の問題だよ!

「吉井…君?……」

「あー、それにしても、外見もつてことは、中身が良いの?」

「あ、えーつと………はい……。優しくて、明るくて、いつも楽しそうで………私の憧れなんです」

ムツツリー二は無い、暗い。雄二は論外。じゃあ、秀吉?………は、優しいけど………どうだろ? 巧? でも、巧の目を見て昨日泣きそうだったもんね………美波みたく………M、とか?

「吉井君、あの、鼻血出てます」

「うおっ!?!」

何たる失態。これじゃ、ムツツリー二と同じに思われちゃうよ!

『素直になりなさい。……真実を話せば救われます』

僕の中の天使! そうだよな、嘘ついたら嫌われるよね。

「いや、これはその……姫路さんのスタイルがいいから」

「って違う！ 違わないけど……ていうか、何を考えているんだ！  
？ 僕のバカッ！！」

「」

「！ 笑った？ 何か良い事でもあったのかな？」

「……あ、ありがとうございます」

「あはは……ど、どう致しまして」

でも、姫路さん。凄く真剣だった。茶化すなんてできないや。応援しなきゃな……

「その手紙」

「は、はい」

「良い返事が貰えるといいね」

僕には、とても邪魔なんてできるワケがない。そこまで好きになった相手なら、同じクラスメイトとして何かできればいいけど。

「はいっ！」

嬉しそうに笑う姫路さんは本当に“妖艶”で、魅力的だ。僕は姫路さんの相手を心の底から羨ましいと思った。

ふふっ　吉井君はそういう事に興味がないわけじゃないんです  
ね。私の身体にちゃんと反応していましたし……“武器”は使って  
こそ価値があるんですから。  
うふふっ……

ヒヨウガさん、レフェルさん、断空我さん、Dr. クロさん。感想  
ありがとうございます。

今回は件のラブレター。原作では、Dクラス戦後の放課後でしたが、  
一身上の都合により……… というか私情により、こんなタイミングで  
す。

変にならないようにと考慮しましたが、大丈夫でしたでしょうか？  
できるだけ自然に。早朝のクラスにて。

一番悩んだのは、バカテストだと記しておきます（笑）

ダダダダダダ、ダダ、ダ （ド クエ呪いの音）

「雄二？ こんな時間にメール？」

from: 雄二

件名: 命運を祈る

本文: それ以外何も言えねえ。

「どついうこつちゃ？」

チャツチャツチャー、チャーチャーチャ、チャチャーチャ、チャ  
チャーチャー （マリオブザーズゲームオーバー音）

「康太も？ なんや、いつたい……」

f r o m : 康太

件名：……万事を尽くせ

本文：……すまない。とりあえず、謝らせてくれ。

「???? はあ？ ワケ解らんわ」

授業前に、空き教室で翼と別れて綾菜とツインの二人は、もう一人と、時間的に誰も立っていない校門にて合流。

そして時刻は9時を過ぎた頃……。巧の家の近くの公園に、3人の美少女が話し合っていた。

「とりあえず、家に行きましようか」

水色の髪の140cmない美少女、新条ありす。その肩で同意の返事を返すさらに小さな美“小”女ツイン。

「ですね その間にお片付けとかお料理とかしましよう」

自分のペースで話す、長身の美少女というよりは、童顔の美女。  
相沢綾菜。

「わたし、お風呂の掃除とお風呂も沸かすね？」

「今から沸かしちゃダメよ？帰ってくる時間に合わせて。ね？」

「はい」

「もし帰って来て、寝る様子がなくて、手伝おうとしたら、どうするんです？」

ツインの言葉に、ありすは パツ と、何処からともなくハリゼンを出して奮う。

「頭に一発入れた後足を払って、」

ありすは チラツ とツインの目を見て、理解したツインは頷き答え、

「ツインが首を引くです！」

二人で綾菜を見つめる。綾菜は首を傾げながらも答えた。

「わたし？ ん……たつくんを抱きしめる」

「その粹よ」

「ですねー……アレ？ なんか趣旨が変わっている様な……ま、大丈夫ですね」

「へっくち！ あー」

「どしたの、巧。風邪？」

「なんやろ……急に寒気が……」

「気をつけてね？ 季節の変わり目は、風邪ひきやすいから」

「おう。解った」

巧の悪寒は帰るまで続いた。

……………帰ってから？ とりあえず、巧が「風邪ちゃうのに、寝るか！ つーか、これから遊ぶし、明日も学こ くしゅん」と言いながらくしゃみをしたって事。どうなったのかは、皆様の想像にお任せ致します。

ただ一つ言えるのは、……………華麗な連撃でした。

第二十四問 妖魔から逃げろっ！ 辿り着いた先は、ぺったんこのエロ保健医っ

バカテスト

現代国語

【第二十二問】

・問 以下の問いに答えなさい。

『少年探偵団』や『怪人二十面相』を世に送り出した、日本の小説家の名前を答えなさい。

姫路瑞樹の答え

・エドガー・アラン・プアー

「うーん、ワトソン君。です」

教師のコメント

をいつ！

それは、アーサー・コナン・ドイルのシャーロックホームズのセリフですから。

今回は“江戸川 乱歩”が答えです。

彼は大正から昭和にかけて活躍した、推理小説を得意とした小説家で、アメリカの文豪、エドガー・アラン・ポーの名にちなんだペンネームです。日本推理作家協会初代理事長であることも有名ですね。

因みに、エドガー・アラン・ポーは『黒猫』、初の推理小説と言われる『モルグ街の殺人』で有名ですね。

坂本雄二の答え

・江戸川コナン

「犯人はお前だ」

教師のコメント

登場人物ですね……。ええ、登場人物です。

違います。あえてあなただと言っておきます。

木下秀吉の答え

・青山剛

「犯人はお主じゃ」

教師のコメント

打ち合わせでもしていたんですか？

あー、犯人です。犯人ですよー。

島田美波の答え

・金田 一

「かねだはじめ」

教師のコメント

残念ながら違います。

そこはせめて、“きんだいち”にしませんか？

土屋康太の答え

・団鬼六

「……全ページ読破できたことが無い」

## 教師のコメント

執筆するSM小説のイメージから「ハードポルノ作家」と呼ばれることが少なくない作家さんです。なぜ知っているのかは聞きませ  
ん。

ですが、危機管理能力が欠如しているように思えます。

あなた……………死にますよ？

## 吉井明久の答え

### ・越後屋

「越後屋氏の作品『義姉の体』を巧に進めて、これを姉さんに写メにて近況報告。自分の身の安全を確保」

## 教師のコメント

? 何が……………

おふうっ!?! 落ち着け! まだ間に合うからっ!!

## 山崎巧の答え

・雑破業さん

「おねティーから入ったあとちよこシス、脚本だとM y s e l f ;  
Y o u r s e l f とか恋姫」

教師のコメント

おねティーね……

永遠の17歳です      おいおい。

鳳翼の答え

・綺羅光

「凌辱、隷属系が多いですねえ。あと、姉弟もの女教師もの……  
基本的に、年上が多いかもですね……巧先輩に教えるか迷ってます。  
げへへっ。こんなのでしょうか、兄貴。ってな感じで。  
進める予定のタイトルは『姉と女教師（2001・10。フラン  
ス書院文庫。以下略）』『姉と弟・相姦伝説』『女教師M』『女教  
師凌辱の時間割』『狙われた女教師』『女教師・私生活』『女教師・  
恥辱の旋律』『女教師雌奴隷』いっぱいありますねー。  
後輩系がなかったっす。この中の最有力候補は『姉と女教師』で  
決まりっすね」

教師のコメント

何時から読んでいたとか聞きません。むしろ聞けません。

絶対に進めないでくださいね？

そのタイトルは狙ってんかと……。あと、自分にマイナスですよね？ どちらかと言うと。

それと、山崎君の回りは鳳さんが思っている以上に誘惑がいつぱいで……。あー……。詳しくは言えませんが、回りの人の方が誘発される可能性がありますので。くれぐれも、くれぐれも……。あれ？ 遠藤先生、それは何ですか？ 山崎君からの没収品？ 高橋先生も？ なんで隠すんですか？？ 女教師？ その単語が出てくるのは、おかしいですよ！？ 体調悪いから保健室へ行く？ 二人揃って？ いやいやいやいやいやいや！ 悪化しますよ！ なら、山崎君を連れて昇天？ 待て待て待て。今“行く”の言い方おかしかったる。

え？ ベッドがあるから大丈夫？ 余計に不安だわ！！

保健医が止めてくれる？ 今日来てんですかよ！？ あのエロ

保健医が止める？ 抑止どころか連鎖反応起こすわっ！

ああっ！ も、うっ！！ 誰か夢だつて言っただけ？！？

真実はいつも一つ！

けど、誰も知らない。

この会話は、恐らくフィクションであり、この会話を聞いた者はおらず、コメントは致し兼ねます。

最後に。

ば、  
“火の無いところに煙は立たぬ”という言葉を覚えていただけ  
幸いです。

第二十四問 妖魔から逃げろっ！ 辿り着いた先は、べったんこのエロ保健医っ

がらっ と戸が開いた。をっ？ もうそんな時間か。

「ん？ やけに早いじゃないか、お前ら」

「おはよー、雄二」

「おっす」

「ああ、おはよう」

「そうそう。雄二、設備交換っていつするの？」

「その事だが、Dクラスとは設備を交換しない」

「ええっ！？ なんでさ！」

「忘れたのか？ 俺達の目標はあくまでもAクラスのはずだろう？」

「でもそれなら、なんで目標をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

「少しは自分で考えろ。そんなだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

惜しい。惜しいな、雄二。

「なっ！ そんな中途半端にリアルな嘘をつかないでよ！」

「ちやうで、雄二。小学生や」

「……は？」

「……」

雄二の視線に耐えきれなくなつて、目え反らしたらあかんやろ、  
明久。

「まさか……」

ほら、バレた。

「……人違いです」

「お前、本当に言われたことがあるのか……？」

「み、見ないで！ そんな目で僕を見ないで……！」

雄二。頬がひくついてんぞ？

「……り、理由はだな……、Bクラスの室外機の破壊 +、  
クラスのみんなを慣れさせる為だとか、他のクラスにプレッシャー  
を与える為だとか、自信をつけて士気を上げる為だとかな」

めっちゃ日和つたな。

「ふ、ふーん……。それじゃ、Dクラスの設備を手に入れなかったの  
は？」

吃ってんで、アキ君？

「さっきも言ったが、目標はあくまでもAクラスだからな。Dクラ  
スの設備を手に入れることで一部の奴らが満足して試召戦争に反対  
し始めるかも知れないだろう？ そうならない為と、不満によるモ  
チベーションを維持する為だ」

「そっか。でさ……巧は何も反応しないわけ？」

「屋上で似た話聞いたし、雄二が考えも無しに無駄なことするとも  
思えへんからな」

「言わなくても伝わってたんだ……目と目で通じ合っつてやつだね」

「「おぞましい事を言うなッ……！」」

「なんじゃお主らは。朝から騒がしいのう」

「おはよー、秀吉」

「おっす」

「おは。ひいーちゃん」

「おはようじゃ。巧、お主だけ言っていることが理解できないんじやが、ワシの気のせいか？」

「気のせい気のせい。ただ、可愛い呼び方が無いんかなあって」

「そっすよね……よっしいは？」

「明久！？ お主もかッ」

「それなら男でもいるだろうが。明久もそれに当て嵌まるしな」

雄二も参加。いえーい。

「……俺は、ひいーちゃんに一票」

「俺もだ」

気がつけば側にいた康太と須川会長も賛成意見。

『俺もひいーちゃんにッ』

『俺はよっしいに！』

いつの間にか、Fクラスのバカ共大集合、大合唱。

「大変です！ 木下君の取り合いに吉井君まで参加しています！」

姫路……大変っつーか、そりゃ変態や。

「姫路おっす」

「お、おおっすです！」

「おはよ、姫路さん。それと、ムリしなくていいよ?」

「い、いえ。大丈夫です」

「それより、お前らはいいいのか?」

「は?」

「何が?」

「昨日の今日だぞ? 忘れたってか?」

なんや? …………… ああ。

「工藤愛子の写真か」

「まあ、それもなんだが…………」

霧島の怒りを買って解ってても、抑えられない欲望。仕方ないわ。三大欲求やもん。

「回りくどいよ?…………… 糞雄二」

「解り辛えよ? 御力ス様」

「地獄を見るバカ共」

なんやねん、いったい…………

「アキッ!」

「あ、美波。おはよ」

「う、うん。…おはよ」

なんだ、この甘酸っぱいベリーな空間。モテ野郎に鉄槌を!

FFF団に号令をかけようとしたところで、島田が冥府への切符切った。

「って、そうじゃなくて! 一時間目のテスト…………… 数学よ?」

「だから？」

「……………監督の先生、船越先生だって……………」

「ぼ、僕、頭痛が痛くって……………なんだか身体の半身が痺れて上手く呼吸できないんだ。と思って家で早退するから遺言をお願い」

「言ってることめっちゃくちゃだし、ホントだったらあんたの症状やバ過ぎでしょうが。あと、遺言じゃなく伝言頼みなさい」

「あはは。明久はおもいなあ。……………あれ、オレもなんか腹が腹痛でベッドの保健室は薬が休んで飲むからありがとうな」

「腹以外に腹痛って言わねえよ。ったく、巧も落ち着け。ワケ解らんぞ」

「巧のありがとうは何に対してじゃ？」

秀吉 side

「……………明久は？」

「アキなら屋上に……………」

屋上から早退するのかの……………無謀な……………

「何で自分から逃げ道を無くしてんだ？ お、巧もいねえ。巧は？」

「山崎君なら……………」

「あ……………ッ……………!?……………」

「……………」

『おい、船越先生と遠藤先生が召喚獣で戦ってるぞ』

「……………は……………?……………」

『立会人は今乃先生だった』  
『マジバトル?』

「…見に行くか」

廊下に出てみると、本当に遠藤先生が召喚獣を呼び出していたの  
じゃ。

「……………」

「船越先生！ あなた何を考えているんですか！？ 山崎君が嫌が  
つているのを無理やりに……………」

「昨日の放送聞かなかったの？ 彼らは私のモノ…くふふ……………」

「はあ………… ぼそつ 後顧の憂いを断っておこうかしら…？ 仕方  
ないもの」

「……………え?」「……………」

「船越先生悪いんですけど、さっさと果ててくださいね?」

「何を言うかと思えば……………」

「山崎君を、あの保健医のところにおいておけないのよ！ 何かさ  
れてたらどうしてくれるの?」

(「『本音キタアーっ!?!?』」)

「保健医って何か問題が…?」

「さあ？」

「あら？ 船越先生を熱い眼差しで見てる男性が……」  
「どこ！？」

あーあ……そこまでするもんなののお……巧……が原因なのじ  
やろおが。

ズキッ

……。……気のせいじゃ……

「倒したっ！ 今乃先生！ get up！」

「！ ビックリだよな？ 起きてたから心配なく」

「なら、フィールドをしまってくださいね？」

「いい笑顔じゃな」

「それに動じない今乃先生もな」

「……気づかないだけかも……あ」

「こくり、こくり……」

「仕方ないですね？ ……go！」

「こくり……」

今乃先生が船を漕いで頭が下がった瞬間に、高速で遠藤先生の召喚獣が通過した……恐ろしいのお……

「あ、寝てないです」

「今確かに、先生寝てましたよね？」

「昨日は」

「今は寝てたのね……」

「島田よ、ワシらはツツコまなくてもよいのではないの？」

「きつと、延々と話が進まなくなるわよ？」

「最悪だな……康太、何とかしろ」

「パシャパシャパシャっ ……今は忙しい」

「……………そうか。因みにどんなだ？」

「……………船を漕いで頭が下がった瞬間の一枚。胸ちら一枚頂こう」

「……………毎度あり。今日の今乃先生の着こなしは最高。ブラが見えないほど服とのフィット感が素晴らしい。…はち切れないか、心配」

「本音は？」

「……………はち切れるのを所望」

「死ぬわよ？ あんた」

「……………本望」

胸が無いとダメかのお……………

「……………そんなことは無い」

「え？ まさ、か……………口に……………出しておったか……………？」

「……………録音した。バッチリ」

なんじゃと!？

「それを消すのじゃ！ お主を消さなくてはならなくなる！」

「……………売ったりしない。一つの武器。因みに、明久と巧は大喜びだと思っ」

ぽっ ……にゃ!？ 違っのじゃ！ 今のはおかしいのじゃあ

あっ!?!?!？

「……………そうそう。…島田と秀吉に朗報」

「何？」

「なんじゃ？」

「……………島田や秀吉くらいの胸のサイズで数多くの男性を魅了してきた、色っぽい女性が存在する」

「誰よ（じゃ）!?!」

食い付かん方がおかしいじゃろ。……………たぶん。

「……………件の保健医。この学校の教師や生徒だけではなく、他校は勿論、外出する度にそこら中の男性から何かしらアプローチを受けている。それが面倒くさくて学校にはあまり来ないようだが、」  
「今日は来ているのね……………ご教授願おうかしらね」

わ、ワシも、芝居の糧になるじゃろうし、べ、勉強じゃなっ!  
うん。

「……………その先生は、気になる人物がいる為に全て断っているらしい」  
島田が何か考えが至ったらしいの。たぶん、ワシと同じじゃろおな。

「ねえ、その気になる人物ってもしかして……………」  
「ふむ、確かにの……………それならあの慌て様も納得できるぞい」  
「……………!?! ……それは盲点だった。これ以上巧の身勝手な行動を看過することはできない」

複雑じゃなあ……………色々……………

巧 side

はあっはあっ……………がらっ

「あら？ 巧クン、いらつしゃい」

「はあっ…んっ、お久しぶりです、っね……」

「うぶっ　いきなり荒い息して……センセえで抜きに来たのかなん？」

「ちよっ、違っ！？」

「ぎーんねん。あ、そうそう。昨日保健室に来たのに、挨拶してくれなかったわよね？ 咲ちゃんの写真撮るのに夢中でこっちには見向きもしなかったもんねえ？」

「いや、あ、……すみません」

保健医の泉　雫（いずみ　しずく）先生。髪の毛は肩の辺りまであり、クセっ毛で所々ではねてる。霞み草の小さな花があしらわれたヘアピンを付けてて、色っぽさとのギャップもスゴい。てか、エロい。

島田や秀吉に負けない絶壁やけど、ムダに色っぽい女性。この人以上の色気は存在せんのちゃう？　って感じるくらいヤバイ。見るだけで息子さんが痛いくらいにおつきします。異常な量のフェロモンが出てんじゃね？

むちむちした肉厚のお尻か…？　うすーい水色、（たまに薄いピンク）の腿あたりまでの長さの白衣のせいでミニスカートが隠れて色々想像を掻き立てるからか？　っーか、その白衣にある横のスリットは、いんの（いるの）？　脚が見えてんよ。そして今日はその生足に注目！　普段は黒タイツ、網タイツがほとんど。やけどもどっちも中々に魅力的なんや。

ああ。あの白衣のボタンを外したいと、常思っている男なんか巨万といるやろな。と思う今日この頃。

そおいやあ、オレと康太以外に通いつめてるやつ見たことないわ。なんでやる？　こんなエロ綺麗やのに。

あ、ヤベっ。

「ふふっ……おはよ　　ッ」

栗先生が屈んで、顔を近づけて挨拶。

「どこに挨拶しとんねん！　っーか、突くな」

「どっ、って……息子さんにご挨拶を」

「息子さんゆーな」

「じゃあ、ペ　ス」

「ごほつがはっ！？！？」

咽たわ！　てか、保健体育用語やけど、ギリギリアウトじゃね？！？

「そ・れ・に……何もしてないのにおっきくしたのは、誰かしらねえ？」

「うっ……これは、朝の生理現象で……」

「仕方なかった？　入って来た時はなんともなかったのに？」

「何で見てんの！？」

「男が女の胸見るのと一緒」

「ごくり　生唾を飲み込む。……。胸は無いつてのに、胸元に目がいっちゃうのは、男の性が、栗先生だから……触りてええっ……」

「んふ」

「あ」

目が合った。ヤバっ…バレたか…？

「うをつ!?!」

ギシッ いつの間にか後退ってたらしく、背中から心地いい場所へ倒れ込む。何をどうすればここまで良い香りがベッドからするのか? とか、栗先生の舌なめずりの意味合いは!? とか、優しくなぞられる指使いに ソクソク するとか、導かれた手によって掴まされたヒップやらけえーっ…掴んだ時の声が艶っぽいとか、全部引っ括めて

怖い。

どっつても良くなるくらい怖い。

ギョロリ という言葉がしつくりきて、オレの頬が引きつるくらい  
のギョロ目。ギョロ目。ギョロ目。ギョロ目。……マジメー  
……

「やくまさーきくうん？」

はいっ。いい笑顔ですね。はい。

遠藤先生、殺意を感じられるのは気のせいですかねー……そんな  
嫌われてんか、オレ。自重せいよお？ ワレ。ってことか？

「巧？ ずいぶんと楽しそうじゃなア？ ずいぶんと楽しそうじゃ  
なア？」

「秀吉怖えよ！ 繰り返さんでもええわ！」

「大事なことじゃからの」

「秀吉はモテるやろうが。FFF団みたく僻むなって」

「……ワシにも解らんのじゃ……」

「ん？ 何？」

「な、なんでもないのじゃ、なんでも」

「そ。やったらええけど」

「センセえを無視なんて酷くない？ こおくんなくつついてる  
のに」

もにゅっ、もにゅっ

何やらひじょーに柔らかいものが……あれ？ さっきより成長  
したかな？ ……はは……

「やん 巧クンのえっち」

「ちよっ、これは……」

「巧クン？ ……ふうん……」

「遠藤先生、えっと、これは雫先生が」

「栗先生……へえ……」

いやあ……保健室の室温が急激に下がってった気がするわ……  
今日は機嫌が悪くないか？　なんで今日に限って……あ。

「生理か」

能面みたく無表情なってます？　遠藤先生。……未だベッドの上で密着してるからか？　話してんのに、何をイチャついとんねん！　ってことやろうな……

「私が山崎くんに英語で断罪します」

断罪ッ！？！？

「待つて待つて！？　どついう事！？！？」

「承認します」

「自分で！？」

承認？　……まさか……

「試獣召喚！<sup>サモ</sup>！」

んな、アホな！

「……巧。俺もお前を許さない。許せない」  
「康太！」

あゝ、もう！　次から次へと。





第二十四問 妖魔から逃げろっ！ 辿り着いた先は、ぺったんこのエロ保健医っ

ヒョウガさん、レフェルさん、感想ありがとうございます。

今回、新キャラ登場です。また変なのが増えました。扱いきれるか不安です（苦笑）

バカテストもいつも以上に暴走。調べて、ビックリ。ぴったりなタイトル群が……妹系とかもあつたけど、後輩系はゲームタイトルにはあつた気がする……あ。決して面倒くさくなつたとかじゃないですよ？ ホントですよお？

まあ、少しでも皆様が楽しんでいただきましたら、幸いです。

下は、保健の先生とある生徒です。解ると思いますが、某美少女です（笑）

最後まで楽しんで行ってくださいね？

保健医     s i d e

コン、コン

本日一人目のお客様わあ？

「失礼しまーす」

「あら、可愛いらしい娘ね」

「よく言われまっす」

「ふふっ。否定しないんだ？」

「え？ 否定しようがないですよ？ 事実ですもん」

「言っわね」

「センセこそ綺麗ですね」

「でしょ？ 困るわよホントに」

はあ……冗談じゃなく、本気で。バカみたいに男共が群がって来るのよ？ 見せ物じゃないわよ。フフ…。ま、悪い気はしなかったわよ？ 初めのうちは。でも今はもう面倒くさいの。んもう。勘弁してほしいわ。

「センセえ、大変なんつすねえ」

「他人事かしら？ 貴女だってそうなんじゃない？」

「ん、それなりっつて感じかなあ」

「そ？ ならいいんだけどね。で。結局貴女は何をしに、セン

セえの所まで来たのかなん？」

「色々見回つてるところです。新人なもんで」

「新人生ね。友達は出来た？」

「モチですたい！ クラスに馴染みました共！ クラシアンです共

！」

「わけが解らないから」

「よく言われますか？」

「そうね」

お互いに。つてところね。

「あ。そうそう。スツゴく仲良くなった先輩もいるんっす」

「そうなの？ 良かったわねん」

早速後輩に手を出す先輩がいるの？ 男？ 女？

「けど、死ぬほどに目付きが凶悪っすけどねー」

男だわ。そもそも、この学園に来た初日でそこまで到らしめる存在は

「ああ……」

巧クンしかいないわね。初めて見た時は、犯されるか殺されるかと思ったものね。ヤクザとかイタリアンマフィアかと思ったもの。確かに凶悪だわ。

「その生徒のこと、もうちょい聞かせてくれるかしらん？」

「はいっす。なんていうか、見た目に反して優しく、気の使える紳士です。チンピラですけど」

「そうね。一言余計だけど仕方ないわねえ？ 極道でしょうし」

「あと、その不良先輩は、ツンデレだと思われ」

「うん、確かにそんな節があるかもしれないわ。可愛いごろつきね」

～電話に～誰もでんわ　電話に誰も～でんわ～　そして、  
今夜が山あ～だあ

何？

「あ、迎えが来たみたいっす」

「今のつて、貴女の　「携帯の着メロメロっす」………残念って  
言われない？」

「昨日その組員の先輩に言われたばかりですな」

「そう」

巧クン、解ってるわねえ。

「じゃ、お邪魔しましたあ。センセ、また」  
「はいはい。またねえ？ 子猫ちゃん」

結構、巧クンに食い付いてるわねえ？ クスッ。面白いわ、ホン  
ト。

ドタドタドタドタ！

「今日は、千客万来ねえ」

「はあっはあっ……………」 がらっ

「はあっ、はっ……………はあっはっ……………」

噂をすれば……………

「あら？ 巧クン、いらっしやい」

ふふっ 期待を裏切らない人。全く。…飽きないわねえ、貴男  
と関わっていると。

日曜日なんか、遠足前日の子供みたいに浮き足だってるものね。  
土日なのに、学校で会ったり、遠くへ出かけた時に会った時なん  
かは、年甲斐もなく、乙女のようにドキドキわくわくしてたかしら。  
もう一年が経ったのねえ…早いわ。あと2年で何ができるかしら  
？ とりあえずは、名簿は使わずに本人とアド交換かしらねん  
一週間と言わず、2〜3日よ。

さあ。今日も楽しませて頂戴。

あなた



第二十五問 おろ？ 康太がえらいカッコいいんやけど……

……え？

なん

バカテスト

世界地理

【第二十三問】

・問 以下の問いに答えなさい。

アメリカ合衆国にある都市の名前を5つ答えなさい。

土屋康太の答え

- ・シアトル
- ・シカゴ
- ・サンタフェ
- ・スノーマウンズ
- ・勉強部屋

「……ラブ……じゃない、愛のホテル」

教師のコメント

上から3問正解です。あとは……勉強部屋？

何を言っているんだ、君はっ！

姫路瑞樹の答え

- ・入浴
- ・死空通る
- ・酸腐乱死す娘
- ・死籃
- ・出吐露意図

「ふう……。むずかしかったdeath」

教師のコメント

x！ ばーつ、バツですっ！ 英綴りかカタカナにしてください。  
ニューヨーク、シアトル、サンフランシスコ、シカゴ、デトロイト。  
ト。正解は正解でしたが、なぜに……。

島田美波の答え

- ・ススキノ
- ・ヨシワラ
- ・フクハラ
- ・ナカス
- ・縄

「大阪は、トビタに遊廓街が当時の建物ごと残ってるみたいですよ」

#### 教師のコメント

地理じゃなく日本史になってませんか？ ってか、縄って。縄って……島田さんを？……

あー……日本語上達してますね。偏ってはいますが。

#### 吉井明久の答え

- ・ガイルビル
- ・ナギ・スプリングフィールド
- ・レントン教授
- ・イマジンサクラメント
- ・デモンベイン

「自分なりの覚え方でやっただんですが……」

#### 教師のコメント

惜しい。確かに似ています。が、文字数増やすのは余計に解らなくなるのでは？

吉井君が書こうとしたのは、恐らく、ナッシュビル、スプリングフィールド、レントン、サクラメント、デモイン。の5つだと思

います。

アニメ、マンガ、ラノベ、ゲーム等で覚えやすくしようとしたんですね。その調子で頑張ってください。

坂井（坂本）雄二の答え

- ・マイアヒー
- ・マイアハー
- ・マイアヒー
- ・マイア
- ・ハツハー

「地理の本を忘れた為、今日はミステス」

教師のコメント

だからって諦めんのかよ！ もっと頑張れよ！ もっと熱くなれよ！！

気持ちを“修”める為の役を“造”ってみた。

せめて一つはマイアミって書いてください。

木下秀吉の答え

- ・オレの故郷はコロラドだ
- ・コロラドなのだ
- ・コロラドだ
- ・ニューヨーク
- ・シカゴ

「ワシにとってニューヨークとシカゴは外せんな」

#### 教師のコメント

まあ、にしましょうか。

芝居に関する事でしょうかね。

#### 山崎巧の答え

- ・ユーコン
- ・ロリ
- ・リトル
- ・ポリス
- ・オワタ

「ユーコン基地でイーニアとかタリサとがんばんねん。警察に捕まって終わったっていう」

#### 教師のコメント

ユーコンとポリスは正解。ローリー、リトルロック、オタワ。あと書こうとしたのは、これでしょうが……わざと間違えたようにも見えますよ。文章の為に身を削る。  
……………スゴくないからね？

### 鳳翼の答え

- ・オクラホマミキサー
- ・ハリケーンミキサー
- ・珠瀬の王姫さん
- ・フードプロセッサ
- ・ローマ

「ローマは綺麗で安くていいらしいので、行ってみたいと思います。場所は……鶯谷だったかな？」

### 教師のコメント

ミキサーは余計だし、必殺技とか人名とか調理器具とか何でだよ！の前に、学年ちげえ！！  
それよりローマって…

…鶯谷？ ……またラブホかよ！！！！



第二十五問 おろ？ 康太がえらいカッコいいんやけど…

…え？ なん

「……………」

ああ……………あかん。声出すのもめんどくさい。

「うあー……………づがれだー」

解らんでもないが言葉にすな。余計疲れる。

明久も勉強机という名の卓袱台に突っ伏してた。オレはノートと教科書敷いて万全やけど。

とりあえず四教科が終わったばかり。最凶と最狂と最恐と最嬌と最低共による最悪な催しものは終わった。…余計疲れたわボケカス。元凶の一人を恨みがましく見やる。

428

「うむ。疲れたのう」

「…他人事か？ てめえ」

「何の事やらさっぱりじゃ」

「はあ……………っ…ええよ、めんどくさい」

いつの間に席に着いたんか、秀吉が答えてた。…あー……………今はなんもしたない…

「うば〜」

「今日はだらけ方が半端無いの」

「いつもだらけとるみたいやんけ」

「……………間違いない事実」

「あー。おまえがムツツリで変態ってのと一緒か」

「そうだね」

「……ブンブン」

明久もそれに同意するが、康太は必死で否定してた。

「よし、昼飯食いに行くぞ！ 今日味噌ラーメンとナポリタンとカツ丼と五目炒飯にすっかな」

アホかコイツは。麺類が2食とご飯物が2食。……結論。雄二は頭がやられ気味やから、それを補うカロリーも半端無いものなやな。あ、いや。それとも、ガチやからそっち方面で体力を……？  
！ やべえっ…震えが止まんねえ…！

「ん？ 山崎、大丈夫？」

「おう。ちよつと寒気がしただけやから」

「そ？ ならいいけど。」

「そうそう。さっき少し聞いたんだけど、吉井達は食堂に行くの？」

「うん、そうだよ」

島田、挙動不審やぞ。

「あのね！ あー…あれじゃない？ 天気もいいし、ね？」

「ああ、島田か。どうした？」

「ウチ、の…その…」

雄二が促したけど、まだ踏ん切りがつかんみたいやな。昨日のこ  
とやろ？ 忘れとったけど。

「……………コクコク」

ムツツリさんがすでに興奮しています。あ、オレも準備しとこ。  
康太と目が合った。

「……………グッ」  
「グッ」

爽やかな笑顔でサムズアップ

「みんな学食かあ。じゃ、僕も今日は贅沢にハニーウォーター（巧の食材）あたりを」

人のもの使って贅沢か？

「明久、あかんとは言わん。せめて声かける。問題起こされたら玲さんにメールせなあかんやろ？」

「すみませんでしたっ！！！！」

土下座慣れしてやがる、コイツ…………。

「つか、なんか家出んの時間かかってるおもた。」

「あ、あの。皆さん…………」

立ち上がったところで、もじもじしたもじつ娘姫路に声をかけられた。

「うん？ あ、姫路さん。一緒に学食行く？」

「あ、いえ。え、えっと…………、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の…………」

姫路、さらに上目遣いをしてくるなんて…………誘ってんのか？

「おお、もしか弁当かの？」

「は、はいっ。もし迷惑じゃなかったらどうぞっ」

違ったみたいやな…。

姫路は身体の後ろに隠していたバッグを出してきた。

明久も笑顔で答える。

「迷惑なもんか！ ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？ 良かったあ〜」

ぼやちゃん とした感じ？ 柔らかく含羞<sup>はにか</sup>む姫路と、ムスッ

とした島田。気づけ明久！。

「むー……っ。瑞樹って、意外と積極的なのね……。

ウ、ウチも作ってきたから！」

「美波もありがとう」

「う、うん。アキの為に頑張ったよ……」

熱いねー。日焼け止め塗らんと。

「え？」

「な、何でもない何でも！」

「そっ？」

そこで引くなつてえ、明久。

「……………はあ……………」

ほら、島田ちよつと落ち込んでるやん。島田もそこまで来たんやったら、行けばええのに。

「それでは、せつかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう」

「せやな」

どっちみち、こんなところで食やあ、美味いもんも不味なる。

「それもそうだな」

「ん？ 雄二、その袋は？」

「ああ、飲み物だ。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

おー、雄二がな……。明日は月でも降るか？

「じゃ、行く」「…雄二」「ごあつ!？」

雄二、驚き過ぎぢやうか？ 飛び退く様は忍びのようやぞ。いや、  
武士<sup>もののふ</sup>って感じかも。

「やつほー 康太君。みんなもこんにちは。ほら、優子も」

「あたしも？ ……はあゝ。解ったわよ」

木下姉。そんな嫌そうにすんなって。

「おまえらどうしたん？」

「ああ。代表が坂も じゃなかった、屋上でご飯食べたって言うから、みんなで行こうってことになってさ」

工藤の言葉を聞いて、雄二が焦った声をあげる。

「おまえ、また俺に盗聴器仕掛けたろ!？」

盗聴器って……。霧島も変な娘なんやね。

「……何の事が解らない。“偶々”、私達も屋上で食べる事になったというだけ」

「凄い偶然もあつたもんだな？」

「…うん。これは、雄二の子供を産むしかない」  
「んなわけあるかあつ!!！」

超一、飛躍したな。明久と姫路と島田なんか、もう先行ってるし。アキはちゃんと姫路と島田の鞆持ってる、さすがやな。つーか、康太。階段の最下段から島田達のパンチラとんな。

お、戻って来た。

「とりあえず屋上へ上がりましょう。立ち話もなんだしね」  
「そーやな」

木下姉が、前に出て話始めた。仕切り属性があんねんな。  
雄二らは……。まだ言い合いしとる。

「ん？ ……今誰か見とつた…？」

「置いてくよお。山崎巧君」

なに故にフルネーム…。てか、もう既に皆さん階段昇ってらっしゃる。

「今行く」

島田や天然姫路だけじゃなく、木下姉もか。霧島は雄二で手一杯やし…でも、もうちょい扱い使えるかと思ってるんけどな。

「あ」

工藤は軽く手でスカート押さえてる。そらあ、パンツ見えるからなあ、階段なんて。…実は工藤が一番常識人？ 他の奴らも見習えよー？

屋上に通じるドアを開けて 僅かに息を飲んだ。

春風に包まれて笑みを零す友人達に思わず携帯のカメラで写真を撮った。仲間に入っていないオレは、 って、前もおんなじ事あったで。

「デジャヴユ？」

「何言ってるのよ、あなたは」

木下姉、わざわざすまんな。

「おお？ ちゃんと下唇噛んだで？ キノちゃん」

「！ そんな事聞いてないし、キノちゃんって呼ばれた事もないんだけど…。何より初対面よね？」

何に驚いたん？

「まあな。それより、早よあっち行って自己紹介でもしよか」

「誰を待ってたかと思ってるのよ…」

「ぐうぐうっ お腹空いた」

米噛み押さえて…：…なんかあつたん？

ま、てきとーに座ろ。

「天気良くて何よりじゃ」

「そうですねー」

眠なるな…ぽかぽか陽気にオレは負ける…、康太もうとうとし  
てるわ。おお、こんなとこにいいものが。

「木下姉、膝枕」

「何だよ!？」

「康太もしてもらい？」

「コクリ…助かる」

「人の話を聞きなさい!」

眠いの…何を怒ってん…：…ああ。康太も理解したらしい。こ  
ういう事はちゃんと言ったらんとな。

「「パンツは覗かないから」

「当たり前よ!!!」

怒鳴、ら、んでも…え、えやん…。つと…

「頭押さえつけられたら寝られへんやん」

「コ、クリ…」

そんな状態でも喋らんと、頷くんやなあ。

「いい、からっ、倒れて来ないっで！」

オレと康太の頭を必死に押さえ込んで ぷるぷる してるキノと、意地でも柔らかそう且つ良い匂いのしそうな太股に飛び込もうとするオレら。力と力がぶつかり合って三者三様に ぷるぷる したる。キノ……………。力強えな…………。

「あ、姉上落ち着くのじゃ！ ぼそっ 地が出ておる」

「！ご、ごめんなさいね？ いきなりの事で取り乱しちゃったみたいで」

綺麗にオレ達を弾き返して取り繕っていたが、不意に続けるのは康太。

「…………俺はどんな趣味を持っていようと気にならない」

「ん？ 急に何を…………」

「…………ラッキ ドッグ1、咎犬 血」

「！」

ビクッ と反応したな。なんや？

「明久×雄二もしくは、明久×巧。つまり、明久のへたれ攻」

「何言ってるの！？ 吉井君は、坂本君にも山崎君にも攻められた方が映えるのよ！」

「何言ってるの…………？」

康太のセリフを食い気味に話出したキノに、オレも明久も思わず

……

「何の話をしているんですか？」

「へー!? な、なななんでもあなうわよ!？」

「噛み過ぎや。 “なんでもないわよ” って言おうとしたんやろおけど、…ナウって……。どこの板に呟いた……ブログか……？」

「とりあえず食べませんか？」

姫路がほんわかと促す。

「さつさとしろ、バカ共。俺は腹が減って仕方がないんだ」

「……雄二。次回は私のを食べさせてあげるから、今回は我慢して？」

「俺は一言もおまえの弁当が食いたいって言ってないんだが？ どう解釈すればそんな解答を導き出せる」

「…… 真実はいつも一つ」

Aクラス代表シヨウゴ! 改め 迷探偵コンナン! 将又迷惑  
はた  
かつ!!

「因みに、その真実ってのは……」

「……どのようなものであっても、雄二に結び付けられる」

「おまえは意識してやってるってのか? だとすれば最悪 既に  
最悪(ごうあつ)!? ……」

雄二……。チャレンジャー過ぎる。

「ウチのも良かったら食べてね?」

「うん、ありがと。いただくわ」

雄二が極められてる前で平然と。っつーか、島田とキノは涙も流さず。いつも通りの会話。おまえらバイオレンスな出来事に慣れてんな？

ま、とにかく食うか。いつまでたつても進まねえ。

「おーい。おまえら食うぞ？」

やっと温和しくなった。よし。

「んじゃ、手を合わせて」

「え？」

「キノ、早よ」

「もうそれで固定なのね」

みんなOKみたいやな。

「いただきます」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

オレは日直もしくは給食係か？

「ははっ。なんか懐かしいねー」

「確かにね。こんな事しないわよ、普通」

「何を持って普通とするかは、人それぞれやん？」

懐かしいがってる工藤に呆れ声をあげるキノ。

オレの言葉を康太が継ぐ。

「……それとも、個性を殺せと？」  
「そんな事言つてないわよ。アンタら二人は特に個性的だと思ってただけ」

同じクラスの工藤にさえ猫被つてるクセに、オレと康太のことはめんどくさくなったのか、衣きぬを着せない言い方に変わってる。姫路が赤くなってる。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

『おおー』

重箱の蓋を開けたら、みんなから声が漏れた。をつ。確かになあ。姫路のは豪華な膳ぜんって感じやしな。

「うちも、妹以外に弁当作つたの初めてだし……あの、…瑞樹みた  
く豪華でもないから……」

世話焼けんなあ、コイツら。ったく……

「ぼそっ 明久」

目で送り出す。明久から島田に視線送り、顔も僅かに動かした。

「え、あ、うん。……美波」

「ビクッ な、何？」

今、姫路も…？ 気のせいかな。

「作って来てくれただけで嬉しいし、誰も文句なんて言わないよ。もし言ってきたら、僕がぶっ飛ばすし。あ、女の子なら怒るだけになるだろうけど」

「う、うん。ありがと、アキ」

なんか、こっちまで緊張してくるくらい蓋を丁寧に開けてる。落ち着くんやー島田ー。

で。島田のは……。おー。妹に作ってあげてるだけあってきつちりしてる。てか、可愛い弁当やな。タコさんウィンナーとか、ミートボールにハート型の串が刺さってたりとか、ウサさん林檎とか……。子供の弁当と旦那さんの弁当を一緒に作ったみたいやな、まるで。

「……め、召し上がれ」

「……お、おう……」

秀吉は声に出さなかったけど、秀吉を含めた男子陣は少し赤くなっただ。

だって島田が、耳まで真っ赤にしながら上目遣いでこっちを伺いつつゆーんやもん。なんだこの可愛い生物は。

「……悔しいけど勉強になる。私だって」

「ホントにね…… ぼそっ 作る相手がいないけど」

「島田さんって可愛いねー。 ぼそっ ボクだったらどうなんだろう？ っん……」

なんか女子勢が ぼそぼそ と……ええけどや。

みんなと弁当をつつきながら改めての自己紹介。そこで霧島が、私は雄二のものって言った瞬間に男子共は殺意を送ってた。もち、

オレも。その後は親交を深める為に会話してたんやけど……

「はい？ もう一度聞くわ。盗撮が趣味のあなたがプロのカメラマンになりたいって事で合っているのよね？」

「……ああ。前半は知らないが、写真を生涯の仕事にするつもりだというのは確かだ」

キノと康太の二人で話してたみたいやけど、気づいたらみんな静かになって話聞いている。

「へえー……。一応部活にも所属してるけど、行ってないんだって聞いたけど？」

「……それがどうした」

「言ってること矛盾してないかしら？ 写真に関する部活を蔑ろにしてるじゃない」

「……部活だと縛られることも多い。だから、個人で出かけることが多いだけだ」

「ふん、よく言うわね」

「……おまえに言われる筋合いは無い」

キノ、イラッ ってしたな。

「はっ。そんなので食べていけるワケ無いじゃない。馬鹿なんじゃないの？」

はあ？ コイツ……人の夢馬鹿にするんか？

「……何でそう決めつける」

「そんなの一握りよ？ どれだけの人間がいると思ってるの？ ムリよ、ムリ。無駄なの。そんな事している暇があるなら勉強すれば？ バカな将来を送るわよ？」

「……はあ……仕様もない女だな」

言っねえ、康太も。

「はア！？ 何ですって！？ アンタ、喧嘩売ってるワケ？」

「あ、姉上」

「秀吉、アンタは黙ってなさい！ アタシはコイツと話があんの」

「…仮面が被りきれしていないぞ？ 木下優子」

「っ！……」

「……おまえは、夢を持っているのか？ 持っていないだろ？」

「…それが何だったのよ」

「……だから秀吉のことも理解できない、しょうとしない」

「姉弟でもないアンタに、とやかく言われたくは無いわ！」

キノ……、だいぶ余裕なくなっとな。

「……友だ」

「は？」

「……秀吉は、俺の友達だ。友の夢を応援してやらなくてどうする」

ははっ。康太かけーよ。秀吉なんか泣きそうやし。

「……おまえは、夢を見つける努力はしたのか？」

「……」

キノ黙り込んだ。てことは凶星か？　なんかあったのかもしらんけど。

「……“夢も持っていないアンタに、とやかく言われたくは無い”」

意図して、キノの言っていた言葉を使って締め括った。

「セに……」

「……？」

「何も……何も知らないクセにつ……！」

「……優子……」

霧島も心配そうに見つめてる。興奮状態だったからか、キノが息を切らしてる。

「……はあ、はあっ……うっ……ぷ……はあっはっ……気分が悪いから帰らせてもらっわ」

「お、おい！」

雄二も気まずそう。　キョロキョロ　視線をさ迷わせて見たけど、何より肌で感じる。

あちゃ……、変な空気なっでんで。

「美波ちゃん、ハイっ。美波ちゃんへ特別に作りました。デザートです」

「え？　ありがとう、瑞樹」

やのに、島田と姫路は切り替え早いな。

「ボク、優子と話してみるよ。同じクラスだしね」

「……すまない」

「…私もフォローする」

「ああ、頼む」

「ワシもフォローするぞい。できる限りじゃが」

「僕だったら上手くできないと思うし、秀吉お願いね」

「うむ。あい解った」

「もちろん、オレも手え貸すから」

他のみんなもか。ええやつらやな。

「女の子は美波ちゃんだけだと思っていたので、美波ちゃんのだけしかありませんけど」

「そうなんだ。けど、せつかくだしいただくわね」

姫路は天然つつーか、マイペースつつーか……。てか、まだ食うんかい。

ボタン…

あれ？ 他のみんなは気づいてない。けど、今なんか……え……？

「へ……？」

オレから空気の抜ける様な音が漏れた。

何となくドアの方見たら木下優子が倒れてた。

第二十五問 おろ？ 康太がえらいカッコいいんやけど…。

…え？ なん

ヒヨウガさん、蒼龍一さん、暮灘雪夜さん。感想ありがとうございます。  
ざいます。

皆々様。お待たせいたしました。一月ぶりでしょうか？

レフェルさん家の子らとのコラボしてます。

レフェルさん、違ってたらダメ出しお願いします。

よかったです。

金色の髪でふわふわツイントールで茶色の瞳。体系は小柄で目は少し垂れ目。150cmのCカップ。

笑顔の素敵なみんなの妹、真希ちゃん。その真希ちゃんが、目付きの鋭いという言い方が生ぬるいくらい鋭い目のした男、巧を慰めていた。

「よしよし、カステラ食べる？」

「ありがとお」

巧の関西訛りのありがとくに、追加でプリンもあげたとか。巧を慰める真希、激写！！ されていたらしく……

「……巧、貴様には尋ねたいことが色々ある」

康太に詰め寄られていた。巧の隣には真希もいるからなおさらに。

「いや、オレは別にあれや。これは真希ちゃんがノリでやっただけやっつて、な？」

「あたしみたいなちみっこいのが好きなんだつて。ツインちゃんを愛人にしてるみたいだしね」

「「「なんだつて?!?!?」「」」

「山崎君……ちんまい子に手をだすなんて……ロリ好きなの?」

真希とは逆サイドから声をかけて来たのは、銀色のロングヘアで黒色の少しだけ垂れ目な瞳が中性的で可愛い美少女。

今にも「呆れた」と言い出さんばかりの表情をしているのは、周防<sup>あつ</sup> 苓<sup>れあ</sup> 亜<sup>あ</sup>。

「ちよつ！ おまつ… オレは」

「巧くんと愛人ですすつ」

ツインが巧の言葉を遮って入り込む。

「おおいつ!?!?」

クスツ と僅かに笑って巧を追い詰める苓亜。

「本人がそう言ってるけど？ しかも、別のところには許嫁がいるとか」

「「「何イツ!?!?!?」「」」

「巧、僕は巧のことを信じていたのに……酷い裏切りだよ！」

「……もう我慢ならない」

「遊びが過ぎたみたいだな？」

明久らの反応に、巧は凶悪な笑みを作った。

「はっ。そうかそうか……だがオレはただで引くつもりは無いッ！」

巧は大きく息を吸って、大声で叫ぶ。

「うわっ、おまえら酷いな。霧島と島田に姫路まで泣かしたんかよ  
！！ 男として恥ずかしくねえのかっ」

「「「はあ!?!?」「」」

「今ここにおらんのは、今も涙を流して」

「へえ……。オレ、いくら明久でも許せることと許せないことがあ  
りますよ?。」

「亮!?!?」

「右に同じく」

「翔夜もか!」

黒髪に赤色のメッシュがはいつていて黒色の瞳をした姫路 亮。

霧島翔子とそっくりな男は、霧島 翔夜。180もの身長と笑顔を絶やさない頬笑みの貴公子と言われている。が、今はまがまがいオーラが見える気がする……。

と、対峙したところで……

「いい加減にしなさいっ!」

男子陣の頭から水が被せられた。

「これ以上続けるっていうんだったら……ね？」

「……………はいっ！」「……………」

真希の笑顔に阿修羅を見た明久達は、敬礼をする勢いだ。

「熱くなりすぎ。少しは頭を冷やすのね」

「って、周防もやん」

「そうだったっけ？」

苓亜は、またクスツと笑う。吉井明久に引けを取らないバカ。

“あの顔でお人好しだったっていうのがまた……”と再度笑いそうにな  
って思った。今日は良く笑う日だと。

「たまには悪くないのかもね」

漣は、また驚くのだろうと、その事を思い浮かべてもまた笑みが  
零れそうになる。

「ホソット、良く笑う。…あ、バイトの時間」

周防苓亜にどんな変化があったのか、今日は悪く無いと  
思っ  
てい  
ずれ  
思い  
返す  
こと  
にな  
る。

それはきつと、遠くない未来。

彷徨う狼に、幸あれ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6354o/>

---

バカとドアホと凶悪な顔

2011年10月6日16時32分発行